

Ⅲ 実施報告書

1 現状と研究課題① 自主性・課題発見能力の涵養

躰や道德教育を通じた女子教育を基盤とした「食育」の実績や、全国レベルの活躍をしている部活動などが地域社会から高い評価を得てきたが、自主的に課題を見つけ行動できる生徒はまだ少ない。社会貢献活動や自己研鑽活動に関する情報及び機会を適切に提供し、参加を促すことで自主性を伸ばすと共に課題を自ら発見しそれに取り組もうとする意欲を涵養することが必要である。

1-(1) 仮説①

「自主性・課題発見能力の涵養」を行うためには、高校1年次の初期の段階から幅広い知識の獲得をさせる機会を設けることに加えて、広範な知識の中から世界規模での課題を見出し、取り組むべき課題の抽出ができるような機会を提供すべきである。また、そうした世界規模での課題を見出し、取り組むべき課題の抽出にあたっては、海外留学生等との交流（ディベート等を含む）を通じてグローバルマインドを醸造させることが、さらなる自主性・課題発見能力の涵養へつながると考える。

1-(2) 実践

- a SG 講演や講座の実施
- b SG クラブ（課外）の実施
- c グローバル・キャンパスの実施

1-(2)-a SG 講演や講座の実施

目的

高校1年次の初期の段階から幅広い知識の獲得をさせる機会を設けるべく、連携する国際機関や企業・大学等から講師を招き、様々な観点から「食」に関わる世界規模での問題について学ぶ機会を得る。

実践した取り組み

<1> SG 講座①

[講師] 津田 晶子 氏

中村学園大学短期大学部食物栄養学科准教授

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

[対象] 高校1年希望者（希望者）34名

[日時] 8月7日(水) 13:30～15:00

[場所] コンピュータ教室

<2> SG 講座②

[講師] 衛藤 智仁 氏 ほか 立命館アジア太平洋大学 ハビタット APU

[対象] 2年 SG クラス・高校1年生徒（希望者）53名

[日時] 9月19日(木) 16:20～17:55

[場所] 視聴覚室

<3> SG 講演

[講師] 白駒 妃登美 氏 株式会社ことほぎ 代表取締役

[対象] 中学1～3年生および高校1～2年生

[日時] 12月16日(月) 10:50～12:00

[場所] 講堂

<4> SG 講座③

[講師] 渡辺 大輔 氏 「渡辺大輔有限公司」 董事総経理

[対象] 2年 SG クラス・新 SG クラス内定者

[日時] 1月15日(水) 16:20～17:50

[場所] 講堂

実践の詳細

<1> SG 講座①

[講師] 津田 晶子 氏 中村学園大学短期大学部食物栄養学科准教授

[テーマ] 「英語で楽しむ日本の食文化」

[内容]

レシピの読み方、英検の問題にみられる「食」のテーマについて、コンピュータを使いながら体験型で学ぶ

[事前課題]

1. あなたの家にイギリスの高校生が1週間、ホームステイすることになりました。
あなたはどんな和食を紹介してあげたいですか。
自由に書いてみましょう。（日本語、英語、どちらでも可）
2. 家の台所や冷蔵庫の中の食材や調味料、10個以上を英語で書いてみましょう。

[事後課題]

1. 50語から60語で書きましょう。
Question: Do you think it is better for people to eat at restaurants or at home?
2. “Food” に関する質問について、4つ選び、答えてみよう。
(1つの答えにつき、センテンスは2つ以上)

SG 講座① 事後アンケート		※（ ）内の値は %			
		非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q1	「英語」に触れる抵抗感はない。	12 (41.4)	11 (37.9)	2 (6.9)	0 (0.0)
Q2	「英語」習得の必要性を感じた。	20 (69.0)	9 (31.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q3	グローバルな環境では「英語」は必要だと思う。	25 (86.2)	3 (10.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q4	「英語」の「読む・聞く・書く・話す」能力を身につけたい。	24 (82.8)	5 (17.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q5	今後、「英検」などの英語の検定を受検したい。	27 (93.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q6	日本語、英語に関わらず「表現力」は重要だと思う。	19 (65.5)	10 (34.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q7	論理的に考える能力は重要だと思う。	12 (41.4)	14 (48.3)	1 (3.4)	0 (0.0)
Q8	高校の通常授業でなされている教科の基礎的項目の理解は重要だと思う。	13 (44.8)	13 (44.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q9	日本語、英語に関わらず、自分の考えを他人に発信することは重要だと思う。	17 (58.6)	12 (41.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q10	日本語、英語に関わらず、他人の意見を正確に読み取る（聞き取る）ことは重要だと思う。	18 (62.1)	11 (37.9)	0 (0.0)	0 (0.0)

[アンケート分析]

全項目で肯定的回答が高い値を示している。特に、Q2・Q4・Q6・Q9では肯定的回答が100%となっている。このことから本講座を通して自分の考えを発信するためには、発信するための道具である英語などの外国語の習得や表現力を身につける必要があるという意識を醸成することができたと考えられる。

<2> SG 講座②

[日時] 9月19日(木) 16:20～17:55

[講師] 衛藤 智仁 氏 ほか 立命館アジア太平洋大学 ハビタットAPU

[内容] 貧困地域での住居建築ボランティアの活動報告・世界の貧困問題の現状について

[アンケート]

SG 講座② 事前アンケート		※（ ）内の値は %			
		非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q1	私は日本の問題やニュースに関心を持っている。	14 (25.9)	28 (51.9)	1 (1.9)	0 (0.0)
Q2	私は世界の問題やニュースに関心を持っている。	19 (35.2)	22 (40.7)	2 (3.7)	0 (0.0)
Q3	私は世界における日本の役割について興味がある。	20 (37.0)	27 (50.0)	2 (3.7)	0 (0.0)
Q4	国際社会における日本の役割について知ることは、私自身の将来に役に立つ。	25 (46.3)	20 (37.0)	2 (3.7)	0 (0.0)
Q5	国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある。	13 (24.1)	23 (42.6)	4 (7.4)	0 (0.0)
Q6	国際社会において、日本が直面している課題について、何かアクションを起こしたい。	9 (16.7)	27 (50.0)	1 (1.9)	0 (0.0)
Q7	日本社会が抱える貧困などの社会問題について、「解決したい」という意思がある。	17 (31.5)	29 (53.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q8	SG コースでの学びは、国際社会や日本社会が抱える課題について知るきっかけになる。	34 (63.0)	16 (29.6)	0 (0.0)	1 (1.9)
Q9	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	18 (33.3)	24 (44.4)	3 (5.6)	0 (0.0)
Q10	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	22 (40.7)	23 (42.6)	0 (0.0)	0 (0.0)

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

SG 講座② 事後アンケート		※（ ）内の値は %			
		非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q11	私は今後、日本の問題やニュースへの関心が強くなった。	32 (59.3)	20 (37.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q12	私は今後、世界の問題やニュースへの関心が強くなった。	39 (72.2)	13 (24.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q13	私は世界における日本の役割について色々と調べてみたい。	30 (55.6)	23 (42.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q14	国際社会における日本の役割について知ることは、私自身の将来に役に立つと強く感じている。	31 (57.4)	21 (38.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q15	国際社会において、日本が直面している課題を調べ、解決策を考えたい。	25 (46.3)	26 (48.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q16	国際社会において、日本が直面している課題に対して具体的なアクションを起こしたい。	27 (50.0)	22 (40.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q17	日本社会が抱える貧困などの社会問題について、「解決したい」という意思がある。	29 (53.7)	23 (42.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q18	SG コースでの学びは、国際社会や日本社会が抱える課題について知るきっかけになる。	41 (75.9)	10 (18.5)	0 (0.0)	1 (1.9)
Q19	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたい。	25 (46.3)	23 (42.6)	2 (3.7)	0 (0.0)
Q20	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたい。	32 (59.3)	19 (35.2)	0 (0.0)	0 (0.0)

[アンケート分析]

事前アンケートの Q3「私は世界における日本の役割について興味がある」では、肯定的回答をしている生徒が 87.0%、Q8「SG コースでの学びは、国際社会や日本社会が抱える課題について知るきっかけになる」では、肯定的回答をしている生徒が 92.6%と高い値を示している。しかし、Q5「国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある」と Q6「国際社会において、日本が直面している課題について、何かアクションを起こしたい」では、肯定的回答している生徒が共に 66.7%と他の項目に比べて低い値となっている。このことから、国際社会における日本の役割に関心があるものの、普段の生活の中では身近な課題として捉えることが難しく、SG コースでの学びに意義を見出していると考えられる。

事後アンケートではどの項目も肯定的回答が高い値を示している。特に事前アンケートと比較したとき、肯定的回答が Q1 と Q11「私は今後、日本の問題やニュースへの関心が強くなった」では 18.5 ポイント、Q2 と Q12「私は今後、世界の問題やニュースへの関心が強くなった」で 20.4 ポイント、Q5 と Q15「国際社会において、日本が直面している課題を調べ、解決策を考えたい」では 27.7 ポイント、Q6 と Q16「国際社会において、日本が直面している課題に対して具体的なアクションを起こしたい」では 24.0 ポイントと大幅に上昇している。このことから、今回の講座によって、日本や世界で起きている問題などに興味を持つだけでなく、「実際に自分で解決策を考え、行動に移そう」という前向きな姿勢を引き出せたと考えられる。

<3> SG 講演

[日時] 12月16日(月) 10:50~12:00

[講師] 白駒 妃登美 氏 株式会社ことほぎ 代表取締役

[趣旨]

生徒の国際意識の醸成の一環で、国際舞台で活躍する方々を講師として招聘し、生徒たちのキャリア選択・国際理解啓発を目的に講演会を実施し、生徒たちが各自の進路や国際社会についての視野をより広げられるようにすることを目的とする。

[内容]

- ① “真の国際人”とは？ ～海外に出て気づかされたこと～
- ② 世界最古の歴史を持つ国・日本
- ③ 国歌、国旗にまつわる物語
- ④ 先人たちが大切に育んできたもの
- ⑤ 日本文化の素晴らしさ、そして世界から注目される和食の魅力
- ⑥ 世界に誇る日本のおもてなし
- ⑦ いつも心に太陽を！

[アンケート]

SG 講演 事前アンケート			※（ ）内の値は %			
			非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q1	私は日本の問題やニュースに関心を持っている。	高1	46 (13.4)	228 (66.3)	70 (20.3)	0 (0.0)
		高2	51 (14.5)	209 (59.9)	87 (24.8)	4 (1.1)
Q2	私は世界の問題やニュースに関心を持っている。	高1	43 (12.5)	194 (56.4)	103 (29.9)	4 (1.2)
		高2	50 (14.3)	176 (50.1)	120 (34.2)	5 (1.4)
Q3	私は日本史について興味がある。	高1	43 (12.5)	160 (46.5)	130 (37.8)	11 (3.2)
		高2	36 (10.3)	124 (35.3)	137 (39.0)	54 (15.4)
Q4	私は世界史について興味がある。	高1	44 (12.8)	151 (43.9)	138 (40.1)	11 (3.2)
		高2	26 (7.4)	112 (31.9)	151 (43.0)	62 (17.7)
Q5	歴史を学ぶことは重要である。	高1	89 (25.9)	198 (57.6)	53 (15.4)	4 (1.8)
		高2	64 (18.2)	195 (55.6)	74 (21.1)	18 (5.1)
Q6	国際社会を生きるうえで日本を知ることは大切である。	高1	139 (40.4)	192 (55.8)	13 (3.8)	0 (0.0)
		高2	106 (30.2)	226 (64.4)	18 (5.1)	1 (0.3)
Q7	国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある。	高1	55 (16.0)	169 (49.1)	116 (33.7)	4 (1.2)
		高2	61 (17.4)	174 (49.6)	102 (29.1)	14 (4.0)
Q8	日本の文化や食は世界に誇れるものである。	高1	170 (49.4)	164 (47.7)	9 (2.6)	1 (0.3)
		高2	137 (39.0)	196 (55.8)	17 (4.8)	1 (0.3)
Q9	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	高1	62 (18.0)	191 (55.5)	83 (24.1)	8 (2.3)
		高2	60 (17.1)	168 (47.9)	109 (31.1)	14 (4.0)
Q10	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	高1	50 (14.5)	150 (43.6)	126 (36.6)	18 (5.2)
		高2	38 (10.8)	121 (34.5)	165 (47.0)	27 (7.7)

SG 講演 事後アンケート			※（ ）内の値は %			
			非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q11	私は日本の問題やニュースに関心が強くなった。	高1	121 (35.2)	206 (59.9)	15 (4.4)	2 (0.6)
		高2	90 (26.6)	219 (64.8)	28 (8.3)	1 (0.3)
Q12	私は世界の問題やニュースに関心を強くなった。	高1	106 (30.8)	214 (62.2)	23 (6.7)	1 (0.3)
		高2	85 (25.1)	210 (62.1)	40 (11.8)	3 (0.9)
Q13	私は日本史について、もっと勉強しようと思った。	高1	127 (36.9)	189 (54.9)	24 (7.0)	3 (0.9)
		高2	105 (31.1)	178 (52.7)	48 (14.2)	7 (2.1)
Q14	私は世界史について、もっと勉強しようと思った。	高1	104 (30.2)	203 (59.0)	33 (9.6)	4 (1.2)
		高2	68 (20.1)	197 (58.3)	64 (18.9)	9 (2.7)
Q15	歴史を学ぶことはとても重要であると感じた。	高1	185 (53.8)	146 (42.4)	13 (3.8)	0 (0.0)
		高2	121 (35.8)	190 (56.2)	27 (8.0)	0 (0.0)

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

Q16	国際社会を生きるうえで日本を知ることは大切である。	高1	203(59.0)	137(39.8)	4(1.2)	0(0.0)
		高2	152(45.0)	175(51.8)	11(3.3)	0(0.0)
Q17	国際社会において、日本が直面している課題を調べ、解決策を考えたい。	高1	99(28.8)	208(60.5)	35(10.2)	2(0.6)
		高2	87(25.7)	198(58.6)	49(14.5)	4(1.2)
Q18	日本の文化や食のすばらしさを世界にアピールしていきたい。	高1	132(38.4)	192(55.8)	19(5.5)	1(0.3)
		高2	114(33.7)	187(55.3)	36(10.7)	1(0.3)
Q19	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたい。	高1	115(33.4)	181(52.6)	44(12.8)	4(1.2)
		高2	101(29.9)	177(52.4)	56(16.6)	4(1.2)
Q20	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたい。	高1	106(30.8)	159(46.2)	73(21.2)	6(1.7)
		高2	82(24.3)	165(48.8)	83(24.6)	8(2.4)

[アンケート分析]

事前・事後アンケートを照らし合わせてみると Q1「私は日本の問題やニュースに関心を持っている」で肯定的回答が高1：79.7%、高2：74.4%であり、Q11「私は日本の問題やニュースに関心が強くなった」で肯定的回答が高1：95.1%、高2：91.4%という数値となった。Q2とQ12でも同様の傾向が見られる。また、Q7「国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある」で肯定的回答が高1：65.1%、高2：67.0%であり、Q17「国際社会において、日本が直面している課題を調べ、解決策を考えたい」で肯定的回答が高1：89.3%、高2：84.3%という数値となった。これから読み取れることは講演前も高い数値であったがどの項目も講演後に非常に高い数値を示している。日本の課題が抱えている問題点に関してほとんどの生徒が強く関心を持つようになったということが分かる。

さらに事前・事後ともにアンケートで高い数値を示した、Q6、Q16「国際社会を生きるうえで日本を知ることは大切である」（肯定的回答【事前】高1：96.2%、高2：94.6%、【事後】高1：98.8%、高2：96.8%）、Q8「日本の文化や食は世界に誇れるものである」（肯定的回答 高1：97.1%、高2：94.8%）、Q18「日本の文化や食のすばらしさを世界にアピールしていきたい」（肯定的回答 高1：94.2%、高2：89.0%）について、本校のほとんどの生徒がそもそも日本に関心が高く、肯定的意見を持っているということがわかった。講演を行うことにより、そのことについて再確認することができた。

高1、高2の学年間の割合において数的較差は小さく、どの質問もほぼ同様の数的推移が見られる。

<4> SG 講座③

[日時] 1月15日(水) 16:20～17:50

[講師] 渡辺 大輔 氏 「渡辺大輔有限公司」 董事総経理

[趣旨]

様々な立場や経験を持つ方々の話を聞くことで、視野を広げるとともに、海外への興味を喚起する。

[内容]

海外で働くことや現地の方と交流する醍醐味などについて

[アンケート]

SG 講座③ 事前アンケート		※（ ）内の値は %			
		非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q1	私は国際的な問題やニュースに関心を持っている。	12 (28.3)	22 (41.5)	4 (7.5)	0 (0.0)
Q2	私は国際社会における日本の役割について興味がある。	15 (28.3)	21 (39.6)	5 (9.4)	0 (0.0)
Q3	国際社会における日本の役割について知ることは、私自身の将来に役に立つ。	18 (34.0)	18 (34.0)	5 (9.4)	0 (0.0)
Q4	国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある。	11 (20.8)	24 (45.3)	6 (11.3)	0 (0.0)
Q5	国際社会において、日本が直面している課題について、何かアクションを起こしたい。	10 (18.9)	24 (45.3)	7 (13.2)	0 (0.0)
Q6	国際社会における日本の立場・役割を知るために、英語（母語以外の言語）を学ぶことは重要だ。	27 (50.9)	12 (22.6)	2 (3.8)	0 (0.0)
Q7	日本社会が抱える課題について、「解決したい」という意思がある。	17 (32.1)	21 (39.6)	3 (5.7)	0 (0.0)
Q8	将来は、海外に住んで、仕事（生活）がしてみたい。	17 (32.1)	15 (28.3)	9 (17.0)	0 (0.0)
Q9	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	23 (43.4)	14 (26.4)	4 (7.5)	0 (0.0)
Q10	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	21 (39.6)	17 (32.1)	3 (5.7)	0 (0.0)

SG 講座③ 事後アンケート		※（ ）内の値は %			
		非常に そう思う	そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q11	私は国際的な問題やニュースに関心を持っている。	22 (41.5)	24 (45.3)	1 (1.9)	0 (0.0)
Q12	私は国際社会における日本の役割について興味がある。	24 (45.3)	21 (39.6)	1 (1.9)	1 (1.9)
Q13	国際社会における日本の役割について知ることは、私自身の将来に役に立つ。	32 (60.4)	15 (28.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q14	国際社会において、日本が直面している課題について考えることがある。	23 (43.4)	21 (39.6)	3 (5.7)	0 (0.0)
Q15	国際社会において、日本が直面している課題について、何かアクションを起こしたい。	22 (41.5)	23 (43.4)	2 (3.8)	0 (0.0)
Q16	国際社会における日本の立場・役割を知るために、英語（母語以外の言語）を学ぶことは重要だ。	34 (64.2)	13 (24.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q17	日本社会が抱える課題について、「解決したい」という意思が増した。	24 (45.3)	22 (41.5)	1 (1.9)	0 (0.0)
Q18	将来は、海外に住んで、仕事（生活）がしてみたい。	27 (50.9)	20 (37.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q19	将来は、日本社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	23 (43.4)	21 (39.6)	3 (5.7)	0 (0.0)
Q20	将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている。	26 (49.1)	19 (35.8)	2 (3.8)	0 (0.0)

[アンケート分析]

事前アンケートの Q6「国際社会における日本の立場・役割を知るために、英語（母語以外の言語）を学ぶことは重要だ」では 73.5%、Q7「日本社会が抱える課題について、「解決したい」という意志がある」では 71.7%、Q10「将来は、国際社会に貢献できる仕事に就きたいと考えている」では 71.7%と、それぞれ肯定的回答の数値が高い。しかし、Q8「将来は、海外に住んで、仕事（生活）がしてみたい」の肯定的回答は 60.4%とその他の項目よりも低い値となっている。

このことから、日本だけでなく国際社会の問題などに興味・関心を持っており、その情報を得るためには英語（母国語以外の言語）を学ぶことが重要だと感じている生徒が多いが、普段の生活の中で、自身が海外で仕事をしている姿をイメージすることは難しいと考えられる。し

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

かし、事後アンケートでは、Q8 では肯定的解答が 28.2 ポイント上昇しており、講座を通して、海外で仕事をするに関して具体的にイメージできるようになったと考えられる。

1-(2)-b SGクラブ（課外）の実施

目的

SG 講演で得た広範な知識を活用し、留学生等とのディスカッションやディベートを通じて、「食」に係る世界規模の課題を自ら見出していく契機とする。

実践した取り組み

- ▶ 2年次から設ける「SG クラス（正課）」の準備組織「クラブ活動」としての設置。
- ▶ 学年全体を対象とした SGH 活動以外に、課外活動の一環として「姉妹校・留学生との交流」、「ボランティア活動」、「文化祭企業コラボ」など様々な活動に取り組む。
- ▶ 全員高校 1 年生で、22 名が所属。

実践の詳細

[活動形態]

- ▶ 活動日：毎週金曜日
趣旨説明、関連情報提供、参加希望者確認とグループ編成、進捗状況報告 など
- ▶ 生徒を主体とした活動
プロジェクトの計画、準備、実施、運営は全て生徒自身が管理

[主な活動実績と内容]

日程	主要活動内容	対象
4月26日	クラブ説明会	全部員
5月13日	クラブ活動①（開始、役職決め）	〃
5月24日	クラブ活動②（話し合い、企業コラボについて）	〃
6月7日	クラブ活動③（テーマ・コラボ企業の調査、選択）	〃
6月14日	クラブ活動④（コラボ企業の調査、選択・食のサミット）	〃
6月18日	Fukuoka American Center's English Discussion Club	有志部員
6月21日	English Camp 説明会参加	〃
6月24日	クラブ活動⑤（食のサミット準備）	全部員
7月13日	食のサミット フェアウェルパーティー	有志部員
7月19日	クラブ活動⑥（企業コラボ 企画書作成）	全部員
8月28日	クラブ活動⑦（企業の決定、商品開発案、訪問計画）	〃
9月29日	クラブ活動⑧（新宮セントラル工場見学）	〃
10月5日	文化祭	〃
10月10日	クラブ活動⑨（文化祭の反省）	〃
11～12月	次年度 SG クラス生徒の選考	一部の生徒

[内容詳細]

SG クラブ説明会 4月26日

入部希望者に SG クラブの意義と活動内容を伝えた。生徒一人ひとりがなぜ SG クラブを希望したか自己紹介を行い、今後の共同活動に向けて意識の統一を図った。クラブ活動を通して、個人個人がグローバルな視点で物事を考える力が身につくことを紹介した。

クラブ活動①（開始、役職決め） 5月13日

第1回目の活動として、自己紹介を行った後、SG クラブで活動したいこと・活動を通して学びたいことをアンケートで調査した。SG クラスを目指して、英語学習や探究活動、国際交流を望む生徒が多く部活に加入してきた。部長、副部長、会計係という部活動の役職を話し合いで決めた。合議形式で話し合ってもらい、自分たちの組織にふさわしい人選を行わせた。

クラブ活動②（話し合い、企業コラボについて） 5月24日

高校1年生は iPad を全員所持しているため、連絡等も iPad を活用することを決めた。後半は企業コラボについて説明を行った。SG クラブの方針としては、「国際的に活動している企業ないし国際的に流通をしている商品を取り扱っている企業」かつ「地元・福岡で活躍し、地元経済を牽引する企業」に依頼することに決めた。

クラブ活動③（テーマ・コラボ企業の調査、選択） 6月7日

10月に行われる文化祭で、どのような活動と報告、展示や発表をするのか話し合った。図書館での文献探しや、iPad での検索・閲覧を行い、本年度は生徒の希望が多かった「スイーツ」の製品化の方向で考えた。

クラブ活動④（コラボ企業の調査、選択・食のサミット） 6月14日

iPad での検索・閲覧を行い、10月に行われる文化祭で、どのような活動と報告、展示や発表をするのかを再度話し合った。後半は、次期 SG クラス候補者として、食のサミットについても関わることを示し、具体的には投票箱の作成をすること等を説明した。

Fukuoka American Center's English Discussion Club 6月18日

福岡アメリカンセンターにて中・高・大学生を対象とした「英語ディスカッションクラブ」に参加した。英語を使いたいけど機会がない、留学に興味がある、放課後の時間を有効に使いたい、といった有志での参加となった。日本とアメリカ両方の大学で学んだ経験のあるゲストから、異なる価値観や文化について学び、英語で意見交換をした。うまく伝わらなかったこともあったが、「英語でコミュニケーションする」という経験は生徒の成長につながった。

English Camp 説明会参加 6月21日

担当業者による説明を有志が聴講した。

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

クラブ活動⑤（食のサミット準備） 6月24日

iPad を駆使して投票箱の作成を担当する国について調べ、実際の作成作業に取りかかった。

食のサミット フェアウェルパーティー 7月13日

SG クラスの在籍生徒との交流や、食のサミットに参加する他国や他校の生徒との交流を通し、今後の SG クラスへの展望につなげることができた。

クラブ活動⑥（企業コラボ企画書作成）7月19日

企画書の作成手順を知り、今回の企画に至った背景や目的を書く導入部分、現状分析・企画内容、売上目標、効果目標など具体的に記載することを学習した。その際、企画内容を実現するための方法や、必要経費や人員などのコスト、実施スケジュール、所要日数などを記載する必要性を理解し、作成に取りかかった。

クラブ活動⑦（企業の決定、商品開発案、訪問計画）8月28日

協力企業は「株式会社千鳥饅頭総本舗」に決まった。この企業は創業 1630 年（寛永 7 年）という歴史のある老舗菓子店であり、欧州の食品の国際品評組織「モンドセレクション」の菓子部門で特別金賞を 6 年連続受賞しており、まさにコラボに理想的な企業である。生徒は商品を何にするか、種類（焼き菓子・饅頭など）と味（抹茶、いちごなど）について話し合いをして、最もふさわしいもののアイデアを出し合った。自分たちが食べたいものをとというのも観点としてはあるが、「どうすればたくさん売れるか」「旬のものを活かした方がいいのか」「保存方法を考慮した方がいいのではないか」と多角的に商品開発をとらえることができていた。最後にいくつかのアイデアに絞った。さらに商品開発、試食、販売の値段や個数の決定等の文化祭までの日程を決めた。

クラブ活動⑧（工場、営業所訪問）9月29日

新宮町にあるセントラル店を訪問した。工場と連結している店舗で、お菓子の製造から管理、販売までの一連の工程を学ぶ上では最適の場所である。

担当者からの説明を受け工場見学を行った。まず始めに衛生管理の徹底ぶりに驚かされた。エプロン・マスク等は当たり前であるが、作業行程ごとに清浄化する部屋に入り、万一のことがないように心がけられていた。各作業部屋はほとんど機械化されており、ラインに沿ってお菓子ができていく様子に生徒は感心していた。一つのお菓子を作るにも、ヒーターと扇風機が幾つもライン上に整備され、温度の管理といったお菓子作りの上で最も繊細な部分にも細かな心遣いが見られ、これが高い品質管理に繋がっているのだと痛感させられた。最も大切な饅頭・洋菓子等の餡の部分はだけは手作業で行われており、熟練の職人の力強くかつ洗練された技術からは、技術革新が進んだ現在でも重要部分は人間が行っているという驚きがあった。何気なく食べているお菓子一つひとつが、極限にまで管理された品質維持と、経験からなる人間の英智によって支えられていることを学んだことは生徒にとって大きな学びに繋がったに違いない。最後は、梱包作業と保管・販売の様子を見学した。ラインで運ばれてきた製品がラッピングされていく機械に驚きを感じる一方で、それでも廃棄される製造失敗品の数に、何も問題なく生まれたお菓子というも

のも貴重だということを知った。梱包作業は手作業で、何人もの従業員で箱詰めされ倉庫に製品は運ばれていた。日頃見えていない部分にも人の手が加わっていることに、たくさん考えることがあったように思われる。

工場、営業所訪問を通じてわかったことは生徒それぞれでレポートにまとめ、文化祭当日の掲示物で外部に提示できるように準備することとなった。

文化祭準備 9月30日～10月4日

企業への訪問で多くのことを学ぶことができた生徒は、その学んだ成果と商品の歴史や文化について模造紙にまとめ、販売する場所に掲示する準備を行った。開発したオリジナル味のチロリアン販売を促進できるよう、模擬店の内装や販売の工夫（原料表示など）、当日の係分担を決めた。また文化祭の前日には、企業に訪問したときの写真を活用してスライドショーを作り、販売促進を行った。

文化祭 10月5日

文化祭当日。模擬店にどれほどの客が来るのか予想ができない中、開店直後から行列ができ、販売は順調に進んだ。コラボした企業のネームバリューやその期待もあるのだろうが、事前に広報活動をして、準備を進めていた生徒の努力の成果であろう。あつという間に用意していた商品は売り切れてしまい、生徒からは「もっと売りたいかった」という声も聞かれた。製品を作るための工夫や苦労はもちろん、販売促進のためにできることは何なのか考える機会につながった。生産から流通、そして消費。一つの商品から始まり、経済活動の原理を考察する貴重な経験になったのではないだろうか。

クラブ活動⑨（文化祭の反省） 10月10日

来年度へ向けて文化祭の反省と経験をどう活かしていくかを話し合った。結果的に販売は成功に終わったが、一人ひとりの積極性が足りなかった。しかし、実際に社会で働くことの意味を16歳で経験できたことは、生徒の成長に大きな影響を与えただろう。たくさんの感謝の気持ちを込めてお礼状を送付した。

次年度 SG クラス生徒の選考 11～12月

11月から12月にかけて、高校1年生では次年度のSGクラスの選考を行った。SGクラブからは22名の部員中15名という高い割合で進級することが決まった。部活動での体験を活かして、高校2年生からさらに本格的な探究活動などでリーダーシップの発揮が期待される。

1-(2)-c グローバル・キャンパスの実施

目的

食の様々な問題に関わる講座や留学生との宿泊研修などを通して、PBL型学習により地球レベルの環境問題や国際間の食の流通問題に探究テーマを見つけることで、自主性を持って世界規模での課題を発見・設定することのできるグローバル・リーダーを育成する。

主な活動実績と内容

[日程] A団：9月9日(月)～11日(水) B団：9月12日(木)～14日(土)

[場所] グローバルアリーナ (福岡県宗像市)

[対象] 高校1年生 (375名)

[参加者] A団：生徒186名、引率11名 B団：生徒189名、引率11名

[運営者] 立命館アジア太平洋大学の留学生 計30名

[研修内容]

各クラス8～10名程度のグループを作り、グループごとに1名のグローバル・リーダー (APUの留学生、以下GLと記す) と、クラスごとに1名のサポーターがつき、その指導のもとGL及び生徒同士での交流・協働学習を行う。PBLに基づく各プログラムにおいては英語を使つてのコミュニケーションを重視するが、その内容に応じて英語と日本語の比重を使い分ける。

本年度はアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生10名がA団に5名、B団に5名参加し、サポーターとして各クラスにつき、GLとの橋渡しの役割を果たした。

[事前学習]

5月13日(月) 生徒対象説明会 研修の趣旨・内容・探究テーマ決め

5月20日(月) 活動班・係と探究テーマ決定の指示

7月8日(月) 生徒対象説明会 探究テーマの決定後の事前学習取り組み説明

7月12日(金) 探究テーマの決定・事前学習取り組み開始

夏休み 探究テーマについて各自で調べ学習・1分スピーチ(英語)の準備・練習

8月21日(水) ルーブリックをClassiで生徒へ事前に配信

9月2日(月) 事前指導・研修のしおり配付・説明

[事前課題]

▶ 自己紹介スピーチ(英語)

▶ 「食」に関する調べ学習及びテーマの研究

各グループで4つのカテゴリー(食と栄養・食と社会文化・食と経済・食と環境)から1つ選択し、具体的な探究テーマを設定、それに基づいて個人で調べ学習を行い、探究レポートを作成する。英語でのプレゼンテーションを行うための準備・工夫を行う。

▶ 「グローバルタレントショー」で特技などを披露する有志を募集

[研修日程]

時間	1日目 (A:9/9 B:9/12)	2日目 (A:9/10 B:9/13)	3日目 (A:9/11 B:9/14)
7:00	X : 1, 4, 5 組、2, 3, 6 組 Y: 7, 10 組、8, 9 組	00 起床・洗面・寝具整理	00 起床・洗面・寝具整理
8:00		40 朝の運動・諸連絡【屋外】 50 朝食【ノーサイド】 清掃（各部屋） ※2～3クラスずつ入替 朝食Y7:50～ X8:20～	40 朝の運動・諸連絡【屋外】 50 朝食【ノーサイド】 清掃・チェックアウト 荷物を持って移動 ※2～3クラスずつ入替 朝食X7:50～ Y8:20～
9:00	00 学校集合 30 学校出発	00 ⑨スカベンジャーハント 【施設内各エリア】	30 ⑩グループワーク本選発表 (クラス代表による発表) 【武道場】
10:00		00 休憩 15 ⑩代表GLによる発表	20 休憩 30 ⑩研修の振り返り 自己分析シート記入
11:00	00 グローバルアリーナ到着 荷物移動（武道場） 15 Aクラス写真撮影 B着替え【武道場】 C昼食【ノーサイド】	00 ⑪グループワーク発表準備 【MTGルーム・武道場】	00 表彰式・修了式
12:00	※2～3クラスずつ入替 昼食X11:15～ Y12:00～ X : C→A→B Y : A→B→C	00 昼食【ノーサイド】 休憩 ※2～3クラスずつ入替 昼食Y12:00～ X12:30～	15 昼食【ノーサイド】 休憩 ※2～3クラスずつ入替 昼食X12:15～ Y12:45～
13:00	30 開校式【武道場】 入所式・GL紹介・自己分析シート記入 ①アイスブレイキング ②グループフラッグ作り	00 ⑫グループワーク発表準備	30 グローバルアリーナ出発
14:00	10 ③グループフラッグ発表 (クラス代表選出) 40 チェックイン・荷物移動 【宿泊棟】		
15:00	00 ④英語コミュニケーション 【MTGルーム】 (16:00～16:20 休憩)	45 ⑬グループワーク発表予選	00 学校到着・解散
16:00	20 ⑤異文化理解【武道場】 ※④⑤2～3クラスずつ入替 X : ⑤→④ Y : ④→⑤	30 ⑭GLとの自由交流	
17:00	20 ⑥振り返り 【武道場・MTGルーム】 40 夕食【ノーサイド】 入浴【大浴場】	30 夕食【ノーサイド】 ※2～3クラスずつ入替 夕食Y17:30～ X18:00～	
18:00	※2～3クラスずつ入替 夕食X17:40～ Y18:20～ 終了19:00	45 ⑮グローバルタレントショー 【武道場】	(連絡事項)
19:00	20 ⑦グループフラッグ発表 (クラス代表グループ) 【武道場】	45 ⑯1日のまとめ・諸連絡	
20:00	00 ⑧1日のまとめ・諸連絡	15 入浴【大浴場】 ※2～3クラスずつ入替 入浴Y20:15～ X20:50～ 終了21:25	
21:00	15 就寝準備【宿泊棟】	30 就寝準備【宿泊棟】	
22:00	00 点呼（各部屋） 消灯・就寝 30 職員ミーティング	00 点呼（各部屋） 消灯・就寝 30 職員ミーティング	
備考	※クラス集合写真撮影あり		

III 実施報告書－研究課題①

i. 大テーマ（共通）：「食に関する地球規模の課題」

ii. 小テーマ（班別）

Session	Class	Group	カテゴリー	探究テーマ
A 団	1	A班	食と栄養	和と洋の栄養バランスの違いとは？
		B班	食と社会文化	グローバル化による個々の食文化への影響とは？
		C班	食と環境	子どもと食の関係とは？
	4	A班	食と経済	こども食堂がなす役割とその必要性とは？
		B班	食と社会文化	各国の伝統料理が受け継がれた歴史的背景とは？
		C班	食と環境	食品ロスと地球温暖化の関係とは？
		D班	食と栄養	世界の肥満者を減らす食文化とは？
	5	A班	食と社会文化	世界各国の社会文化と食について
		B班	食と栄養	栄養をバランスよく摂れて痩せられる食事！！
		C班	食と経済	スマートフォンの普及によるスナック菓子への影響
		D班	食と環境	食品廃棄と、それについての改善策とは？
	7	A班	食と環境	スポーツ選手が摂るべき季節ごとの食事について
		B班	食と栄養	ダイエットと栄養
		C班	食と社会文化	世界の食文化
		D班	食と経済	飢餓について知ろう 1人でも多くの命を守るためには？
	10	A班	食と環境	ベストの健康的ダイエットとは
		B班	食と経済	ファーストフードと食料廃棄量の世界的課題とは
		C班	食と栄養	栄養は人間にどのような影響を及ぼすのか
		D班	食と環境	食品ロスと年々増加する食料廃棄物の解決策は
	B 団	2	A班	食と経済
B班			食と環境	食品ロスをなくすには？
C班			食と栄養	生鮮食品と冷凍食品の栄養価
D班			食と社会文化	郷土食を受け継いでいくにはどうしたらよいだろうか？
3		A班	食と社会文化	郷土料理のマンネリズムを救うには？
		B班	食と経済	アメリカと日本の食料自給率の関係とは？
		C班	食と栄養	外食と自炊の体に対する影響の差とは？
		D班	食と環境	どっちのきのこが毒きのこ？
6		A班	食と経済	先進国と発展途上国の経済格差
		B班	食と環境	地球温暖化による食への影響
		C班	食と社会文化	世界の食・・・発展途上国の食の質を上げるには
		D班	食と栄養	マックの栄養・・・私たちの体への影響とその改善方法
8		A班	食と環境	食品廃棄物をなくすには
		B班	食と経済	先進国と途上国「どちらでも作れる食」
		C班	食と社会文化	和食の保護・継承をするには
		D班	食と栄養	コンビニ食で高い栄養価を取れる1日の献立を作るには
9		A班	食と栄養	発展途上国と先進国の子供の栄養摂取量はどれだけちがうのか
		B班	食と経済	日本と世界の食品ロスの解決策
		C班	食と社会文化	世界で流行している食とは
		D班	食と環境	世界の水事情はどうなっているのか

iii. プレゼンテーションの作成手順

Create a group presentation on the food issue in the world.

- ▶ Fill out the concept sheet of group presentation.
- ▶ Make a 5-minute group presentation.
- ▶ Everyone in a group needs to make a statement in a presentation.
- ▶ First of all please decide on dividing roles among group members.
(Who, What, How, and By when)
- ▶ Please be creative and considerate for the audience to understand your message.
- ▶ Presentation style is absolutely up to you!
(Skit, News report, Poster presentation, and so on)

Submit a separate concept sheet for group presentation.

1) Category	Select on that applies to the category. Nutrition, Economy, Culture, Environment
2) Issue	What is the issue?
3) Cause	What is/are the cause(s) of the issue?
4) Impact	What are the impact(s) on the World?
5) Solution	What is your solution to the issue?
6) Action	What is your action to resolve the issue?
7) Benefit	What benefit would the solution bring to our lives and future?

[活動の様子]



Flag Making



Explore the World



Group Work / Presentation

[事後指導]

- ▶ 10月6日(土) 文化祭展示 クラスごと研究発表 (ポスター掲示)

[アンケート]

研修の実施前後で以下5項目に関する生徒の意識調査を実施した。

各項目に関連する設問について、1~5の数字で自己評価 (セルフチェック) を行った。

グローバル・キャンパス生徒意識調査

(事前・事後の平均値にて比較)

			①事前	②事後	②-①
1 異文化 適応度	自分とは異なる文化的背景をもつ人々と、一緒に活動することに違和感がない		3.87	4.20	0.34
			3.27	3.50	0.23
			4.22	4.42	0.20
			2.46	2.77	0.30
2 3 4	生活のいろいろな場面で他の国との関わりが増えることにより、自分の可能性が広がると思う		3.87	4.20	0.35
			4.22	4.42	0.20
			2.46	2.77	0.30
			2.46	2.77	0.30
5 グローバル 関心度	世界中の人との交流の機会や情報を生かせるようになりたい		4.08	4.25	0.17
			4.11	4.23	0.12
			3.97	4.04	0.06
			4.31	4.43	0.13
6 7 8	外国の国々について知識や理解を深めることは、自分の可能性を広げることにつながると思う		4.08	4.25	0.17
			4.31	4.43	0.13
			1.89	1.82	-0.07
			4.51	4.56	0.05
9 10	外国のことを知ることは大切だ		4.51	4.56	0.05
			4.51	4.56	0.05
			4.51	4.56	0.05
			4.51	4.56	0.05
11 12 13	日本について知識や理解を深めることは、外国についてと同様に重要だと思う		4.23	4.36	0.13
			4.27	4.42	0.14
			3.49	3.51	0.02
			3.49	3.51	0.02
14 15 16 17	英語が得意になりたい		2.10	1.84	-0.26
			4.60	4.68	0.08
			4.20	4.34	0.14
			4.29	4.38	0.09
18 19 20 21 22	他の日本人の前で英語を話すのは恥ずかしい *		2.94	2.70	-0.24
			3.25	3.56	0.31
			3.63	3.70	0.07
			3.15	3.23	0.08
	4.11	4.50	0.39		

*注 「グローバル関心度」の項目9および「英語肯定度」の項目14・18は、数値が低い方がプラス評価になる

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

[アンケート分析]

- ▶ 5つのカテゴリーのうち「異文化適応度」において事前・事後の伸びが最も大きかった。留学生や他生徒との協働体験や交流を通して、異文化に対する許容度が広がり、理解が深まったと思われる。特に項目1「自分とは異なる文化的背景を持つ人々と、一緒に活動することに違和感がない」の伸びが0.34と大きいことが注目される。
- ▶ 「グローバル関心度」の項目9は低い数値となっている。研修全体を通して積極的な参加が見られたことから、グローバル化をより身近な問題として捉える傾向が伺える。
- ▶ 「積極性」の項目22の伸びが0.39と高い数値が出ていることから、今後につながる研修を企画し、積極性をさらに高める必要がある。

[ルーブリックによる評価]

1日の振り返りの時間を設け、その日の活動についての自己評価をルーブリックを使って行った。このルーブリックは、生徒たちの主体的な活動を通して身につけるべき達成項目について、どの程度の到達度が見られたかを自己評価によって測定し、次の活動に活かすための評価尺度である。今年度は、昨年度のルーブリックの必要項目を厳選し改善した。生徒たちにとっては、あらかじめ達成目標が把握でき注力すべき点が明確であるので、活動しやすくりフレクションが容易になったと考えられる。また、今回はグローバル・リーダーによるルーブリックでの評価も行った。グローバル・リーダーたちも生徒個人を評価することにより、個々の生徒の目標達成状況が把握でき、生徒たちへの積極的な働きかけにつながった。

測定結果はp.84「3-(2)-a <8> ルーブリックの作成と改良」に示しているが、それによると全ての測定項目において評価ポイントは上昇しており、順調に活動の成果が上がっていることが分かる。

[今後の課題]

- ▶ 限られた時間の中で効率よく事前準備を進めるためのシステム作りが必要である。
- ▶ グローバル・キャンパスからSGH報告会への流れは、より深い考察につながっていると思われる。課題発見から解決策への取り組みが他の授業の中で応用できているかどうかは各教科での検証が必要であろう。検証方法の開発・検討も今後の課題である。
- ▶ 英語運用に関して、2年次SGクラス以外の生徒にもこの経験をつなげたい。より具体的な状況での実践が可能な研修を2年次修学旅行に導入し、視野を広げる効果を期待したい。
- ▶ ルーブリックをプログラムの中にどのように組み込むか。昨年度のルーブリックの項目を厳選し改善したものを1日の振り返りで使用したが、評価項目も含めて今後も検討が必要である。また、グローバル・リーダーにもルーブリックで生徒一人ひとりの評価を行ったが、これも評価項目を含めて、どう生徒にフィードバックしていくのか検討が必要である。

1-(3) 評価

検証評価方法

- 1) アンケート調査を実施し、統計をとり、生徒の満足度・グローバル意識向上度を測る。
- 2) 体験記をまとめるレポート提出、よいレポートに関しては本校ホームページや文集でまとめて発信する。
- 3) 日本文化の紹介をプレゼンテーションできたかどうか。

構想調書に基づく評価

- 1) 今年度も1年次のグローバル・キャンパス、SG 講座・講演、2年次の「探究科」での活動などを通じて、生徒のグローバルマインド醸成と自主性や課題発見能力の涵養に努めてきた。先の p. 40 に示したグローバル・キャンパス生徒意識調査の結果から、グローバル関心度は全項目において事前より事後で上昇していることから、グローバル・キャンパスの教育効果が裏づけられる。

また、年度末に実施した SGH 事業効果検証 生徒意識調査の結果においても、昨年度に引き続いてグローバル関心度は下表のように多くの項目で上位の学年ほど高くなり、同じクラスで年度比較しても同様の傾向が見られる。ただし、いくつかの項目によっては若干の数値の減少が見られるものの、それらの減少は5ポイント未満であるため、ほぼ横ばいと見てよい。このことから、SGH 事業の諸行事を通して着実にグローバル関心度は高まり、課題発見に導くための教育環境が整備されてきていると考えられる。

SGH 事業効果検証 生徒意識調査 2・3年 SG クラス年度比較 (抜粋)

	自ら課題を設定し、他者と協働して解決する力	学年	今年度		昨年度	
			肯定	否定	肯定	否定
グ ロ ー バ ル 関 心 度	海外の話題やニュースに関心をもつようになった	2年	91.6%	8.4%	94.4%	5.6%
		3年	100.0%	0.0%	90.0%	10.0%
	世界各国で起こっている出来事がどのように日本とつながっているかを考えることがある	2年	83.3%	16.7%	72.2%	27.8%
		3年	95.4%	4.6%	86.7%	13.3%
	世界各地の文化や伝統、歴史について(授業に関わらず)興味関心を持って学習している	2年	87.5%	12.5%	77.8%	22.2%
		3年	81.8%	18.2%	86.6%	13.4%
	地球上で起こっている食糧問題について例を挙げて説明することができる	2年	95.8%	4.2%	77.8%	22.2%
		3年	86.3%	13.7%	86.7%	13.3%

- 2) 今年度のグローバル・キャンパスでは諸事情によりレポートの提出を行わず、グローバル・リーダーとして指導していただいた留学生への感謝の手紙を書くに留まった。また、随時本校のホームページや広報誌でその一部を掲載し発信した。
- 3) 今年度はグローバル・キャンパス、マレーシア・シンガポールへの海外フィールドワーク、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生や海外からの学校訪問などで、日本文化を紹介する機会を得た。1年次のグローバル・キャンパスでは、食の4領域（食と社会文化、食と環

Ⅲ 実施報告書－研究課題①

境、食と経済、食と栄養)のグループ発表40テーマ中31テーマで「日本の食」の内容を含めた発表があった。(テーマについてはp.39参照)また、2月のSGH報告会に向けて、中学生を含む生徒全員が「日本の食」の現状をふまえた「食の安全性」に関わる問題への解決策について考え、代表者が報告会の当日にステージ発表やポスターセッションを行った。

実践内容の評価

今年度も様々な行事を通して生徒の自主性と課題発見能力の育成に努めてきた。通常の授業で得られる知識に加え、これまで取り組んできた探究活動で得られる幅広い分野の知識は、視野を広げグローバル関心度を高める効果が得られることが証明されている。これが、後の活動における課題発見能力の強化につながっており、今後も適宜修正を加えながら行事を継続して実施していく予定である。今後の課題は、グローバル・キャンパス、SGH報告会、食のサミットとつなげていく学びの道筋を、SGクラスだけではなく、全校生徒の取り組みとしてどのように計画的に取りあげ指導していくかを明示し、実施していくことである。より多くの生徒が自主性と課題発見能力を身につけるためにも、早急な対応が求められる。

2 現状と研究課題② ダイバーシティ&コミュニケーション能力の飛躍的向上

会話を楽しむことはできるが、適切な情報を聞き取る能力、自己の考えをまとめて述べる能力にはやや劣る生徒が増えてきた。また、海外に対する関心は高いが、直接外国人と触れあう機会は少ない。留学や海外研修に行く生徒は一部にとどまっている。他者の多様性を認め、コミュニケーションを図る機会を増やすことが必要である。加えて、英語でのコミュニケーションの機会を増やし、英語でのコミュニケーション能力を飛躍的に向上させることが必要である。

2-(1) 仮説②

グローバルリーダーの資質として必要な「ダイバーシティ&コミュニケーション能力の飛躍的向上」を行うためには、海外研修や海外留学生との交流（ディベート等を含む）の機会を積極的に提供することで、多様性と多文化共生の意識を涵養し、コミュニケーション能力を飛躍的に向上させることができる。

また、正課の各教科授業でアクティブ・ラーニングを取り入れ、その中で英語によるディスカッションやディベートを実施することでコミュニケーション能力を向上させることができる。

2-(2) 実践

- a 各教科でのアクティブ・ラーニングの実施
- b 海外フィールドワークの実施及び留学生の受け入れ

2-(2)-a 各教科でのアクティブ・ラーニングの実施

目的

自ら柔軟な思考力を持ち、他者と協調して課題を解決し、新しい知や価値を創造できる能力を養う。

実践した取り組み

- 〈1〉教科でのアクティブ・ラーニング
- 〈2〉教員研修の実施・外部研修への参加

実践の詳細

〈1〉教科でのアクティブ・ラーニング

今年度は、教科横断型の学習や ICT の有効活用に加え、夏期に実施した「生徒が学びの主人公」をテーマとする教員研修のフィードバックも行うこととした。学習者の「深い学び」を促す指導法についても、昨年度に引き続き実施した。以下の各教科の実践事例を紹介する。

国語

- ▶ 徒然草、枕草子を参照しながらエッセイを自作させた。
- ▶ 仮想の試験問題を考えさせる授業を行った。
- ▶ ミロのヴィーナスの失われた腕の復元を考えさせた。

数学

- ▶ 一次関数で濃度の計算の学習をさせ、その後理科において濃度の計算を学習することで、計算法の違いに気づかせ理解を深めた。

英語

- ▶ 独自のテーマに基づいて Keynote でプレゼンを作って発表をし、生徒同士を評価させた。
- ▶ 自由英作文を生徒同士で共有させ、気づいたことについて意見を交わし合った。
- ▶ 常に“Why”を使って発問をし、論理的思考力を養成する問いかけを心がけた。

地歴公民

- ▶ 日本史Aにて課題を設定し、班で意見を共有させながら発表を行った。
- ▶ 校外学習（京都・奈良）での学びをより深くするための協働による調べ学習を行った。

理科

- ▶ 学習プリントに教科横断的な内容の発展的な課題を加え、それらを生徒に考えさせ、発表させた。

保健体育

- ▶ 運動会での種目の内容について、ICT を活用させながら生徒が主体的な取組が出来るような環境作りに努めた。

家庭

- ▶ お弁当の献立作成において、栄養分や予算等も考慮させながら、現実的に実践が出来るような調理実習を行った。

情報

- ▶ ストップモーションムービーにより、生徒オリジナルの映像作品を制作させた。

〈2〉 教員研修の実施・外部研修への参加

教員対象の教員研修

今年度は、昨年度に引き続きアクティブ・ラーニング学習会に加え、次世代の主力を担う中堅教員の指導力育成を目的として設立された「中村学会」のメンバーに対し、月例会を行った。ここでは、21世紀型PBLの実践力を養うことを主眼とした学習会に加え、「学校行事の見直し案」や「他の中高一貫校の先進事例調査」等、より具体的な実践に落とし込めるような議論を重ねることができた。

▶ アクティブ・ラーニング学習会

第1回：6月26日(水) 第2回：9月20日(金)

第3回：11月18日(月)

対象：全教職員（希望者）

内容：基礎的な学習理論の習得、アクティブ・ラーニング型授業の実践報告、教育研修会への参加報告、教材（特に授業で使えるアプリケーション）の紹介等

▶ 中村学会

第1回：5月22日(水) 第2回：6月26日(水) 第3回：8月23日(金)

第4回：9月11日(水) 第5回：10月10日(木) 第6回：11月13日(水)

第7回：12月11日(水) 第8回：1月22日(水) 第9回：3月16日(月)

対象：中村学会メンバー（本校教員5名、本校事務職員2名、中村学園三陽高等学校教員4名）

内容：本校SGクラスによるPBL型授業実践と報告、併設大学（中村学園大学）の占部教授との対談、他の中高一貫校の先進事例調査と情報共有、併設校大学の講義「中村学」の視聴、男女別学指導によるメリットとデメリットについての議論等

▶ 外部研修への参加

① 国際理解教育を推進するためのワークショップ

主催：福岡県私学協会グローバル人材育成委員会

日程：令和元年9月18日(水)

会場：福岡ガーデンパレス 3階「宝満の間」

参加者：本校教員1名

② 啓林館英語指導研究会～九州大学が求める英語力とは～

主催：啓林館

日程：令和元年11月16日(土)

会場：福岡A.R.K.ビル会議室 2F大ホール

参加者：本校教員2名

Ⅲ 実施報告書－研究課題②

③ ディベート審判講習会

主催：福岡県高等学校英語教育研究部会

日程：令和元年7月27日(土)

会場：福岡県立香住ヶ丘高等学校

参加：本校教員1名

④ 第26回ティーチャーズ教育セミナー

主催：ティーチャーズサポート福岡

日程：4月27日(土)

会場：ふくふくプラザ(福岡市中央区荒戸)

参加者：本校教員1名

⑤ 教育の未来を考えるワークショップ

主催：第一学院高等学校

日程：9月25日(水)

場所：第一学院高等学校熊本キャンパス

参加者：本校教員1名

⑥ グローバル人材育成シンポジウム

主催：福岡雙葉高等学校

日程：10月12日(土)

場所：福岡雙葉高等学校

参加者：本校教員2名

⑦ プロジェクトアドベンチャーワークショップ

主催：プロジェクトアドベンチャージャパン

日程：12月22日(日)

場所：九州産業大学

参加者：本校教員1名

⑧ マイクロソフト MIEE 第5回 Monthly Teams Call

主催：日本マイクロソフト

日程：3月7日(土)

場所：日本マイクロソフト九州支店セミナールーム(福岡市博多区上川端)

※ 新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインでの開催

参加・発表者：本校教員1名

2-(2)-b 海外フィールドワークの実施及び留学生の受け入れ

目的

海外での宿泊研修を通じて文化の多様性を知り、多文化共生社会についての理解を深め、同時に英語でのコミュニケーション能力の向上を図る。

実践した取り組み

〈1〉 マレーシア・シンガポール海外フィールドワーク

[日程] 10月19日(土)～10月24日(木) 6日間

[訪問先] Sultan Ibrahim Girls School (マレーシア ジョホールバル)

マレーシア工科大学 メラユ・ラヤ村

GRAND JET (日本食レストラン)・シンガポールヤクルト株式会社

[参加者] 高校2年1組生徒24名、引率2名

〈2〉 カリフォルニア海外フィールドワーク

※ 今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため中止とした。

〈3〉 ダイバーシティ&コミュニケーション能力の飛躍的向上のための自主的な取り組み

実践した取り組み①～⑬については、あとの【実践の詳細】に記載

〈4〉 留学生及び海外視察団の受け入れ

① 台湾花連女子中高等学校交流

[日程] 4月19日(金)

[訪問団国名] 台湾

[訪問者数] 生徒34名、引率者3名

② オークランドロータリークラブ奨学生受入

[日程] 6月21日(金)

[受入生徒国名] アメリカ合衆国

[訪問者数] 生徒1名

③ 在福岡アメリカ大使館インターン 視察

[日程] 7月18日(木)

[視察団国名] アメリカ合衆国

[訪問者数] 生徒1名、引率者1名

Ⅲ 実施報告書－研究課題②

④ アジア高校生架け橋プロジェクト

[日程] 令和元年8月24日(土)～令和2年3月8日(日)

[留学生国名] マレーシア、インドネシア、ブルネイ、タイ、ラオス、カンボジア、
インド、スリランカ、ミャンマー

[受け入れ人数] 10名

[取り組み] 高校1・2年生のクラスに配属、学校行事への参加
実践した取り組みについては、あとの【実践の詳細】に記載

⑤ 福岡県私立高等学校生徒アジア派遣事業

[日程] 10月28日(月)～10月29日(火)

[留学生国名] タイ

[受け入れ人数] 生徒2名、視察団10名、視察団引率2名

⑥ 信男教育学園上海文来高校 学校訪問

[日程] 1月14日(火)

[訪問団国名] 中華人民共和国

[訪問者人数] 生徒19名、引率者1名

実践の詳細

〈1〉マレーシア・シンガポール海外フィールドワーク

概要

生徒はマレーシア・シンガポールについては、事前学習を通して興味関心のある探究テーマを決め、調査すべき項目を設定した上で参加した。

マレーシアでは、ジョホールバルの姉妹校に赴き、生徒同士の交流活動や現地高校生へのインタビューを通じて探究テーマの調査を行った。姉妹校での交流は、海外フィールドワーク後も続き、生徒にとって代えがたい経験となった。また現地スーパーマーケットや屋台でのフィールドワークでも食文化等に関する現地調査を行っている。メラユ・ラヤ村では、実体験を通して、現地の伝統的な文化について理解を深めた。

最終日のシンガポールでは、まず現地の日本料理店に行き、日本の食文化がどのように受け入れられているか学ぶことができた。次にチャイナタウン、アラブ人街、リトルインディア、ホーカーストリート等を訪ねた。日本とは異なり様々な人種、宗教が混在する中でお互いを受け入れ、共存し、発展を続ける国に大きな刺激を受けたようだ。また、株式会社ヤクルトに訪問し、世界へ拡大してきたこれまでの歴史や、多大な企業努力について知ることができた。

事前事後指導・スケジュール

○ 8月31日(土) 生徒・保護者対象説明会

○ 9月18日(水)

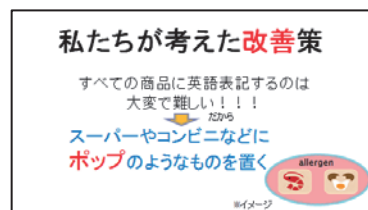
- ▶ 探究科、地歴公民科の教員よりマレーシアの主要民族の人口比率、文化的背景、特徴等について事前指導を受ける。
- ▶ 事前学習を通して興味関心を持ったことから、フィールドワークで探究する個人テーマを決定する。
- 10月9日(水)
 - ▶ 探究テーマを旅行先のどこで調査が可能であるかを設定する。
 - ▶ 姉妹校との交流会での出し物・発表の練習をする。
- 10月16日(水)
 - ▶ 班毎に大きな探究テーマを決め、個人が調べる内容を決める。発表はグループで行い、各々ポートフォリオ (Classi) を作成する。
- 10月18日(金) 結団式・最終確認
- 10月19日(土)～10月24日(木) マレーシア・シンガポール海外フィールドワーク
- 10月29日(水)
 - ▶ 班毎に発表準備、ポートフォリオの作成
- 11月6日(水)
 - ▶ 各班プレゼンテーション、ポートフォリオの提出

研修日程

日次	月日	地名	現地時刻	交通機関	行程	研修の狙い	朝食	昼食	夕食
1	10/19 (土)	福岡空港国際線 福岡空港 チャンギ空港 ジョホールバル ホテル	8:00 10:00 15:25 16:30 18:15 19:30	各自 SQ655便 専用バス	福岡空港国際線2階ご集合 搭乗手続き後、出国手続き シンガポール航空にてシンガポールへ(所要6時間) *日本との時差:-1時間 シンガポール・チャンギ国際空港到着。入国手続き 専用バスにてマレーシア国境へ(陸路での国境越え シンガポール→マレーシア) ジョホールバルにて夕食 ホテルチェックイン マレーシア ジョホールバル KSLリゾートホテル 泊				ホテル 機内
2	10/20 (日)	ジョホールバル	7:00 8:30 9:15 17:00 17:45 19:30	専用バス	ホテルにて朝食(バイキング) 専用バスにて出発 姉妹校 Sultan Ibrahim Girls School 到着 *歓迎セレモニー *学校案内(出し物20分) *昼食 *現地交流授業(ディスカッションなど) 学校出発 グランドパラゴン裏の屋台にて各自 ホテル到着 マレーシア ジョホールバル KSLリゾートホテル 泊	食と社会文化 ・他民族国家の「食」事情 ・日本における「食」に関する配慮との比較など ・庶民の食生活について			ホテル 学校にて
3	10/21 (月)	ジョホールバル	7:00 8:30 9:30 13:30 15:00	専用バス	ホテルにて朝食 専用バスにて出発 姉妹校 Sultan Ibrahim Girls School 到着後 SIGSの生徒と共にAEONへ向かい食材調達(ハラルの日本食をおもてなし) 実際に学校でデモンストレーションを行います! *民族毎の食文化について *昼食 *フェアウェルセレモニー マレーシア工科大学(UTM)到着 *キャンパスツアー *UTMによるレクチャー&学生とのディスカッション 2006年より進められている都市計画プロジェクト「コタ・イスカンダル」施設見学 マレーシア ジョホールバル KSLリゾートホテル 泊	食と社会文化 ・マレー系住民の住環境 ・日本とマレーシアとの住環境の類似点/相違点 食と経済 ・日本とマレーシアの市場の類似点/相違点 ・ハラル市場について(配慮など)			ホテル レストラン マレー料理
4	10/22 (火)	ジョホールバル	7:00 8:30 9:15 9:25 16:30 17:15 19:00	専用バス	ホテルにて朝食(バイキング) 専用バスにてホームビジットに出発 メラユ・ラヤ村にて現地生活体験 *歓迎セレモニー *各家庭へ(5名×6家庭)(引率1家庭) *民族衣装に着替えマレー伝統文化体験と昼食 メラユ・ラヤ村出発 市内レストラン到着 ホテル到着 マレーシア ジョホールバル KSLリゾートホテル 泊	食と社会文化 ・「食」に関する民族背景 ・環境がもたらす「食」への影響など 食と栄養 ・民族毎の食習慣から見える栄養の類似点/相違点 開発と経済 ・都市開発と地域発展について			ホテル 学校にて レストラン

III 実施報告書－研究課題②

5	10/23 (水)	ジョホールバル	6:45 8:30 9:30 10:30 12:40 15:00 18:20 22:15	専用バス	ホテルにて朝食 専用バスにて出発 陸路での国境越え(マレーシアーシンガポール) 日系企業訪問GRAND JATE(日本食レストラン) 市内観光兼昼食(チャイナタウンにて昼食後リトルインディア・アラブ人街) 12:40～14:30 (マーライオン・ラッフルズ) 日系企業ヤクルト訪問(15:00～17:30) 夕食後、 トラムカーで夜行性動物を見学(ナイトサファリ) 日本語トラム シンガポールチャンギ国際空港到着 搭乗手続き・出国手続き	食と経済/社会文化 ・日系企業の海外進出における創意工夫 ・「食」の違いに伴うビジネスチャンス 食と経済/環境 ・観光資源としての「食」 ・観光地における環境への配慮(衛生環境など)	ホテル 各自	ナイトサファリ
6	10/24 (木)	チャンギ空港 福岡空港	1:20 8:35 9:10	SQ656便	シンガポール航空にて日本帰国(所要:6時間) *シンガポールとの時差:+1時間 福岡空港到着 入国手続き後、解散式 お疲れ様でした。			



<2> カリフォルニア海外フィールドワーク

概要

アメリカの提携校にて、語学研修や文化交流だけでなく、現地の食に関する探究活動を実施した。現地での宿泊研修を通じて、多文化共生社会についての理解を深めたり、英語でのコミュニケーションに取り組んだりする中で、グローバルな教養と知見を養うことを目指した。

事前指導・スケジュール

1. 募集説明会及び参加者説明会

募集説明会：10月18日(金) 参加者説明会：2月3日(月)

2. 事前研修

第1回：12月19日(木) 第2回：1月14日(火) 第3回：1月17日(金)
第4回：2月10日(月) 第5回：2月28日(金)

ホームステイ先での日本食調理や現地校や訪問先でのセレモニーに向けて、日本文化紹介や出し物の準備を行った。

3. 中止の決定と説明

新型コロナウイルス感染症対策のため、急遽プログラムの中止を決定し、その旨を生徒に説明した。

〈3〉ダイバーシティ&コミュニケーション能力の飛躍的向上のための自主的な取り組み

① 英検2級・準2級・TOEICリスニングソフトの活用

[概要] 英検一次試験・二次試験の各一週間前からLL教室を開放し、自主的な学習を促す

[日程] 一次試験対策 5月28日(火)～6月1日(土)、9月30日(月)～10月4日(金)
1月22日(水)～25日(土)

二次試験対策 6月17日(月)～21日(金)、10月28日(月)～11月1日(金)
2月12日(水)～15日(土)

[対象] 中学・高校全学年

② GTEC受検

[日程] 第1回6月8日(土) 第2回12月7日(土)

[対象] 高校1年～3年

③ イングリッシュキャンプ

[概要] 夏休みを利用した2泊3日の英語・異文化イマージョンプログラム

[日程] 7月21日(日)～23日(火)

[場所] 海の中道青少年海の家

[参加者] 高校1年12名、高校2年11名、引率者1名

[関連行事] 参加者募集説明会 5月23日(木)、6月21日(金)
参加事前オリエンテーション 7月9日(火)

④ トビタテ！留学 JAPAN

[日程] 7月13日(土)～8月4日(日)

[渡航国名] アメリカ合衆国

[参加者] 高校2年1名

⑤ 福岡県私立高等学校生徒アジア派遣事業

[日程] 8月3日(土)～10日(土)

[派遣国名] タイ

[参加者] 高校2年2名

⑥ 第16回日本の次世代リーダー養成塾への参加

[主催] 日本の次世代リーダー養成塾

[日程] 7月26日(金)～8月8日(木)

[場所] グローバルアリーナ(福岡県宗像市)、佐賀県波戸岬青年自然の家(佐賀県唐津市)

[参加者] 高校3年1名

Ⅲ 実施報告書－研究課題②

- ⑦ 第38回福岡県高等学校英語スピーチコンテスト『暗唱の部』参加
[主催] 福岡県高等学校英語教育研究部会
[日程] 8月19日(月)
[参加者] ESS部1名
- ⑧ 崇城大学 SOJO English Challenge 2019 参加
[主催] 崇城大学
[日程] 9月28日(土)
[参加者] ESS部2名
- ⑨ 福岡女学院大学 グレープカップコンテスト参加
[主催] 福岡女学院大学
[日程] 9月28日(土)
[参加者] ESS部1名
- ⑩ 長崎外国語大学 英語ボキャブラリーコンテスト
[主催] 崇城大学
[日程] 9月28日(土)
[参加者] ESS部2名
- ⑪ Youth Discovery Tour 2019 In Beijing 参加
[主催] アジア太平洋こども会議 イン福岡
[日程] 12月19日(木)～25日(水)
[派遣国名] 中華人民共和国(北京)
[参加者] 高校1年5名、引率者1名
- ⑫ 福岡県主催高校生イングリッシュキャンプへの参加
[概要] 福岡県内の高等学校・中等教育学校後期課程に在籍する生徒100名を対象とした全カリキュラムを、原則英語使用によって行う英語力強化合宿
[日程] 12月25日(水)～27日(金)
[場所] 福岡県立社会教育総合センター(糟屋郡篠栗町)
[参加者] 高校2年1名
- ⑬ セブ島語学研修
[日程] 1月27日(日)～2月16日(土)
[渡航国名] フィリピン
[参加者] 高校3年1名

＜4＞ 留学生及び海外視察団の受け入れ

2018年度から始まった文部科学省の「アジア高校生架け橋プロジェクト」は2年目を迎え、2期生は20のアジアの国と地域から200名の高校生を迎え入れた。本校は9か国より10名を水仙寮に受け入れ、寮生との交流も行った。年末年始は日本の正月を楽しんでもらうためホームステイにした。学校生活では高校1・2年に各クラス1名を配属することで、文化祭や留学生との宿泊研修「グローバル・キャンパス」等の主要な行事で活躍し全校生徒と交流できた。また彼女たちが希望した文化施設の訪問や伝統文化に触れる機会を特別に作った。これらを支援するためにAFSの博多支部との連絡会と留学生との面談会を定期的に設けた。細かな情報共有の甲斐あって、留学生の体調不良時にも医療機関への連絡等への対応がスムーズにできた。

また、カリキュラムの中に本校職員が担当する日本語レッスンを受講し、12月に行われた日本語能力試験を受検した。受検者10名中8名（N5 6名、N4 2名）が合格することができた。

本校で2月に開催したSGH報告会では、来年度にSGクラスに進級が決まっている30名と共に「アジア諸国の食の安全性」をテーマに協働探究活動を行った。このプロジェクトの目的である「日本とアジアの高校ネットワークの構築、互いの国に精通したリーダー育成」の実現につながる有意義な活動となった。

このように、本校におけるSGH事業過去4カ年の取組の蓄積と関係機関の様々な支援のおかげで、留学生及び海外視察団の受け入れの人数・件数を増やすことにつながり、一つひとつの受け入れ内容もより良いものになった。

アジア高校生架け橋プロジェクト受け入れ

[主な活動実績と内容]

日程	主要活動内容	対象
8/24(土)	福岡空港着 本校水仙寮入寮	留学生
8/27(火)	全校朝礼 挨拶	全校生徒
8/29(木)	通常授業 開始	留学生
9/3(火)	中村学園大学訪問	〃
9/15(日)	日本文化体験(放生会)	〃
A団: 9/9(月)~11(水) B団: 9/12(木)~14(土)	グローバル・キャンパス	留学生、高1生徒
9/11(水)	地域中学校生徒のための国際交流活動	留学生
9/25(水)~	日本語レッスン開始	〃
9/27(金)	ラブアースクリーン運動 参加	留学生、高1生徒
9/28(土)	高校オープンスクールにおける国際交流授業アシスタントティーチャー	留学生
9/30(月)	芸術鑑賞(演劇)	全校生徒
10/4(金)	水仙祭オープニング プレゼンテーション	留学生
10/10(水)	水仙祭 国際交流コーナー(交流、自国紹介掲示、ヒジャブ体験) ステージ発表(民族衣装を着用、自国のダンス披露)	全校生徒
10/14(月)~10/18(金)	特別授業(高2修学旅行中のため) 浴衣作り	留学生
10/16(水)	SGH運営指導委員会 日本語による挨拶、日本に来た理由発表	留学生
10/25(金)	中村学園大学主催 ハロウィンパーティー参加	留学生、高1、2希望生徒
10/27(日)	社会福祉施設 四箇厚生園「たのしか祭」ボランティア参加	留学生、高1、2希望生徒
10/28(月)	学年集会 プレゼンテーション(自国の文化、習慣)	留学生、高2生徒
10/28(月)	吹奏楽部定期演奏会 アクロス福岡	留学生
10/30(水)・11/13(水)	おにぎりアクション2019参加	〃

Ⅲ 実施報告書－研究課題②

11/13 (水)	中高マラソン大会 (大濠公園)	留学生、中高1、2生徒
11/15 (金)	日本文化体験 (博多織展示場見学)	留学生
12/1 (日)	日本語能力試験	〃
12/6 (金)	九州交響楽団演奏会 (本校にて)	留学生、生徒希望者
12/10 (火)	水仙寮クリスマス会	留学生、寮生
12/14 (土)	ホストファミリーとの連絡会	留学生
12/21 (土)	SGH 全国高校生フォーラム ポスターセッション発表 テーマごとの交流会 (東京)	留学生、SG2 年生徒
12/21(土)～1/5(日)	ホームステイ (各自別家庭)	留学生
1/16 (木)	野菜の収穫参加	留学生、中2生徒
1/24 (金)	合唱コンクール	留学生、高1生徒
2/10 (月)	SGH 報告会 新 SG クラス進級生徒との協働探究活動プレゼンテーション 発表 (アジア諸国の食の安全性)	全校生徒
2/29 (土)	ホストファミリー感謝の会 (自国のスイーツ調理、動画作成)	留学生
3/8 (日)	福岡空港発	留学生
3/9 (月)	帰国	〃

その他、調理実習、茶道の授業、部活動 (バレーボール部 1 名、裏千家茶道部 1 名、美術部 1 名) 等多くのことに参加し、多くの生徒と関わる事ができた。この活動は留学生の体験活動を増やし日本文化を理解することにつながるだけでなく、関わった生徒にとっても良い交流となり、双方にとって異文化を共有できる機会になった。また、地域のボランティア活動にも積極的に参加することで、本校の取組を知ってもらう事ができた。

2-(3) 評価

検証評価方法

- 1) 多様性と多文化共生の意識の涵養を、実施前と実施後に行うアンケート調査等で定性的及び定量的に把握・評価する。
- 2) 学内で G T E C を用いて、生徒の英語レベルの向上について測定・評価する。なお、高校 3 年間を通じた最終的な達成目標としては、SG クラスに所属する全ての生徒が C E F R において B 1 ～ B 2 レベルを獲得することを目指す。

構想調書に基づく評価

- 1) p. 113 関係資料 2 「SGH 事業効果検証 生徒意識調査」の質問 No.5～15 は他国への関心や英語の重要性、他者との協働等についての問いである。この結果から、どの質問項目においても昨年度の値を上回っているか高値で推移しており、食のサミットや海外フィールドワーク、SGH 成果発表会等の行事や探究科の授業等を通して、着実に多様性と多文化共生の意識の高まりが読み取れる。特に質問 No.6 の上昇度は他の質問項目に比べて大きく、SG クラスでの学びがグローバル関心度により大きな影響を与えている。要因としては、今年度は例年に比べアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生との協働を重点的に行った結果、多様性の理解と

関心を高められたと考えられる。

SGH 事業効果検証 生徒意識調査 2・3年 SG クラス年度比較（抜粋）

グローバル関心度・英語重要性・他者との協働		学年	今年度		昨年度	
			肯定	否定	肯定	否定
6	世界各国で起こっている出来事がどのように日本とつながっているかを考えることがある	高2	87.5%	12.5%	61.1%	38.9%
		高3	95.5%	4.5%	76.7%	23.3%
7	地球上で起こっている食糧問題について例を挙げて説明することができる	高2	87.5%	12.5%	88.9%	11.1%
		高3	95.5%	4.5%	73.3%	26.7%
8	地球上で起こっている食糧問題について他者に説明することができる	高2	79.2%	20.8%	61.1%	38.9%
		高3	77.3%	22.7%	73.3%	26.7%
9	日常生活において他者の気持ちを押し量りながらコミュニケーションが取れている	高2	95.8%	4.2%	94.4%	5.5%
		高3	95.5%	4.5%	93.3%	6.7%
10	自らの意見を持ち、相手にわかるように主張を伝えることができる	高2	91.6%	8.4%	88.9%	11.1%
		高3	90.9%	9.1%	90.0%	10.0%
12	コミュニケーションツールとしての英語習得に取り組んでいる	高2	83.3%	16.7%	77.8%	22.2%
		高3	86.4%	13.6%	90.0%	10.0%
13	自分と将来に英語は必要だと思う	高2	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%
		高3	95.4%	4.6%	96.6%	3.4%
15	課題に対して他者と協働して解決することができる	高2	95.9%	4.2%	94.4%	5.6%
		高3	95.4%	4.6%	93.4%	6.6%

2) p.111「5 課題研究以外の取組 5－(1) 英語運用能力の向上」を参照。

実践内容の評価

今年度も毎学期末に指導指標の測定を行った。教師自身に指導実態の自己評価を行わせることで授業改善を意識させ、学校全体としてアクティブ・ラーニング型授業の導入を積極的に推進してきた。今年度の指導指標測定結果をあとの表に示す。昨年度の数値と比較すると、項目により若干の増減は見られるものの、まずまずの成果であると考えている。特に項目No.1の「授業中に生徒が考える時間を少しでもとる」ことを、ほぼ全教員が実践していることは大きな変化である。これは、今年度の夏期職員研修で「生徒が学びの主体となる」学校・授業づくりに取り組んだことを契機として、その実践を呼びかけた効果が現れていると考えている。この取り組みは今後も続けていきたい。今年度は、この「生徒が学びの主体となる」学校・授業作りについての項目をNo.9～11に新たに追加測定した。この結果から、チームとしての継続的な取り組みはできていないようであるが、授業改善への意欲は多くの教員が持ち続けていることが分かる。昨年度から重点的に取り組んでいる「深い学びを促す授業の工夫」と合わせ、指導法の改善をさらに進めたい。

年度末のカリフォルニアへのフィールドワークが予期せず中止になったことは残念であったが、多くの留学生を迎え入れて計画的に生徒との交流や協働を行ってきたことにより、多様性の理解とコミュニケーション能力は着実に向上している。

令和元年度全期間の指導指標測定結果

測定教員数：73名

No.	指標項目	教員の割合%	昨年度との差
1	ほぼ毎時間、授業の中で生徒が考える時間を少しでもとった	99	+3
2	ほぼ毎時間、授業の中で生徒が発表した	82	-5
3	一人では解決できない発問を投げかけ、その問題解決のためにペアワークやグループワークなどをする時間をとったことがある	74	+2
4	生徒どうして教え合う時間をとったことがある	69	-6
5	これまでの教科内外で学んだ知識を関連づけた学習内容を扱うことで、生徒により深い理解を促すような授業を行ったことがある	63	-3
6	情報を精査して新たな考えを形成させるなど、批判的思考力を身につけさせることをねらいとした授業を行ったことがある	40	+2
7	問題を見出して課題解決を考えさせる授業を行ったことがある	42	-9
8	生徒の思いや考えをもとに創造し表現する活動を取り入れた授業を行ったことがある	53	-1
9	夏期研修でのチーム作りの成果を振り返ったり、チームのメンバーと成果について話したりした	12	—
10	「生徒が学びの主人公である」ことを常に念頭におき、日々の授業を改善しようとする意欲を持ち続けた	80	—
11	授業や生徒指導、生徒会活動、クラブ活動などで「生徒が学びの主人公である」ことを具現化するための実践を行った	56	—

3 現状と研究課題③ 課題解決能力の獲得

講義型学習が多く、自ら課題を設定し解決に至るまでの道筋を立てることはなく、積極的に自分の考えを述べることも少ない。また、現状ではグループ学習などの協働作業も少ない。教師もアクティブ・ラーニングを促す指導力を養う機会が少ない。文理融合型の探究型授業をアクティブ・ラーニングで行い、様々なアプローチから課題解決に導くことのできる生徒の主体的な態度及び課題解決能力を養うことが必要である。また、そうした教科横断型のアクティブ・ラーニング等を実施するため教員の指導力養成やルーブリックに取り組むことが必要である。

3-(1) 仮説③

グローバル・リーダーの資質として必要な「課題解決能力の獲得」を行うためには、ひとつの「探究テーマ」について教科横断型で課題解決に向けて取り組むことができるよう総合的な学習の時間や学校独自科目の内容を含めてカリキュラムを再編すべきである。

この際、「食」に関わるテーマで取組を進めることは、「食」が分野横断型、文理融合の領域であることから、課題解決能力の獲得に適切である。

また、課題解決能力の獲得のためには、受け身の授業ではなく、生徒が主体的な学びができるよう正課の各教科授業でアクティブ・ラーニングを取り入れるべきである。

なお、こうした教科横断型カリキュラムやアクティブ・ラーニング実施のためには、教員の指導力養成を高大接続で実施することやルーブリックによって教員に対する指導方法・評価方法の確立と充実を図ることが効果的である。

3-(2) 実践

- a SGクラスの設置と教科横断型科目「探究科」の実践
- b 進路選択講演会・懇談会
- c 職員研修の実施

3-(2)-a SGクラスの設置と教科横断型科目「探究科」の実践

目的

高校1年次にSGクラブ活動を通じて設定した「探究テーマ」を掘り下げていくことを中心とした「SGクラス(30名程度)」を高校2・3年次に設ける。また、SGクラスでは、独自の学校設

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

定科目である「探究科（2単位）」を設け、「探究テーマ」を掘り下げていく過程を通じてグローバル・リーダーの育成を行う。

実践した取り組み

- 〈1〉 探究科の授業
- 〈2〉 SGH 報告会（探究科の成果発表）
- 〈3〉 「食のサミット」の実施
- 〈4〉 論文集の作成
- 〈5〉 TFT キャンペーン「おにぎりアクション2019」協力
- 〈6〉 「全国高校生フォーラム」「探究甲子園」への参加
- 〈7〉 教科横断型のアクティブ・ラーニング
- 〈8〉 ルーブリックの作成と改良

実践の概要

- 〈1〉 探究科の授業（高校2・3年SGクラス対象/年間）
 - ▶ 教科横断型で「食」に関する4テーマを中心に授業を実施した。
 - ▶ 各クールを本校教員が複数で担当し、必要に応じて外部講師を招いた。
 - ▶ 高校3年次は主に探究論文の執筆と「食のサミット」に向けた準備を行った。

[実践計画と概要]

高校2年次				
項目	内容	実施月	時数	教科
オリエンテーション	①活動内容の説明	4月	2	全教科
第1クール 食と社会文化	①食と社会文化に関する講義・ブレインストーミング	4月 ～ 6月	2	地歴公民科
	②6班に分かれ調査		2	国語科
	③KP法によるグループ発表		2	家庭科
	④各国の食事情の調査・発表		2	情報科
	⑤茶道実習		6	道徳科
	⑥ハラル料理に関する講演・ハラル調理実習		4	(外部講師)
第2クール 食と環境	①食と環境の現状と課題の学習	7月 ～ 9月	2	理科
	②英語教材を用いた堆肥化の学習		2	英語科
	③簡易コンポストの製作・設営		2	家庭科
	④地産地消・有機栽培についての講話（外部講師）		2	(外部講師)
	⑤課題研究と論文の書き方・進め方		1	
	⑥堆肥化データ計測と分析、課題の個人発表		2	
第3クール 食と栄養	①班ごとにテーマを設定	9月	4	家庭科
	②ポスターの製作	～	2	担任
	③文化祭での発表・実践	10月	—	地歴公民科
海外フィールドワーク	①しおり作成・事前学習	10月 ～ 11月	2	担任
	②アジア高校生架け橋プロジェクト留学生による講話		2	引率者
	③海外フィールドワークの実践		—	(外部講師)
	④班ごとの発表、探究ポートフォリオの作成・評価		3	

第4クール 食と経済	①5班に分かれ商品開発企画書作成	11月	2	家庭科 担任
	②班ごとに業者への企画プレゼンテーション	12月	4	
	③試作品作成・相互評価	1月	2	
今年度の活動のまとめ	①ポートフォリオの作成	2月	2	情報科 担任
	②SGH 報告会準備		4	
次年度準備	商品開発計画・個人探究	3月	4	担任

高校3年次				
項目	内容	実施月	時数	教科
論文執筆 「食のサミット」に向けて	個人探究調査・論文執筆	4月～12月	10	全教科
	「食のサミット」に向けた探究の 深化と動画作成	5月	15	
	動画発表会&相互批評会	6月	2	
	「食のサミット」進行打ち合わせ等	6月～7月	26コマ	
	「食のサミット」	7月12日・13日	—	

実践の詳細

<1> 探究科の授業

A「食と社会文化」（地歴公民科・国語科・家庭科・情報科・道徳科）

世界の国々・各地域で日常的に食しているものには、地理的・文化的・宗教的等様々な要因で味覚だけではなく調理法やマナーに独自性が存在する。生徒自身が関心のある国や文化、料理を中心に差異を考察し、KP法による発表を行った。また、実際の体験として、茶道・ハラル料理の調理実習に取り組んだ。

授業目的

世界中には多様な食習慣があるが、そこには国家や民族特有の文化・歴史・宗教観が反映されている。自分たちの身近な食生活を異なる食文化と対比させることで、その相違点を考察させる。また文化の多様性を理解することで、異文化についての偏見や先入観を払拭する。幅広い教養と寛容性を備えた知性を育てることで、現代社会の諸問題を自分の問題として捉え、その解決方法を考え、実践する姿勢を培う。

授業内容

1. ブレインストーミング

身近にある「日本食化した外国の食品」を考える。「なぜ日本で受け容れられたのか」、「受け容れる過程で食品に加工・変化があったか」といった観点を念頭におき、関心が深い料理や食材について調べ、レポートにまとめた。それぞれがレポートを持ち合い、グループで発表する。それぞれの班で得られた知識をクラス全体で共有する。日本で受け容れられたものに関しては、何らかの共通点がないかクラスで意見を交換し合う。

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

2. 班による学習活動

「日本人が受け容れる外国の食品の特徴」「日本人が受け容れがたい外国の食品の特徴」についてそれぞれ、味・におい・見た目・食べ方・先入観・タブー等たくさんの要因があることを考える。また、逆に外国人が感じる日本食へのイメージも考える。各班で関心のある研究テーマを統一・設定し、探究活動を行う。発表方法としてKP法を採用し、発表準備をする。

3. 班ごとのプレゼンテーション

各班で発表し、その後に意見交換を行う。日本人とその食文化・食生活を基準・出発点として探究するが、最終的に「ヒトが何を基準に他の食文化を受容・拒絶するのか」という文化人類学的な問いについて考察する。全ての発表が終わった時点で教師が講評を行い、参考文献の調べ方・まとめ方・活用方法等教授し、今後の探究活動での学術的アプローチについて指摘する。

4. 特別授業としてムスリムの講師を招き、イスラム文化に関する講義を受ける。その後講師の指導のもと、ハラール料理を調理実習し、理解を深める。

生徒による発表



B「食と環境」（理科・英語科・国語科）

今年度も昨年度の学習展開を踏襲し、導入として食と環境に関わる地球規模の問題について例をあげて説明し、身近な問題であることを実感させた。続いて英語テキストの「Compost」を用いて豊かな食を育む土壌に着目し、堆肥化の意義や長所等を学習した。その後、実際に簡易コンポストを作製し、堆肥化を行った。最後の授業では、グループでまとめた食と環境に関する問題点と解決策についての発表を行った。今年度は、度重なる台風の影響によって授業が数回延期になってしまいう等、スケジュールが大きく変わってしまった。そのため、生徒たちに話し合いや考えるための十分な時間を取れなかった。

授業目的

地球規模の「食と環境」の問題事例にふれながら、問題の所在や因果関係を考え、自分なりの解決法を模索し、他者との意見交換によって考え方の違いや共通点を見出し、考えをまとめ発表

する。この繰り返しによって、食と環境の問題に興味・関心を持つとともに、その解決法を自分なりに考える力や考えたことを発信する力を身につける。また、自分の考えを裏づけるには科学的なデータが必要であることを理解する。さらに、食べ残しや生ゴミの減量化を自ら体験し、同時に生ゴミを堆肥化する実践を通して、より良い地球環境づくりに貢献し、グローバル・リーダーとして持続可能な社会づくりを進めていく基本姿勢を身につける。

授業内容

1. 世界と日本を取りまく食と環境に関する諸問題
 - ①授業の目的や進め方の説明 ②食と環境に関わる諸問題の例示と説明 ③エネルギー消費の具体例と指標の説明
2. 土壌と食のつながり、堆肥と堆肥化

英語教材「Compost」を用いた堆肥と堆肥化についての要旨をグループ発表・補充説明
3. 「食と環境」に関するグループ発表の準備
 - ①テーマの決め方 ②テーマの設定理由 ③係分担・作業計画 ④解決策の提示 ⑤発表方法
4. 簡易コンポストの製作
 - ①堆肥化する目的の確認 ②コンポストの製作法の説明 ③堆肥化の記録方法の説明 ④衣装ケースを用いたコンポストの製作 ⑤コンポスト床材の作製・投入の作業 ⑥コンポストの設置・設営の作業

※ 10月10日～1月末まで、カフェテリアから出る生ゴミの堆肥化を実施。
5. 食と環境に関する講話（外部講師による ※内容は後述）
6. 食と環境に関する問題点とその解決法の個人発表

外部講師による特設授業

[講師] 田井 正宣 氏（イタリアンレストラン「南の風」シェフ）

[テーマ] 地産地消の魅力～由布院ならではの名物料理を創る

[学習目標]

1. 講話の要点を簡潔な文章でまとめることができる。
2. 講話を積極的に聴き、質問や疑問をいくつかの文で書き表すことができる。

[内容]

1. 素材を生かす調理の仕方を体験的に学ぶ

下味をつける時間を変えた2種類の豚肉の試食
2. 地産地消の長所と短所

長所は食材が新鮮なこと、短所は気象条件が悪いと食材の収量が減少すること（収穫できないこともある）
3. 地元の素材を生かした料理の紹介

レストランで提供している料理の工夫や開発、由布院でしか食べられない一皿を創る
4. 今後の食生活に生かしてほしいこと

素材の味を知ること、素材の味を生かすこと

5. 質疑応答

食材の収穫ができないというトラブルの回避法、野菜嫌いの人に向けた調理法、イタリア留学体験、イタリア語の習得法等



C「食と栄養」（家庭科・担任・地歴公民科）

第1クールの「食と社会文化」を通して、生活環境の大切さや食材の生産地の問題点等も学んできた。そのことから「食のサミット第2部」では飢餓の解決策として「おからクッキー」を作ったり、「食のサミット第4部」では栄養価に拘った和食・洋食のスープを作って食べ比べたりした。また、第2クールの「食と環境」において、地産地消について学び「自分たちができることは何か」を考えた。そして文化祭では朝倉（福岡）の地域復興に着目し、朝倉の食材を使った食品の販売や農産物の販売等の支援事業に取り組むことにした。海外フィールドワークでは、日本の食文化を伝えると共に海外の食文化を学んだ。

授業目的

1. 世界から見た日本食を学び、飢餓の解決策及び栄養価の高い和食・洋食メニューを提案する。
2. 生産地の問題点に着目し、地産地消から地域復興支援を視野に入れた取り組みとして朝倉の食材を使った食品の販売及び農産物の販売を行う。
3. 自国の食文化を海外の人に伝えることができる。

授業内容

1. 今年度の食のサミットのテーマである「食と飢餓」について、その課題と解決策についてクラス（22名）を2つのグループに分け話し合いをさせた。1つのグループ（第2部）は栄養価が高く容易に作ることができる「大豆」に着目し、「おからクッキー」を作ることを考えた。もう1つのグループ（第4部）では、世の中の健康志向に着目し、栄養価の高い「ダイエットスープ」を和食・洋食の2パターンを作り、実際に観客に味の評価を含め食べ比べてもらうことを考えた。どちらもスライドを作成し、寸劇を交えながら全校生徒の前で発表を行った。

第2部及び第4部 生徒作成スライド

大豆 Soy beans

JAPAN
Soy sauce, Natto, Tofu, Soy milk, Miso soup

大豆の国別生産量
soybean production by country
U.S.A, Brazil, Argentina, China, India, Paraguay, Canada, Others
This document is based on 2011 data from USDA.

大豆の栄養価
SOY BEANS NUTRITIONAL VALUE
vitamin, タンパク質 protein, ミネラル mineral, 食物繊維 dietary fiber

大豆は「畑の肉」と呼ばれ最新の栄養学で注目
肉に匹敵する量のたんぱく質を含んでいる。
Soy beans has so much nourishment that it is called "meat in a garden" and is paid attention to in the latest nutrition.

おからについて
ABOUT OKARA
豆腐を作った後のしぼったもの
豆腐をつくる時にできる豆乳から分離したドロドロした状態の食用残ったもの
Okara is the edible pulpy residue separated from soy milk in the production of tofu.

具材たくさん味噌汁の栄養価
Energy Calcium Vitamin C Protein Iron Lipid
Smell dried sardines, Eggplant, Okura, Burdock

野菜の効果
今回使う野菜
トマト...リコピンが多く含まれており、(Tomato) (lycopene)
紫外線対策にもなります。

なすび...カリウムが豊富。
(Eggplant) (Potassium)
夏バテ防止に効果的。
(The summer prevention) (Dietary fiber)
ごぼう...食物繊維を多く含む。
(Burdock)
貧血防止になる。
(Prevent anemia)

具材たくさんスープの栄養価
Energy Calcium Vitamin C Protein Iron Lipid
Onion, Sausage, Corn, Cabbage, Paprika, Consomme soup

野菜の効果
今回使う夏野菜
コーン...ビタミン・ミネラルなどの (Corn) (Vitamin) (Mineral)
栄養成分が豊富。疲労回復に最適。

Miso soup VS **Consomme soup**

2. 文化祭企画（クラスの取り組み）を考える中で、食文化を探究するにあたり生産地のことを知ることは重要であるとの考えから、地元朝倉の復興支援に取り組むことに至った。中村学園大学の栄養科学部の手嶋教授に現地の農産物に関する問題点についてヒアリングし、JA 筑前あさくらに企画の依頼を行った。そして、現地視察（JA 筑前朝倉、柿農家、選果場）を行い、現状の問題点を把握した。また、地元の農産物等の販売促進を推進している企業「トドケル株式会社」の代表大島聖子氏に協力を頂くことになり、実際にプロのアドバイスを受けながら企画・開発を進めることになった。さらに、「食と環境」の授業において湯布院で地元の食材だけを使ったイタリアンレストランを経営するシェフの田井正宣氏に地産地消のメリットについて講演して頂いた。この講演での話をヒントにして、メインの商品を次の5種類 ①焼きそば（ほぼ100%朝倉の食材を使用）②朝倉産小松菜とバナナのマフィン ③果物（いちじく・柿）④野菜（鍋セットとして販売）⑤加工品（ジャム・ドレッシング等）に分け販売するに至った。パッケージは全て脱プラスチックで考え、環境問題にも取り組んだ。

生徒作成チラシ、文化祭当日掲載新聞記事



九州豪雨被災地である朝倉市の復興を支援しようと、福岡市城南区の中村学園女子高2年1組の生徒22人が朝倉市の農産物を使ったマフィンを作り、5日の同校文化祭「水仙祭」で販売する。「被災地に貢献できれば」と初めて企画した。生徒たちは夏休み中の8月、朝倉の農家や選果場に足を運び、現状を聞き取り調査。「傷がある農産物は売れない」「柿は皮むきに手間がかかるなどの理由で消費が伸び悩んでいる」と聞き、商品化を企画した。朝倉産の小松菜を練り込んだマフィンを約100個、事前に用意。当日は朝

きょう文化祭で販売

倉産野菜をたっぷり入れた焼きそばを調理販売する予定。万能ネギや水菜などの「鍋セット」やイチジク、柿も販売。買って作ってみたいくなるように生徒が考案したレシピも添える。柿の葉を原料にしたお茶、ドライフルーツ、ドレッシングなどの加工品も約10種並ぶ。

まとめ役の下野真奈さん(17)は「水仙祭に向けて時間をかけて企画してきた。朝倉の農産物のおいしさを知ってもらい、被災地を考慮のきつかけになれば」と来場を呼び掛けている。水仙祭は午前9時半～午後3時。(小林穂子)

朝倉産小松菜使いマフィン 中村学園女子高生 復興後押し



文化祭で販売する小松菜とバナナのマフィンを作る中村学園女子高の生徒たち

3. 海外フィールドワークで訪れるマレーシア・シンガポールについての事前学習授業を地歴公民科担当者が行い、2つの国の経済状況について学んだ。歩いて国境を行き来することができる2つの国だが、経済状況だけでなく、宗教や文化、教育等も大きく違うことがわかった。生徒たちはこの事前学習を通して興味関心を持ったことをテーマに海外フィールドワークを行った。

D「食と経済」(家庭科・担任)

昨年度は同時期に「食と栄養」のクールで世界の食糧事情、世界の給食、日本の給食や食育活動について、様々な資料から考えを深めた。世界の食問題を解決する一助となる給食献立の作成を行い、調理実習を行った。本年度は文化祭で協力頂いた「トドケル株式会社」大島氏より、アイスの商品開発を行うこと提案頂いた。商品開発の企業として「アイスシゼンワークス」代表の古田森也氏に協力頂くことになった。企画書の提案・発表までは行えたが、具体的な商品開発までには時間がかかるため、次年度へ持ち越しとなった。2020年夏頃に完成の予定である。

目的

1. 商品開発に必要な基本的な知識を身につけ、問題解決への提案や具体的な方策を示し、実践する態度を養う。
2. アイスを通じて食に関する問題について探究し、その解決の一助となるような企画書作成を行う。
3. 企業と協力して世の中に流通する商品を作成し、そのテーマやコンセプトの良さを多くの人に知ってもらう。

内容

商品開発を行っていくために、トドケル株式会社大島氏とアイスシゼンワークス古田氏に商品開発のポイントや魅力、実際に開発した「高齢者のための栄養型アイスクリーム」の完成までの苦労についてご講演頂いた。その後、グループを5班に分けそれぞれで企画書の作成に入った。それぞれ、ターゲット・コンセプト・目的・問題点等を考え、5つの案が完成した。5つの案はそれぞれ ①高齢者向け健康志向アイス ②子ども向け栄養アイス ③外国人（オリンピック）向け高級アイス ④外国人（アジア）向けアイス ⑤ペット（犬）向けアイスである。この5つの案について協力企業にプレゼンし、「②子ども向け栄養アイス」が最も実行可能な案として採用された。廃棄されるトマトを利用し単価を抑え、りんご、ブルーベリー、人参、パプリカ等を入れた栄養面と環境面の両方を考えた内容には企業側の担当者も驚いておられた。

商品開発生徒発表PPT：子ども向けアイスクリーム



<2> SGH 報告会

[日程] 2月10日(月) 9:30~12:00

[場所] 講堂・教室

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

[出席者] 中学生、高校1・2年、運営指導委員、他校教職員、保護者、その他本校関係者

[内容・生徒発表]

① マレーシア・シンガポール海外フィールドワークの報告

10月19日～24日に実施された2年SGクラスのマレーシア（ジョホールバル）とシンガポールへの海外フィールドワークで学んだことを説明した。また、現地の加工品等の食品類にアレルギー表示が無いことに気付き、スーパーやコンビニ等に見た目で分かるようなポップを作る等の対応を改善策として提案した。

② 全国高校生フォーラムの報告

全国高校生フォーラムで2年SGクラス生徒3名が発表したポスターセッションの内容を英語で報告した。内容は、日本とマレーシアの水道システムの違いから、渡航先で水道水を飲むようにすることでの環境面と健康面の改善を考察したもの。

③ 子ども向けアイスクリームの商品開発の報告

2年SGクラス生徒2名により現在クラスで取り組んでいるアイスクリーム商品開発の途中経過を発表した。野菜嫌いの子にも食べやすいように、トマト・人参・パプリカにフルーツを混ぜ、栄養面も考えた商品である。また、トマト農家とも共同して廃棄せざるを得ないトマトを使い、環境面にも配慮した内容で取り組んでいる。

④ Youth Discovery Tour 2019 in Beijing の参加報告

SGクラブ1年生5名が12月19日～25日に参加したアジア太平洋子ども会議イン福岡主催の北京研修プログラムで学んだことと、その学びを活かして今後の学校生活や学習活動にどのようにつなげていくかを発表した。また、ボランティア活動の参加等も呼びかけ、体験から得られる学びの重要性を伝える良い機会になった。

⑤ アジア高校生架け橋プロジェクト留学生とSGクラス内定生徒（1年）による発表

「アジア諸国の食の安全性」をテーマに、アジア架け橋留学生10名とSGクラス内定生徒30名を4つのグループに分けて、12月下旬より協働で探究活動を行った。アジア諸国が抱える、食と結びつく衛生・環境・健康の問題を見出し、留学生と本校生の双方の視点からアイデアを出し合い、実践可能な解決策を発表した。発表した本校生は、留学生からアジア諸国の現状を聞くことで、日本の今の状況が決して当たり前ではないことをより強く実感できた。また、解決策を考えることがSDGsにつながる活動になることを学ぶことができた。

⑥ ポスターセッション

冬休みの課題として、中学生及び高校1・2年生に対して「食の安全性」に関する諸問題とその解決策をまとめたポスターの作成を課した。クラス内の選考を経た各クラス4名、計92名の発表者が、各教室に分かれてポスターセッションを実施した。今回、初めて中学生も代表者8名が高校生に混じって発表を行った。参加者は、単に発表を聴くだけではなく、積極的に質問し、意見や感想を付箋に記入して発表者へのフィードバックも行った。今回も前回に続き、最も良い発表者への投票を実施し、会の終了後に優秀者3名を発表した。優秀者は全校集会やチラシ等で内容を紹介する機会を設ける予定である。

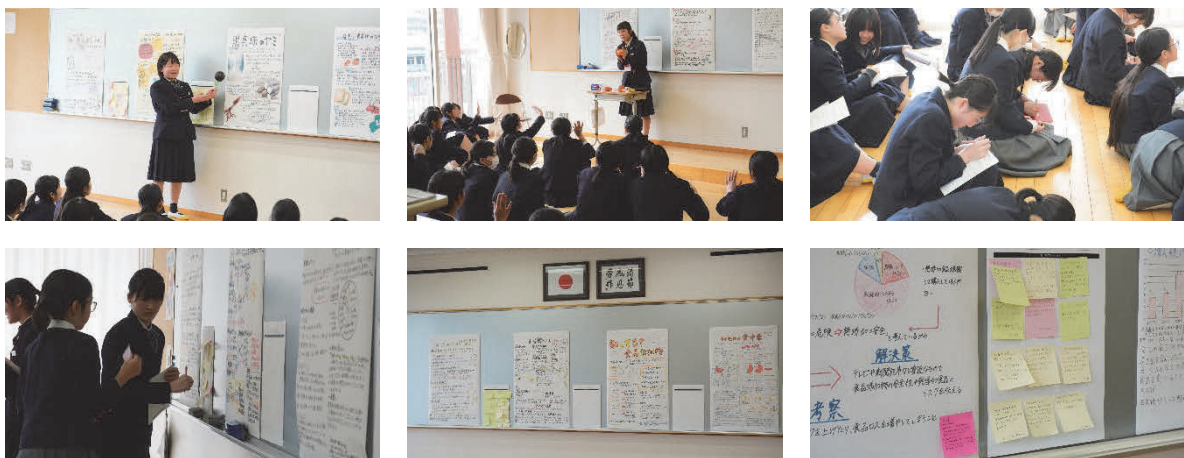
全体発表



SG クラス内定生徒と留学生との発表



ポスターセッション～「食の安全性」



Ⅲ 実施報告書－研究課題③

〈3〉「食のサミット」の実施

今回で3回目となる「食のサミット」は、これまで探究科を中心として実践してきた探究活動の集大成となる発表の場であり、本校のSGH事業最大のイベントである。昨年度と同様に、国内外にコンテストの参加を呼びかけた。前回までの2回は予選を通過した6チームで行う本選を開催したが、今回はアジア高校生架け橋プロジェクトで本校に留学していた3名の生徒の学校からの応募があり、今回がSGH指定としての最終年度の開催であるために、7カ国9チームに増やした形での本選を開催した。なお、今回のテーマは「食と飢餓」とした。

[目的]

本校が進めるSGH事業『地球規模の課題「食」を通じたグローバル・リーダーの育成』の集大成となる行事として、選抜された世界各国の中高生による食に関する諸問題についての解決策を協議し披露する場とする。また、それらの解決策を提言としてまとめ国連関係機関（国連WFP協会）に提出することで、永続的で協働的な問題解決へのメッセージを国内外へ発信する。

[日程] 7月12日(金)・13日(土) ※7月14日(日)は太宰府観光

[場所] 講堂・視聴覚室

[テーマ] 世界における「食と飢餓」に関する諸問題とその解決策

“Food and Hunger Problems in the world and their solutions”

[出場者の募集及び審査の形式]

- ▶ 予選：公募によりテーマに基づいた提言書及び主張ビデオ作品（1分以内）の提出。
 - 委員による審査・選考。
 - 校内選考での1チームに加えて、今回は国内外から8チーム、計9チームを本選出場チームとした。
- ▶ 本選：提言書の内容をより具体的に説明し、工夫を凝らしたプレゼンテーション（5分）を行い、審査員がルーブリック評価により審査・投票。参加生徒は、最優秀を1チーム選び投票。
 - 審査員による審査と生徒による最多得票チームを総合評価して最優秀チームを決定し、表彰。

[実施までの経過]

- ▶ 平成31年1月～3月末…HPにて実施要項掲載・エントリー受付～エントリー受付〆切
- ▶ 令和元年5月中旬まで…主張ビデオ提出〆切（7ヶ国32チーム）
- ▶ 令和元年5月末…予選選考及び本選出場チーム（7ヶ国9チーム）確定
- ▶ 令和元年6月18日にアメリカ Corning Union High School のチームと、6月25日にマレーシア Sultan Ibrahim Girls School のチームと事前のビデオ会議を実施

[大会期間中のスケジュール]

時刻	内容〔場所〕
1日目：7月12日（金） ※プレ会議参加者：出場者・SGクラス	
	午前中までに各チーム福岡入り
11:30	学校到着 昼食〔大会議室〕
13:30	<u>プレ会議</u> 〔視聴覚室〕 ※休憩時間に校内見学等
17:30	夕食〔カフェテリア〕 夕食後、ホテルへ送迎
2日目：7月13日（土） ※参加者：出場者・中高全生徒	
9:00	出場者本校到着、リハーサル〔講堂〕
11:00	昼食
12:00	開場
12:30	<u>歓迎レセプション</u> ①チーム入場 ②生徒代表挨拶 ③参加校・チーム紹介 ④校歌斉唱
13:00	<u>開会</u> <u>《開会行事》</u> ①開会宣言 ②校長挨拶 ③代表校挨拶 ④来賓・審査員紹介
13:10	<u>《第1部：コンテスト本選（第1グループ）》</u> 第1グループ3校～マレーシア・日本・アメリカ： ①主張プレゼンテーション（各校5分） ②質疑応答（8分）
13:35	<u>《第2部：大豆は世界を救う!?!》</u> 食材としての大豆の魅力と大豆を使った簡単レシピの紹介
13:55	<u>《第3部：コンテスト本選（第2グループ）》</u> 第2グループ3校～韓国・モンゴル・日本（本校）： ①主張プレゼンテーション（各校5分） ②質疑応答（8分）
14:20	休憩
14:35	<u>《第4部：Good morning let' s start with breakfast》</u> 朝食を摂ることや栄養バランスの大切さと和食の良さについて
14:30	<u>《第5部：コンテスト本選（第3グループ）》</u> 第3グループ3校～マレーシア・ウズベキスタン・バングラデシュ： ①主張プレゼンテーション（各校5分） ②質疑応答（8分） ③評価・投票
15:25	休憩
15:35	<u>《第6部：共同宣言策定》</u> ①趣旨・経過説明 ②共同宣言案の提示 ③討論（プレ会議ビデオ上映） ④ 最終共同宣言
16:00	<u>《閉会行事》</u> ①記念品授与 ②結果発表 ③表彰 ④講評 ⑤閉会宣言
16:20	閉会、代表チーム記念撮影、後片付け、フェアウェルパーティー会場へ移動
17:15	<u>フェアウェルパーティー</u> 〔カフェテリア〕
19:30	終了後、ホテルへ送迎

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

3日目：7月14日（日）		※参加者：出場者・SGクラス
10:00	太宰府観光	
14:00	ホテル経由で博多駅へ送迎	到着後、解散

[当日の参加者数]

中学・高校全学年 1,287名、教職員 92名、保護者 51名、
来賓 31名、一般客 3名、他校の本選出場者関係(生徒 25名、引率 10名) 合計 1,499名

プレ会議

各チームの自己紹介を兼ねて主張の概要を確認した後、5グループに分かれて共同宣言策定に向けてそれに盛り込むべき「食と飢餓」に関わる問題点と解決策を話し合った。最後にグループの代表者が結果を持ち寄り、それらをまとめて共同宣言の素案が完成した。



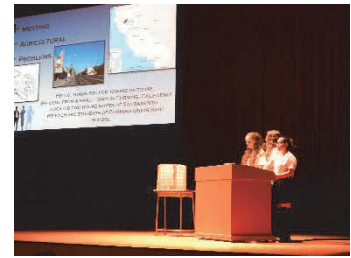
歓迎レセプション

食のサミットの開会の直前に、本選出場チームを全校生徒で盛大に歓迎した。

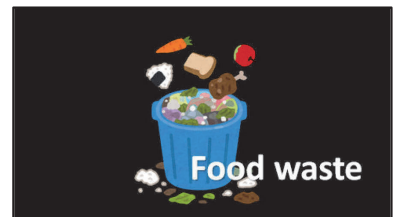


コンテスト本選（第1部・第3部・第5部）

本選に参加する9チームそれぞれが、「食と飢餓」に関わる問題点とその解決策に関するプレゼンテーション（5分）を行い、その後で審査員や聴衆からの質問に答える質疑応答（8分）を行った。今回は特に本校中学生からの積極的な質問が目立った。



PLEASE PAY ATTENTION TO HUNGER MORE !!



First
People that follow our account become **aware of hunger.**

Second
We want them to **try** to do the solutions that we posted.

One of our eco-cooking post
4200

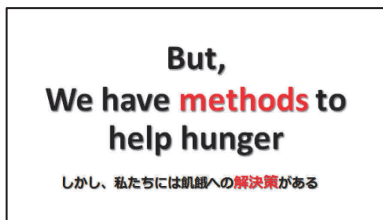
We didn't expect **so many people** to see **our post.**
私たちは、こんなに多くの方が投稿を見てくれるとは思いませんでした。

If everyone in this room, **followed** our twitter, and **spread** it.....
もし、この場にいる皆さんが私たちのTwitterをフォローし、広めると...

We think that even more people will **pay more attention** about hunger.
より多くの方が関心をもっと意識するでしょう

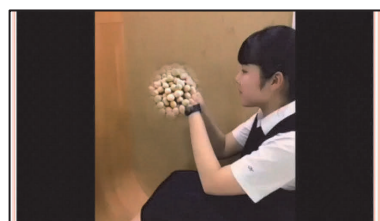
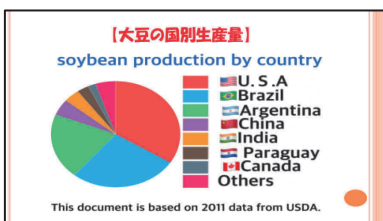
Just one tweet could change **someone's awareness** about the situation of hunger.
1回のツイートが誰かにとって関心に関心を持つきっかけになりうる

We as high school students have **limited capabilities**
私たち高校生の能力では**限界**がある



ステージイベント（第2部）：大豆は世界を救う！？

2年SGクラスの生徒が、世界中で問題となっている「飢餓」や「フードロス」に対する解決策の提案として大豆食品について着目し、その有用性についての調査結果をイベント仕立てて報告した。イベントの中では、実際に調理した「おからクッキー」を来賓や本選出場チームに試食してもらった。



ステージイベント（第4部）：Good morning let's start with breakfast

2年SGクラスの生徒が2つのチームに分かれ、「朝食の重要性」をテーマに、朝食に適した2種類のスープについて、栄養価の考察を中心にプレゼンテーションを行った。イベントの中では、実演として実際に調理した2種類のスープを一般生徒に試食してもらった。



共同宣言

前日に練っておいた共同宣言の素案を仕上げ、完成させるための最後の話し合いの場。完成した提言書を審査委員長の副島雄児氏（九州大学）に手渡した。この提言書は後日、学校長によって国連 WFP 協会へ届けられた。



閉会行事

本選出場者に一人ずつ記念のメダルを贈った。また、本選プレゼンテーションの最優秀賞の表彰が行われ、中村学園女子高等学校（The Three Gingers）チームが栄冠に輝いた。



[提言書(英語)]

Food Summit 2019 Joint Statement

July 13, 2019

Nakamura Gakuen Girls' High School

1. Introduction

Some of our human kind is experiencing harsh conditions such as famine. But while some of us are wealthy enough whereas the huge number of people are under severe conditions. One in nine people are going hungry. We found a comprehensive solution to solve these issues.

2. Our Proposal

(1) Current Issues

1. Food wastage, leftover
2. Poverty

3. Lack of investment
4. Lack of knowledge and awareness

(2) Proposal of Solutions

1. Collect wasted food, sort and distribute with volunteers, NGOs, governmental efforts
2. Donation and charity
3. We will get a favor from the people by using social media, such as facebook, Instagram, and twitter.
4. Teach underprivileged people to avoid dependence upon donation, which means to teach them how to make things by anything that they have.

(3) Action Plan

1. Use volunteers to help reuse and recycle wasted food. Sort, separate, and distribute among those in need.
2. Spread #startsmallgobig to raise awareness, donation plan, create websites like gofundme.com to raise awareness because a huge number of people do not know where to donate the money.
3. We will start it by using celebrities to begin in a whopping scale, then it will spread in any area by assembling people for one purpose. As we said in the second solution, we will establish a site to let them allow to donate for underprivileged people and agricultural purpose. We believe which will be applied a wide range by virtue of some prime examples.
4. Students or anyone can go to the underprivileged people how to make things by anything like origami, or stuffs like that, which will help them how to live by themselves without waiting others to do things for them.

3. Conclusion

We believe that our solution will be comprehensive. At first, we will encourage volunteers, families, and others to help the underprivileged people to live equally by doing these things gradually. The first solution can provide them with food, and the second solution will spread our donating website throughout the world, and the third solution will allow a large volume of people to attend in the movement, then the last solution will teach underprivileged people how to live well by doing things by themselves. Hence, our solution can be conducted with one another to increase the equality, and the volunteers, or anyone choose which one they want to do. As a result, global issues will be diminished dramatically, if we can apply these solutions.

[提言書(日本語)]

食のサミット 2019 共同宣言

2019年7月13日
中村学園女子高等学校

1. Introduction はじめに

地球上には飢餓などの厳しい状況に直面している人々がいる一方で、一部の人は十分すぎる富を手に入れている。現在、世界では9人に1人が飢えているといわれている。私たちはこの問題を解決すべく、以下の内容を提案する。

2. Our Proposal 提案

(1) Current Issues 現在の問題

- 1 食糧廃棄
- 2 貧困
- 3 資金の不足
- 4 知識と意識の不足

(2) Proposal of Solutions 解決法の提案

- 1 廃棄された食糧を集め、政府やNGO、ボランティアの協力の下で再分配を行う。
- 2 寄付と慈善活動。
- 3 SNSの活用。
- 4 寄付に頼らないよう、教育の機会を得られない人々への教育を行う。

(3) Action Plan 活動計画

- 1 廃棄食糧の再利用、再使用にボランティアを募り、それを必要とする人々に配布する。
- 2 問題意識を高めるために、#startsmallgobigを広め、寄付金を募ることを目的としたクラウドファンディングのサイトを立ち上げる。
- 3 主要な校外活動として認め、単位を付与する。
- 4 初等教育において飢餓に関連する教科を加える。

3. Conclusion 結論

長期的な解決策を考えたとき、それらはまず、我々から始めていくべきものだという結論に達した。私たちは飢餓問題を自身の問題であると考え、周囲に協力を仰ぎ、必要とする人々に食糧を供給すべきである。今回の提案は、国内外を問わず賛同を得られるものになるだろう。たとえ小さなことでも一人ひとりの行動が、大きな問題解決に向けての効果的な第一歩となると我々は確信している。

[パンフレット(エントリーチーム)]

A Team
Food Fighter

School AlI Sana Tapan
City/Country Malaysia
Members Alifhuda Khairi (17)
Muhammad Farhan Bin (17)
Shah Nizam Haziq Bin (17)
Nur Hafizah Laili Binti (16)
Nur Hafizah Laili Binti (16)

Title of Movie Food Scarcity / 食糧不足
Topic Food Scarcity / 食糧不足

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
Food scarcity is a global issue that affects billions of people every day. It is caused by various factors such as climate change, population growth, and land degradation. This leads to a significant loss of arable land and a decrease in food production, which in turn results in food insecurity and malnutrition. The impact of food scarcity is most severe in developing countries where the majority of the population relies on agriculture for their livelihood. This not only affects their economic stability but also their health and well-being. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, farmers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of food scarcity, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in agricultural research and development to improve crop yields and develop drought-resistant varieties. Secondly, farmers should adopt sustainable farming practices that conserve water and soil nutrients. Thirdly, consumers should be encouraged to reduce food waste and support local farmers. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
We have a food crisis on our hands, and it's time to take action. Food scarcity is not just a distant threat; it's a reality for many people around the world. We need to work together to find solutions that ensure everyone has access to the food they need to live. Let's start by reducing our own food waste and supporting local agriculture. Together, we can make a difference and ensure a sustainable future for all.

B Team
Idee

School Kyoto Gakuem High School
City/Country Kyoto / Japan
Members Ayumu Nakano (17)
Rena Hamada (17)
Ryota Oshita (16)
Kae Nishimura (16)

Title of Movie Possibilities of small-scale agriculture with inmates / 入刑者の小規模農業の可能性
Topic Possibilities of small-scale agriculture with inmates / 入刑者の小規模農業の可能性

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of small-scale agriculture with inmates is a complex one. It involves the intersection of social justice, environmental sustainability, and public safety. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. Small-scale agriculture can provide inmates with a sense of purpose, improve their mental health, and teach them valuable skills that can be used after their release. Additionally, it can contribute to the local economy and provide fresh produce to the community. However, it requires a supportive environment with access to land, tools, and training. Addressing these challenges is crucial for realizing the potential of small-scale agriculture with inmates.

Solution of Issue / 解決
To address the challenges of small-scale agriculture with inmates, several measures can be taken. Firstly, governments and local communities should provide inmates with access to land and resources. Secondly, training and support should be provided to help inmates develop the necessary skills and knowledge. Thirdly, partnerships should be established between correctional facilities and local farmers or food banks to facilitate the distribution of produce. Finally, it is important to ensure that the program is implemented in a safe and secure manner, with proper supervision and protocols in place.

Message to Audience / メッセージ
Small-scale agriculture with inmates is not just a concept; it's a reality that can make a difference. It offers a path to rehabilitation and reintegration for those who have been incarcerated. By providing them with the opportunity to grow and harvest, we can help them build a better future for themselves and their communities. Let's support these efforts and work towards a more just and sustainable society.

C Team
M.A.P.

School Corning Union High School
City/Country California
Members Michaela Corley (17)
Aggelos Stasos (17)
Tatiana Vilimas (17)

Title of Movie M.A.P.
Topic M.A.P.

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of M.A.P. (Microplastic Air Pollution) is a growing concern as it affects human health and the environment. Microplastics are tiny plastic particles that are found in the air, water, and soil. They are caused by the breakdown of larger plastic items and are inhaled or ingested by humans and animals. This can lead to various health problems, including respiratory issues and potential damage to internal organs. Additionally, microplastics can harm marine life and contribute to environmental pollution. Addressing this issue requires a combination of regulatory measures, public awareness campaigns, and technological innovations to reduce plastic waste and improve air quality.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of M.A.P., several strategies can be implemented. Firstly, governments should enforce stricter regulations on plastic production and disposal. Secondly, public awareness campaigns should be launched to educate people about the dangers of microplastics and encourage them to reduce their plastic consumption. Thirdly, technological innovations should be pursued to develop methods for capturing and filtering microplastics from the air. Finally, it is important to promote recycling and reuse of plastic materials to reduce the amount of waste that ends up in the environment.

Message to Audience / メッセージ
Microplastic Air Pollution is a hidden danger that we need to be aware of. It's not just a small problem; it's a global one that affects everyone. We need to take action now to reduce our plastic footprint and improve the quality of the air we breathe. Let's work together to create a cleaner, healthier world for ourselves and future generations.

D Team
SS

School Asia Pacific International School
City/Country Seoul / Korea
Members Kang Eun (18)
Seonja Grace Shin (17)
Jelly Casales (17)

Title of Movie Ending Hunger with One Job Drop / ひとつの職の辞めによる食糧不足
Topic Nutritious Jobless City Causes / 栄養豊富な職lessnessによる食糧不足

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of ending hunger with one job drop is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. One job drop can lead to a significant loss of income, which in turn results in food insecurity and malnutrition. This is particularly true in low-income households where the majority of the population relies on a single source of income. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, employers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of ending hunger with one job drop, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in job training and education programs to help workers develop new skills and find new employment opportunities. Secondly, employers should be encouraged to provide flexible work schedules and benefits to help workers manage their financial needs. Thirdly, consumers should be encouraged to support local farmers and food banks. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
Ending hunger with one job drop is not just a concept; it's a reality that can make a difference. It offers a path to economic stability and food security for those who have lost their jobs. By providing them with the opportunity to find new employment and access to food resources, we can help them build a better future for themselves and their communities. Let's support these efforts and work towards a more just and sustainable society.

E Team
Tumbaash

School 84th School of Ulaanbaatar
City/Country Ulaanbaatar / Mongolia
Members Anu Chuluurbaatar (17)
Tumulan Ochirjav (17)
Enkhbayar Dorj (17)
Dagvadorj Enkhbayar (16)

Title of Movie Tumbaash Team
Topic World is hungrier by a human race / 人類の食糧不足は増えている

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of world hunger is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. World hunger is a global issue that affects billions of people every day. It is caused by various factors such as climate change, population growth, and land degradation. This leads to a significant loss of arable land and a decrease in food production, which in turn results in food insecurity and malnutrition. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, farmers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of world hunger, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in agricultural research and development to improve crop yields and develop drought-resistant varieties. Secondly, farmers should adopt sustainable farming practices that conserve water and soil nutrients. Thirdly, consumers should be encouraged to reduce food waste and support local farmers. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
World hunger is a global issue that we need to be aware of. It's not just a small problem; it's a global one that affects everyone. We need to take action now to reduce our own food waste and support local agriculture. Together, we can make a difference and ensure a sustainable future for all.

F Team
The Three Gingers

School Nakamura Gakuem Girls High School
City/Country Fukuoka / Japan
Members Sakuma (18)
Yoshida Makiko (18)
Julia Tera Jun (16)

Title of Movie Please pay more attention to hunger / 食糧不足に更多の注目を
Topic Please pay more attention to hunger / 食糧不足に更多の注目を

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of paying more attention to hunger is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. Hunger is a global issue that affects billions of people every day. It is caused by various factors such as climate change, population growth, and land degradation. This leads to a significant loss of arable land and a decrease in food production, which in turn results in food insecurity and malnutrition. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, farmers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of paying more attention to hunger, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in agricultural research and development to improve crop yields and develop drought-resistant varieties. Secondly, farmers should adopt sustainable farming practices that conserve water and soil nutrients. Thirdly, consumers should be encouraged to reduce food waste and support local farmers. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
Please pay more attention to hunger. It's not just a small problem; it's a global one that affects everyone. We need to take action now to reduce our own food waste and support local agriculture. Together, we can make a difference and ensure a sustainable future for all.

G Team
HYDROSVALORS

School Sultan Ibrahim Girls School
City/Country Johor Bahru / Malaysia
Members Cham Ling (16)
Kerwinah Cheng Wany (16)
Kerwinah Gobalishman (16)

Title of Movie To Create a Hydrogels Kit that Encourage Selfliance / 自己啓発を促す水凝胶キットの作成
Topic Modification of hydrogels / 水凝胶の改変

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of creating a hydrogels kit that encourages selfliance is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. Hydrogels are a type of polymer network that can absorb and retain large amounts of water. They have a wide range of applications in various fields, including agriculture, medicine, and environmental science. However, the current hydrogels kits are often expensive and difficult to use. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, researchers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of creating a hydrogels kit that encourages selfliance, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in research and development to improve the design and performance of hydrogels. Secondly, researchers should develop user-friendly kits that are easy to use and affordable. Thirdly, consumers should be encouraged to support local researchers and scientists. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
Creating a hydrogels kit that encourages selfliance is not just a concept; it's a reality that can make a difference. It offers a path to economic stability and food security for those who have lost their jobs. By providing them with the opportunity to find new employment and access to food resources, we can help them build a better future for themselves and their communities. Let's support these efforts and work towards a more just and sustainable society.

H Team
Icon

School Academics of Uoam Westmar International University in Turkant
City/Country Turkant / Uzbekistan
Members Arifingil Doronova (16)
Faiza Khasanova (16)
Daria Gubalishman (16)

Title of Movie Technology Against Hunger / 食糧不足をテクノロジーで解決
Topic Hunger in developing world / 発展途上国の食糧不足

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of technology against hunger is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. Technology can play a significant role in addressing the issue of hunger by improving agricultural productivity, reducing food waste, and providing access to food resources. However, the current technology against hunger initiatives are often expensive and difficult to use. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, researchers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of technology against hunger, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in research and development to improve the design and performance of technology against hunger initiatives. Secondly, researchers should develop user-friendly initiatives that are easy to use and affordable. Thirdly, consumers should be encouraged to support local researchers and scientists. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
Technology against hunger is not just a concept; it's a reality that can make a difference. It offers a path to economic stability and food security for those who have lost their jobs. By providing them with the opportunity to find new employment and access to food resources, we can help them build a better future for themselves and their communities. Let's support these efforts and work towards a more just and sustainable society.

I Team
ACC 1

School Anjeev Cantonment College
City/Country Dhaka / Bangladesh
Members Farhana Arin Ripa (16)
Sayed Hossain Sayed (16)
Nayem Hossain Protal (16)

Title of Movie Hunger Problem Caused by War and Conflict / 戦争と紛争による食糧不足
Topic Hunger Problem Caused by War and Conflict / 戦争と紛争による食糧不足

Current Issue of Topic / テーマの現状と課題
The issue of hunger problem caused by war and conflict is a complex one. It involves the intersection of economic stability, social justice, and food security. While there are many challenges, such as limited resources and potential security concerns, there are also significant opportunities. War and conflict can lead to a significant loss of arable land and a decrease in food production, which in turn results in food insecurity and malnutrition. Addressing this issue requires a multi-faceted approach involving governments, farmers, and consumers to ensure a sustainable and equitable food system for all.

Solution of Issue / 解決
To solve the issue of hunger problem caused by war and conflict, several strategies can be implemented. Firstly, governments should invest in agricultural research and development to improve crop yields and develop drought-resistant varieties. Secondly, farmers should adopt sustainable farming practices that conserve water and soil nutrients. Thirdly, consumers should be encouraged to reduce food waste and support local farmers. Additionally, international cooperation is essential to share knowledge and resources, ensuring that all regions have access to the food they need to survive and thrive.

Message to Audience / メッセージ
Hunger problem caused by war and conflict is not just a concept; it's a reality that can make a difference. It offers a path to economic stability and food security for those who have lost their jobs. By providing them with the opportunity to find new employment and access to food resources, we can help them build a better future for themselves and their communities. Let's support these efforts and work towards a more just and sustainable society.

[参加生徒アンケート]

食のサミット 生徒アンケート結果 ※値は「1 非常にそう思う」・「2 そう思う」の合計 (%)

No.	調査時期	質問	全体	中学	高1	高2	高3
1	事前	私は国際的な問題やニュースに関心を持っている。	65.3 %	56.9 %	60.2 %	63.3 %	73.9 %
22	事後	「食」のサミットで取り上げられた課題以外に、「食」に関する課題について考えてみたくなった。	86.0 %	79.7 %	86.9 %	86.3 %	85.9 %
2	事前	私は国際社会における日本の役割について興味がある。	58.4 %	43.1 %	53.7 %	57.8 %	66.6 %
27	事後	一つの課題について、多様な文化背景を持つ人々と共に解決策について議論することに興味がある。	84.8 %	79.7 %	86.9 %	82.8 %	85.6 %
3	事前	途上国には「食」に関する課題がある。	94.1 %	87.5 %	93.5 %	97.3 %	92.9 %
16	事後	途上国には「食」に関する課題がある。	98.6 %	96.9 %	99.1 %	99.4 %	97.6 %
4	事前	私は途上国にある課題やその解決策に興味がある。	69.7 %	59.7 %	70.0 %	67.4 %	73.6 %
17	事後	私は途上国にある課題やその解決策に興味がある。	87.9 %	79.7 %	90.5 %	84.0 %	90.5 %
5	事前	途上国にある課題の解決は、日本の私たちに深い関係がある。	83.4 %	68.1 %	79.8 %	90.4 %	83.2 %
18	事後	途上国にある課題の解決は、日本の私たちに深い関係がある。	95.4 %	93.8 %	95.8 %	96.8 %	94.0 %
6	事前	日本国内には「食」に関する課題がある。	86.9 %	75.0 %	86.9 %	89.9 %	86.4 %
19	事後	日本国内には「食」に関する課題がある。	93.6 %	84.4 %	92.9 %	93.9 %	95.7 %
7	事前	日本社会が抱える課題について、「解決したい」という意思がある。	76.8 %	62.5 %	79.0 %	79.7 %	74.5 %
20	事後	日本社会が抱える課題について、「解決したい」という意思がある。	89.3 %	78.1 %	92.0 %	90.4 %	87.8 %
8	事前	私は「食」に関する課題の解決に興味がある。	69.7 %	58.3 %	70.3 %	69.3 %	71.7 %
21	事後	私は「食」に関する課題の解決に興味がある。	87.6 %	78.1 %	89.3 %	85.8 %	89.4 %
9	事前	「食」に関する課題を解決することは、社会にある他の課題解決につながる。	86.8 %	70.8 %	88.8 %	89.0 %	85.6 %
23	事後	「食」に関する課題を解決することは、社会にある他の課題解決につながる。	95.8 %	93.8 %	97.6 %	96.5 %	93.8 %
10	事前	私は中村に入学して以降、「食」に関することに興味・関心が増した。	65.5 %	65.3 %	57.8 %	71.2 %	67.7 %
24	事後	「食」のサミットを通じて、「食」に関することに興味・関心が増した。	90.3 %	87.5 %	92.9 %	89.0 %	89.7 %
11	事前	外国人など、多様な文化背景を持つ人たちの考えを聞くことは面白い。	84.1 %	72.2 %	86.6 %	85.8 %	82.3 %
25	事後	外国人など、多様な文化背景を持つ人たちの考えを聞くことは面白い。	94.5 %	87.5 %	97.0 %	94.2 %	93.8 %
12	事前	外国人など、多様な文化背景を持つ人たちの考えを聞くことは、自分のためになる。	86.6 %	70.8 %	89.4 %	88.8 %	84.8 %
26	事後	外国人など、多様な文化背景を持つ人たちの考えを聞くことは、自分のためになる。	96.2 %	90.6 %	98.2 %	98.0 %	93.8 %

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

13	事前	自分とは異なる文化背景を持つ人たちが、日本や日本人についてどのように考えているか知りたい。	82.4 %	69.4 %	86.4 %	83.0 %	80.4 %
28	事後	自分とは異なる文化背景を持つ人たちが、日本や日本人についてどのように考えているか知りたい。	91.5 %	79.7 %	94.3 %	91.9 %	90.8 %
14	事前	多様な考えに触れることは、自分の将来に役立つ。	92.1 %	79.2 %	94.8 %	95.1 %	88.9 %
29	事後	多様な考えに触れることは、自分の将来に役立つ。	95.1 %	84.4 %	97.9 %	97.4 %	92.4 %
15	事前	多様な考えに触れるために、海外に行ってみたい。	69.5 %	55.6 %	72.2 %	66.6 %	72.6 %
30	事後	多様な考えに触れるために、海外に行ってみたい。	77.5 %	76.6 %	76.8 %	75.9 %	79.9 %

[アンケート結果の分析]

昨年度に引き続き今年度も、すべての質問において、肯定的に捉えている回答の割合が、事前より事後の調査で上回っている。このことから、「食のサミット」の実施による良好な効果が得られたと考えられる。これらの結果から考察できることを以下に挙げる。

- ▶ 例年であれば、多くの質問項目において肯定的に捉えている割合は学年が進むごとに高くなる傾向にあるが、今年度は質問項目によってそのピークを迎える学年が異なる結果となった。
- ▶ 高校1年生と2年生において、高い肯定のパーセンテージを示しているのはNo.16・18・20・23であり、これはいずれも食に関する「課題」についての質問項目である。これは学年単位でSGHに関する活動が最も活発化するのが高校1年次・2年次であり、これまでの探究活動や講演・講座等の取り組みを通して、食に関する課題に強く関心を持つ時期であるからと考えられる。また、No.26・29の肯定のパーセンテージも非常に高い。これらの質問は多様な文化や考えに触れることが「自分の将来に役立つと思うか」の質問である。特に高校2年生は自分の進路について具体的に考え始める時期にあり、現在、また将来、社会において当事者となることへの意識の芽生えが伺える。
- ▶ 中学生は、他学年に比べ、事前から事後にかけての肯定パーセンテージの伸び率が非常に高い。特にNo.2・27、No.4・17、No.8・21、No.10・24の伸び率が高く、これらはいずれも「興味・関心」に関する項目である。中学生にとって国際問題に関しての取り組みは新鮮なものであり、今回の「食のサミット」が低年齢の生徒に対しても十分な教育効果を与える事ができるイベントであったと言える。
- ▶ 高校3年生については、他学年に比べ事前アンケートの肯定パーセンテージが高く、事後への伸び率がやや低い傾向にある。これは、これまで取り組んできた活動の成果が成熟し、食や国際問題に対して、一個人としての考えや意識が持てるようになった結果であると考えられる。
- ▶ 学年全体での事前と事後の数値で上がり幅が大きいのは、No.2・27、No.4・17、No.8・21等「課題解決」に関するものがほとんどである。このことから、課題解決の発表の場という「食のサミット」の目的が多く生徒たちに浸透しているということが考えられる。
- ▶ 事後アンケートの結果のみに注目すると、15項目中14項目で昨年度を上回る肯定のパーセンテージを出しており、過年度比で見ても、昨年度以上に好ましい効果が得られたと言える。

唯一、昨年度の値を下回る結果となったのは No. 30「多様な考えに触れるために、海外に行ってみてみたい」であった（昨年度：83.4% → 今年度：73.1%）。この項目については、今年度の全質問項目の中で最も肯定のパーセンテージが低い。これは、今回「食と飢餓」をテーマとしているため、特に「食」を中心とした課題に偏りがちであったのがその原因であると考えられる。したがって、食の課題だけではなく、海外への興味を生徒に持たせるような試みも今後は検討していく必要がある。

[審査員・運営指導委員からのコメント(抜粋)]

① コンテスト本選について

- ▶ 水栽培キットや冷蔵庫アプリ、様々なプロジェクトの提案、さらには戦争や紛争による飢餓への提言等、課題に対する深い考察にとっても感心した。
- ▶ SNS を活用して解決策を考えるきっかけ作りを提供する点について、自分も協力したいと思った。次回の更新記事を楽しみにしたい。
- ▶ 最初に興味を引くクッキングの映像を流すことで問題点にフォーカスし、解決法を導くという一連の説明が大変分かりやすかった。
- ▶ 映像資料等が分かりやすくまとまっていた。力強いメッセージも多くの生徒・参加者に届いたと思う。

② ステージイベントについて

- ▶ 視聴者の興味を引ける内容について提示されていて良かった。昨年のイベントよりさらに進展された内容に仕上がっていると思った。
- ▶ とても良いブレイクになった。2年生主体のイベントであるため、生徒本人たちにとっては次に向けて良いステップとなり、後輩たちにとっても良い手本となったのではないだろうか。

③ 全体について

- ▶ 全体を通して生徒がいきいきと英語でコミュニケーションを取る姿に感心した。
- ▶ 年々グレードアップしてきており、生徒たちも年々活発になってきているように思う。
- ▶ 15～18 歳とは思えないプレゼンばかりですばらしいと思った。フードロス、飢餓についてとても勉強になった。自分も身近に取り組めることを実践していきたいと思えた。

<4> 論文集の作成

概要

- ▶ 「食」に関わる4つの探究テーマに基づく個人探究もとに論文を執筆。
- ▶ 論文規定を作り、字数、章立ての方法、参考文献の示し方等を指示した。その上でテンプレートを作り様式を整えさせた。

内容詳細

- ▶ 探究科の4つの学習領域である「食と社会文化」「食と環境」「食と経済」「食と栄養」を切り口とし、個人テーマはその4領域から大幅に逸脱しない限り、広く許容した。その結果、主体的な学習意欲を喚起できた。
- ▶ 論文の形式や作成方法は下のスライドの通りとした。生徒ごとに指導教員を定め、12月末までに完成させた。

卒業論文の形式と作成方法

1. 課題研究とは？

「課題」とは...
 ①仕事や勉強の問題や題目
 ②解決しなければならない問題

「研究」とは...
 先人たちが行った研究の語彙をふまえた上で、観察や実験などによる事実、データを基として、自分自身の省察・発想・アイデアなどに基づく、新たな知見を創造し、知の体系を構築していく行為。
文科省2006「研究活動の不正行為への対応のガイドラインについて」より抜粋

過去に示された考え
 根拠となる客観的なものを添えて
 単なるまとめではない「創造」

2. 論文とは？

決められた形式にしたがって研究内容をまとめたもの。

「調べ学習」の成果、「作文」との違いは？

論理性
 客観性
 重視される
 創造性
 他者への貢献

3. 課題研究の進め方

①テーマを決める
 「食と社会文化」「食と環境」「食と経済」「食と栄養」どのカテゴリーにするかを決めることから始める。
 ex. 郷土愛を育むカリキュラムデザインの創造
 ～イタリアでの地産地消と郷土愛の育まれ方の実態から学ぶ

②「問い」を立てる
 何を明らかにしたいのかをはっきりさせる。
 ex. 地産地消、生活習慣、風土などが、郷土愛とどのように結びついているのか？ そこから日本の教育に何を生かせるのか？

③仮説を立てる
 「問い」に対する「答え」を準備する。
 →これを今後、検証していく。
 ex. 日本よりも地産地消、生活習慣、風土などのすべての面で、日本より郷土愛を育む環境が整っているはずである。その環境には日本でも生かせる郷土愛を育むためのヒントがあるはずである。

④計画を立てる
 どのように仮説を検証していくのか。いつまでに、どのような方法で、どこまでを明らかにするか。
 ex. 方法：アンケート調査、聞き取り調査、視察、体験、文献調査など
 時期：イタリアでの調査は渡航期間、日本では6～3月

⑤調査・実験する
 何を明らかにするためにするのかを見失わないこと。記録をこまめにとる。

⑥まとめと考察
 調査や実験の結果から、仮説を検証し、考察する。
 ex. アンケート調査の結果から、○○ということがわかった。これは仮説が正しいことを証明するものである。しかし、□□の項目では...

⑦成果を共有する
 論文に書く。発表する。ポスターやHPなどで公表する。

4. 論文の形式（例）

①はじめに（序論）
 背景にあるもの、研究目的（問い）、先行研究、研究の意義、仮説など

②方法
 何を明らかにするのか、なぜその方法なのか、手順など

③結果と考察
 必要なグラフや表、写真、図を示す。読み取れること。

④結論・今後の課題や展望
 問いへの答えのまとめ。新たな課題、この成果の貢献など。

⑤引用文献・参考文献

論文タイトル

No.	氏名	タイトル
1	飯尾 莉子	体質改善のための民間療法と漢方薬の取り入れ方と効果
2	井上 桜子	食とサブカルチャーの融合の現代社会における食問題への影響
3	今村 早希	経済と栄養状態の関係性
4	上田 真鈴	食事制限の危険性
5	呉 知原	SNS が外食産業に与える影響
6	大島 弥澄	望ましい品種改良の方法とは
7	大坪 鈴	災害時の避難所での食事が及ぼす影響とその解決策

8	大屋 実優	和食で改善する食生活
9	國 姫捺子	フードロス削減のために
10	久保 桜	アテンション・トゥー・ハンガー
11	鋤持 美友	子ども達をとりまく『孤食』
12	下平 幸代	食品添加物
13	世尾 真琳	『摂食障害のSOS』～食と心理は繋がっている～
14	谷口 未優	ハラルフードの在り方 in Japan
15	津留崎 杏	ダイエット中の女子高校生の食生活とその改善
16	テン伊君寿理愛	食と色
17	外山 花音	Research about Nikkei
18	中嶋 みのり	ジビエと農業
19	那須 芽吹	和食の存在
20	野口 鈴加	給食の在り方
21	朴 叡永	缶詰の歴史と栄養
22	日野 真優	東京から世界へ未来へ
23	廣田 優果	現代における子ども食堂の実態
24	付 澤南	私たちが迎える 5G の時代
25	藤本 遥風	食文化とアジアの国々の観光産業の発展
26	堀田 百花	ハッピーファストフード？
27	牧野 芳美	食文化から垣間見られる日韓関係の行方
28	和佐野 萌香	日本の食文化の移り変わりこれから
29	李 思洋	中国料理の多様性と文化性

成果と課題

- ▶ スケジュールを明確にしていたため、計画的に取り組んでいた。
- ▶ 調査方法がインターネットに頼った論文が多かったが、中にはアンケート調査を実施したり、専門家に取材に行ったりする生徒もいた。しかし多角的な視点での分析や考察が足りない。
- ▶ 探究科の取り組みが良好であったことが影響し、問題意識を持ってテーマの設定をした生徒が多かった。また、自分の進路を意識しテーマ設定を行ったため、各自のテーマが持つ課題や問題点への関心が高い生徒が多かった。
- ▶ 論文の評価はルーブリックで行った。観点は「テーマ設定・理解」「課題と解決法の明確化」「構成」「図や表の引用」「分析考察」「今後の課題」「独創性」の7項目で評価した。(ルーブリックに関しては p. 90 の探究科「論文制作」ルーブリック評価表を参照)
- ▶ 探究活動や論文の内容を学習の成果としてアピールし、推薦入試や A0 入試で合格した生徒が多くいた。また、その大学進学後の研究活動にしたいと考える生徒も多い。

<5> TFT キャンペーン「おにぎりアクション 2019」協力

平成 28 年度に講演をいただいた TFT (Table for Two) が行っている標記のキャンペーンに関して、SGH の取り組みの一環として今年も学校を挙げて参加した。今年度は、撮影に関する告知案内の改善と撮影日を増やしたことに加え、学校の公式 Facebook アカウントから掲載する等の改善を図った。結果、参加生徒や寄付食数の増加だけでなく、本校 Facebook アカウントを

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

通じて参加に加わる方々もおおり、SNS を介した情報発信としても社会貢献に繋がる取り組みとなった。

「おにぎりアクション 2019」とは

TFT が「世界食料デー」に際し行うキャンペーン。おにぎりの写真、またはおにぎりを食べている写真を投稿すると、スポンサー企業等の協力でその写真 1 投稿につきアフリカ・アジアの給食 5 食分相当が寄付される。

具体的な実施状況

実施日：10 月 23 日・10 月 30 日・11 月 6 日・11 月 13 日・11 月 20 日の 5 日間

実施方法：昼休みの時間を活用し、撮影を実施。撮影後に本校 Facebook アカウントより「#OnigiriAction」と共に掲載。

参加者数：のべ 277 名

評価

本校 Facebook を通じて、35 件の投稿で給食 175 食に相当の寄付ができた。先述のとおり、実施回数を増やし、また生徒個人での参加を呼びかけたり発信媒体を本校関係者が目にしやすい Facebook に変えたりしたことで、本校の活動を通じた参加者を増やすことができ、SNS を活用した社会貢献活動への参加の促進に繋がった。様々な社会貢献のかたちがある中で、このように中高生も気軽にできる社会貢献に参加することで、今後より自発的に社会貢献活動に取り組む生徒を増やしていきたい。

<6> 「全国高校生フォーラム」及び「探究甲子園」への参加

1. 「2019 年度全国高校生フォーラム」への参加

[概要] SGH 事業の取組と成果をポスターセッション形式により発表、及び生徒交流会への参加

[日程] 12 月 22 日(日)

[場所] 東京国際フォーラム

[参加者] SG クラス 2 年 3 名、アジア高校生架け橋プロジェクト留学生代表 2 名、
引率教員 2 名

実践詳細

全国の SGH 及び WWL 校の生徒がそれぞれの探究についてポスターセッションを行う、「全国高校生フォーラム」に参加。100 を超える学校と、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生が集まった。

午前中は様々な分野に分かれて討論する生徒交流会が開かれた。本校生は「自然環境と生活」についてディスカッションを行った。他校の生徒や留学生たちと活発に意見交換をし、グループ代表として本校 SG クラス 2 年市山まみが英語でプレゼンテーションを行った。

午後はポスターセッションがあり、本校のポスターテーマは「We want to drink tap water while traveling abroad」。SG クラスがフィールドワークで訪れたマレーシアと日本との水道システムの違いを調査し、海外で水道水を飲めるようにする方法について考察したことを発表した。4 分間の発表、その後の 4 分間の質疑応答もすべて英語であったが、臆することなく堂々とやりとりができた。



2. 「探究甲子園」ポスターセッションへの参加

[概要] 探究科の取組と成果をポスターセッション形式により発表

[日程] 3月21日(土)

[場所] 関西学院大学

[参加者] SGクラス2年4名

実践詳細

「探究甲子園」とは、WVL 及び SGH 各校の課題研究の発表の場であり、毎年3月頃に関西学院大学で行われている。発表部門は3つ ①探究成果プレゼンテーション部門 ②探究成果ポスタープレゼンテーション部門 ③ラウンドテーブル型ディスカッション部門に分かれている。本校は②探究成果ポスタープレゼンテーション部門の予選を通過した。ポスターテーマを「QRコードでハラルフードをわかりやすく！～日本食を安心して食べてもらいたい～」として出場予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、本選は中止となった。

<7> 教科横断型のアクティブ・ラーニング

p.44「2-(2)-a 各教科でのアクティブ・ラーニングの実施」を参照。

<8> ルーブリックの作成と改良

今年度は、昨年度までに作成したルーブリックを学習の内容や目的等に合わせて調整を行い、さらなるブラッシュアップを図った。特に1年次に実施しているグローバル・キャンパスにおいては、昨年度の反省をもとに、ルーブリックの項目数を必要最小限に絞る形で大幅に改定してい

III 実施報告書－研究課題③

る。ここでは、使用したルーブリックと測定結果を提示し、その結果やルーブリックの有用性に関する若干の考察を述べる。

A 探究科 第1クール「食と社会文化」ルーブリック評価表

■ 探究科「食と社会文化」ルーブリック評価表

評価対象となる設定	評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)	得点
授業 (講演含む)	理解	ほぼ全ての講義内容を十分に理解した。	講義内容の大部分は理解したが、不明な箇所がわずかにある。	講義内容の大半を理解できなかった	4.3
	態度	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	集中力が散漫であり、真剣であると判断できない。	4.5
	意欲	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなどの、意思表示が不十分である。	意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.4
	協働	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、単独で行っている。	4.7
プレゼンテーション	構成	情報が論理的かつ興味を引く順序で提示されている。聴く側の理解も十分。	論理的に組み立てられており理解しやすいが、少し退屈で工夫が必要。	論理的に組み立てられた構成になっておらず、聴く側も理解が困難。	3.9
	図表	図表の引用が非常に効果的で理解を促進する。	図表の引用が少ないか多すぎるものの、内容との関連は十分にある。	図表が少ないか多すぎで、内容との関連が薄いものがある。	3.8
	話し方	明瞭で正確、かつ的確な話し方。声量は大きく、容易に理解できる速さ。	明瞭さ、発音や用語のミス、声の大きさ、速度のどれかにわずかな問題。	話し方が不明瞭。発音や用語の間違が多い、声が小さい、速すぎる。	4.0
	アイコンタクト	常に聴衆を見て話し、原稿は見ても最小限にとどめている。	ほぼ聴衆を見ながら話すことが多いが、原稿を見ることが多い。	ほとんど聴衆に顔を向けないか、原稿を読んでいる。	3.5

「食と社会文化」に関しては、「授業(講演含む)」についての生徒自身の自己評価は全体的に高い。体験型の授業では意欲が湧きやすく、積極的に取り組む生徒が多かった。しかし、「プレゼンテーション」においての「図表」は3.8、アイコンタクトが3.5と自己評価の数値が低い。KP法の使用目的や効果に関する理解はできていたが、肝心の内容の深さが感じられず、自信を持って発表できなかった生徒が多かったからであろう。

B 探究科 第2クール「食と環境」ルーブリック評価表

■ 探究科「食と環境」ルーブリック評価表

評価対象となる設定	評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)	得点
授業 (自己評価)	理解	ほぼ全ての講義内容を十分に理解した。	講義内容の大部分は理解したが、不明な箇所がわずかにある。	講義内容の大半を理解できなかった。	4.6

	態度	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	集中力が散漫であり、真剣であると判断できない。	4.3
	意欲	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなど、意思表示が不十分である。	意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.3
	協働	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、単独で行っている。	4.7
授業 (第1回)	食と土壌の関連性の理解	適切な表現で食と土壌の関連性をきちんと文章化できる。	食と土壌の関連性を文章化できるが、不十分な点が見られる。	食と土壌の関連性を文章化できないが、書いていても視点がズレている。	3.9
	食糧とエネルギーの浪費の理解	食糧とエネルギーいづれについてもそれらの浪費について例示できる。	食糧とエネルギーのいづれかについて、その浪費について例示できる。	食糧とエネルギーいづれについてもそれらの浪費について例示できない。	4.7
	食糧に関するエネルギー指標の知識	食糧・食品にかかるエネルギー指標を2つあげることができる。	食糧・食品にかかるエネルギー指標を1つだけあげることができる。	食糧・食品にかかるエネルギー指標を全くあげることができない。	4.1
授業 (第2回)	堆肥の生成過程と食物連鎖の理解	堆肥の生成過程について食物連鎖の例を正しい順序で示して説明できる。	堆肥の生成過程を食物連鎖の例で説明しているが、誤りを含んでいる。	堆肥の生成過程を食物連鎖の例をあげて正しく説明することができない。	3.1
	堆肥の長所の理解	堆肥の長所を3つ以上あげることができる。	堆肥の長所を2つまたは1つあげることができる。	堆肥の長所をあげることができない。	4.9
	化学肥料と有機肥料の違いの理解	肥料の違いを例を挙げて説明できる。	肥料の違いのみ説明できる。	肥料の違いを正しく説明できない。	3.5
授業 (第3回)	堆肥化の目的の理解	堆肥化の目的について、正しい視点で説明する文章を作成できる。	堆肥化目的を項目であげることはできるが、文になっていないかわずかに視点がずれている。	堆肥化の目的について、文章化できない、または大きく視点がずれている。	2.5
	堆肥化手順の理解	堆肥化の手順を正しく示すことができる。		堆肥化の手順を示すことができない。	1.8
	堆肥化データの重要性	堆肥化の計測で最も重要な事項を正しく指摘できる。		堆肥化の計測で最も重要な事項を正しく指摘できない。	4.2
授業 (第4回)	主題の理解	主題を理解し、適切な語句を用いて簡潔な文を書いている。	主題を理解しているが部分的に不適切な語句を用いているか、文が不完全である。	主題の理解が不十分であると考えられるか、全く文が書けていない。	4.2
	要旨記述の文章量	主題の説明に十分な文章量(80字以上)がある。	主題の説明には不十分な文章量(30~80字未満)である。	文章量が少なすぎ(30字未満)で主題を説明できていない。	3.9
	質問や疑問の提示	講話内容の疑問点を2つ以上の文であげることができる。	講話内容の疑問点を1つの文でしかあげていないか、2つ以上あげても文になっていない。	講話内容の疑問点をあげていない、またはどれも不適切な表現である。	3.6
コンポスト製作	礼儀・安全	整然と作業を進め周囲への気配りを怠らない。安全に配慮し、清掃した。	概ね整然と作業を進め周囲や安全面の配慮、清掃にはやや難あり。	雑然と作業を進め周囲への配慮に欠ける。安全へ配慮せず。清掃しない。	5.0
	協働	積極的に班員と協力して製作を行った。分担した任務を完璧にこなした。	班員との協力や分担した任務の遂行が不十分である。	班員との協力が見られなかったか、分担した任務をあまりやれなかった。	5.0
コンポスティング	計画性	事前に適切な計画を立てて実行に移した。	事前に計画を立てているが、内容が適切でない部分が見られる。	事前に計画が立てられておらず、始まってから適宜決めている。	4.6

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

	記録・正確性	データの記録を毎回もれなく正確に行った。	データの記録が一部欠けているか、記入の雑な箇所が見られる。	データの記録が不正確であるか、記入が雑である。	2.8
	公共心・安全	周囲の環境や安全に十分配慮して作業を行った。	周囲の環境や安全への配慮がわずかに足りないことがあった。	周囲の環境や安全をほとんど意識せず作業を行った。	5.0
	協働	積極的に班員と協力して作業を行った。分担した任務を完璧にこなした。	班員との協力や分担した任務の遂行が不十分である。	班員との協力が見られなかったか、分担した任務をあまりやれなかった。	4.0
プレゼンテーション	テーマと構成	情報が論理的かつ興味を引く順序で提示でき、聴く側の理解も十分可能。	論理的に組み立てられ理解しやすいが、少し単調・退屈で工夫が必要。	論理的に組み立てられた構成になっておらず、聴く側も理解が困難。	3.4
	図表	図表の引用が非常に効果的で理解を促進する。	図表の引用が少ないか多すぎるものの、内容との関連は十分にある。	図表が少ないか多すぎで、内容との関連が薄いものがある。	3.5
	ICT利用	適切にICTを使い、操作も話しと連動し違和感がない。	適切にICTを使えるが、若干話しとのタイミングが合わないことがある。	ICTの操作トラブルが多いか、話しとのタイミングが合っていない。	3.6
	英語	綴りや文法上の誤りが全く見られない。	綴りや文法上の誤りが1箇所以上見られる。	英訳されていないか、綴りや文法上の誤りが3箇所以上見られる。	
	話し方	明瞭で正確、かつ的確な話し方。声量は大きく、容易に理解できる速さ。	明瞭さ、発音や用語のミス、声の大きさ、速度のどれかにわずかな問題。	話し方が不明瞭。発音や用語の間違が多い、声が小さい、速すぎる。	3.3
	アイコンタクト	常に聴衆を見て話し、原稿は見ても最小限にとどめている。	ほぼ聴衆を見ながら話すことが多いが、原稿を見ることが多い。	ほとんど聴衆に顔を向けないか、原稿を読んでいる。	2.6

今年度は大幅に実施予定が変更になったため、授業進度に合わせて評価項目を新規に3項目、修正を4項目で行い、実施・測定した。

自己評価の点数は、昨年度の数値に比べ「理解」の項目で0.4ポイント、「意欲」の項目で0.3ポイント上昇しており良好な結果が得られた。その他の項目で目立った点を以下に挙げる。

1. 第3回授業での「堆肥化手順の理解」「堆肥化データの重要性」の点数が低い

毎年この項目の値が低いことを問題に挙げているが、残念ながら今年度も同様の結果となった。特に今回は「堆肥化データの重要性」の項目で昨年と比べ1.6ポイントも低下しており、授業の中では十分な理解が得られなかった。この対処として、次回の授業で復習の時間を設け、ホームページに解答・説明を掲載する等を試みた。次年度以降は、さらに時間をかけて、理解を確認しながら授業を展開していく必要がある。

2. コンポスティングの「記録・正確性」の点数が低い

ここも毎年、数値が低めに出る項目である。今回は、多くのグループでルールに基づいた記録の記入をしていないことが目立った。例えば、記録者の記入が個人名なのかグループ名なのか日ごとによって変わっていたり、生ゴミの処理量が正確に積算されていなかったりした。他の評価項目が例年より良いだけに悔やまれる結果となった。

3. プレゼンテーションの「アイコンタクト」の点数が低い

ここも毎年、数値が低い項目の一つであるが、今年度も大きな変化は見られなかった。発表までの十分な時間が取れなかったことが原因の一つであるが、このような発表を繰り返して

いくことにより効率的で要領の良い発表方法を身につけていくと思われる。今後に期待したい。

C 探究科 第3クール「食と栄養」ルーブリック評価表

■ 探究科「食と栄養」ルーブリック評価表

評価対象となる設定	評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)	得点
文化祭 (自己評価)	理解	ほぼ全ての内容を十分に理解した。	内容の大部分は理解したが、不明な箇所がわずかにある。	内容の大半を理解できなかった。	4.3
	態度	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	集中力が散漫であり、真剣であると判断できない。	4.7
	意欲	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなど、意思表示が不十分である。	意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.8
	協働	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、単独で行っている。	4.3
修学旅行 事前学習 (自己評価)	理解	事前にマレーシアやシンガポールについて十分に理解した。	事前学習はしたが、十分な理解ではない。	事前にはほとんど理解できなかった。	4.3
	態度(特に留学生の話)	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	いまいち集中できず、理解もできなかった。	4.8
	意欲(特に探究活動)	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなど不十分なところがあった。	事前にテーマを考えられず意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.6
	協働(特にSIGS発表)	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、ついていけなかった。	4.8
修学旅行 (自己評価)	理解	マレーシアやシンガポールについて十分に理解した。	学ぼうと努力したが、十分な理解ではない。	ほとんど理解できなかった。	4.6
	意欲(特に探究活動)	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問できず考えるに不十分なところがあった。	テーマにそって考えられず意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.8
	協働・集団行動	積極的に協力していい集団作りに努めた。	積極的ではなかったが決められたことを守ることで集団に寄与した。	ただついていけただけで、集団を意識できなかった。	4.8
修学旅行 事後学習 (自己評価)	理解	マレーシアやシンガポールについて十分に理解したと思う。	帰ってきて追加で調べなどして、理解を深めることができた。	日本と何が違うのかほとんど理解できなかった。	4.8
	探究レポート作成	テーマを明確にし、内容もネットや本・聞き込みと多様になる工夫をした。	テーマは明確だが、ネット知識だけ、または聞き込みだけと偏った。	テーマが不明瞭なままで、自分でも何を書いているのか分からなくなった。	4.4
	分析考察	結果に基づいた正確な分析や考察が記され、目的・目標を達成している。	分析や考察が記されているが、不十分な点が見られる。	正確かつ適切な分析や考察がなされていない。	4.6

III 実施報告書－研究課題③

今後の課題	分析や考察の結果を踏まえて、今後の課題について明確な提案がある。	今後の課題について提案があるが内容が明確でないなど不十分である。	分析や考察の結果を踏まえた今後の課題についての提案がない。	4.8
-------	----------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	-----

本年度は「食と栄養」のテーマの中に文化祭での企業コラボをおいた。地産地消を目的とした地域復興支援と位置づけ、福岡朝倉の農産物の良さを多くの人知ってもらおう企画を考えた。JA筑前あさくらと地場企業「トドケル株式会社」の協力のもと栄養価の高い朝倉の肉・野菜を使ったやきそばや、オリジナルの小松菜バナナマフィン等オリジナリティに溢れるレシピを多くの人に提供できた。また、取り組む過程で農家の苦労や販促の難しさ等多くの問題点に触れることができ、実体験から多くのことを学ぶことができた。自己評価から見ても意欲的に取り組むことができていた。

修学旅行ではハラル料理に着目し、現地の食材だけで日本料理（肉じゃが・きんぴらごぼう）を提供するという企画を考えた。事前研修ではおおよそ高い数値であった。意欲的に取り組めたのであろう。マレーシア、シンガポールについて個々人の調べ学習等が若干少なかったと感じる。修学旅行中の評価はすべて高かった。積極的かつ意欲的に、協力して物事に臨めた。事後学習として、今回のフィールドワークでの学びと課題解決方法をスライドにしグループで発表した。おおむね評価は高い。テーマ意識をもって臨み、課題を見つけ、リサーチまでは十分にできたようだが、やはり「今後どうしていけば課題が解決するか」といった今後の展望まで考えるのに、非常に苦労したようである。今後も「課題解決」の思考力養成を心掛けたい。

D 探究科 第4クール「食と経済」ルーブリック評価表

■ 探究科「食と経済」ルーブリック評価表

評価対象となる設定	評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)	得点
授業 (自己評価)	理解	ほぼ全ての講義内容を十分に理解した。	講義内容の大部分は理解したが、不明な箇所がわずかにある。	講義内容の大半を理解できなかった。	4.7
	態度	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	集中力が散漫であり、真剣であると判断できない。	4.6
	意欲	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなどの、意思表示が不十分である。	意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	4.6
	協働	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、単独で行っている。	4.8
企画書作成 (商品開発)	テーマの設定・理解	何を明らかにすべきかを理解した上で適切なテーマを設定している。	テーマを設定しているが、テーマの表現があまり適切でない。	テーマを設定していないか、設定していても方向性にズレがある。	4.7
	コンセプト	具体的で実現可能な提供する価値のあるものになっている。	具体的ではあるが、実現可能かどうかはよくわからない。	抽象的で実現可能かどうかよくわからない。	4.3
	オリジナリティ	企画に創意工夫が見られる。	色々な資料より集めたような企画内容になっている。	企画に工夫がなく、平凡な内容である。	4.5

アクションプラン	ターゲットが明確であり、どのように世に広めていくか考察されている。	ターゲットは明確であるが、今後の行動計画は示されていない。	誰に対して何を広めていきたいのか明確ではない。	4.3
栄養バランス	栄養面まで考察した企画書が作成できた。	味には拘りがあるが、栄養面までは考えられていない。	特に工夫もなく、平凡な内容である。	4.6
分析・考察	結果に基づいた正確な分析や考察が記され、目的・目標を達成している。	分析や考察が記されているが、不十分な点が見られる。	正確かつ適切な分析や考察がなされていない。	4.1
協働	積極的に参加し、意見を述べ、他メンバーとの議論から新たな考えを創造できる。	積極的に参加し、意見を述べるが、一方的な面がある。	消極的であり、議論に参加しようとしめない。	4.7

文化祭でお世話になった「トドケル株式会社」大島氏の提案により、例年の流れとは異なり「商品開発」を取り組むことになった。テーマが「アイスクリーム」ということもあり、生徒たちのモチベーションは非常に高かった。アンケート結果からも意欲の高さが伺える。実際に商品開発の案として採用されたのは「子ども向けアイス」であったが、「高齢者向けアイス」「外国人向けアイス」「ペット向けアイス」等バリエーション豊かな案が出て、それぞれ1ヶ月半に渡りグループを決め、探究を重ねプレゼンテーションを行った。協力会社である「シゼンアイスワークス」古田氏からも絶賛頂いた。期間的に開発時間が足りないため、次年度へ持ち越しとなった。

E 探究科「論文制作」ルーブリック評価表

■ 探究科「論文制作」ルーブリック評価表

評価対象となる設定	評価項目	非常に良い(5)	さらに上を目指せ(3)	改善を要する(1)	得点
課題論文	テーマの設定理解	何を明らかにすべきかを理解した上で適切なテーマを設定している。	テーマを設定しているが、テーマの表現があまり適切でない。	テーマを設定していないか、設定していても方向性にズレがある。	3.9
	課題と解決法の明確化	課題と解決法を明確に記している。	課題と解決法は記されているが、明確でないかテーマから若干のずれが見られる。	課題と解決法が記されていない。	3.7
	構成	論文作成の形式に従い適切な順序で書かれている。	論文作成の形式に従っているが、内容の不一致が見られる。	論文作成の形式に従っていない書き方をしている。	3.3
	図表の引用	適切な箇所に図表を引用して論を展開・説明している。	引用した図表の一部に不備があるか、引用箇所がやや不適切である。	図表を全く用いていないか、引用した図表自体が適切でない。	3.4
	分析考察	結果に基づく正確な分析・考察が記され目的・目標を達成している。	分析や考察が記されているが、不十分な点が見られる。	正確かつ適切な分析や考察がなされていない。	3.1
	今後の課題	分析や考察の結果を踏まえ今後の課題について明確な提案がある。	今後の課題について提案があるが内容が明確でないなど不十分。	分析や考察の結果を踏まえた今後の課題についての提案がない。	2.9
	独創性	客観的事実や考えを引用しながらも、固有の論を大半にわたって展開している。	客観的事実や考えの引用が大半であり、固有の論はかなり少ない。	ほとんどが他からの引用またはそれらをまとめたものに過ぎず、オリジナリティが見られない。	3.0

III 実施報告書－研究課題③

このルーブリックは、SG クラス 3 年全員が作成した論文を評価するために用いた。昨年度使用した「レファレンス」の項目は、今年度の論文作成における必須事項としたので割愛した。また、この論文を 2 年間に及ぶ探究科学学習の集大成として位置づけた生徒が多く、論文作成の意義をしっかりと理解できていた。そのため「テーマ設定・理解」の評価項目が高くなっていた。しかし昨年度からの懸案事項であった「独創性」の項目を新たに設け評価したが、低い数値になった。情報収集の方法や論文作成の初期段階からの指導が必要である。

F 「グローバル・キャンパス」ルーブリック評価表

■ 「グローバル・キャンパス」ルーブリック評価表

大項目	小項目	非常に良い (5)	さらに上を目指せ (3)	改善を要する (1)
コミュニケーション	意欲・態度・積極性	何事にも積極的にコミュニケーションをとり、活動の参加に意欲的である。	大体において活動には積極的かつ意欲的である。	大部分の場面で活動の参加に消極的ところが見られる。
	多様性受容	他者の意見をよく聴き、素直に受け入れようとする態度が見られる。		他者の意見を聴き入れることなく、自分の意思を通すか、何もしない。
協働	グループへの貢献	積極的な話し合いへの参加、役割を十分にこなし、協力的姿勢が見られる。	大体において話し合いの参加または役割をこなすことができる。	話し合いの参加に消極的か、役割を十分にこなすことができない。
	時間の厳守	5 分前行動が常にできている。	ほぼ毎回時間通りに行動し、遅れることはない。	遅れて集合したり、遅れて行動することがある。
言語(英語)運用	聞くこと (理解)	話をよく聴き、適切に質問したりして十分に理解することができる。	話を聴き理解することが大体はできるが、十分ではない。	話を聴いたり、内容を理解することができない。
	話すこと (発表含む)	情報や意見を話すことによって十分に相手に伝えることができる。	話して伝えることが十分でないが大体はできる、または時間がかかる。	情報や意見を相手に伝えることができない。
	書くこと	情報や意見を正確な文や単語で書き表すことができる。	一部に書き切れなかったり、誤りは見られるが、概ね書き表すことができる。	情報や意見を正確な文や単語で大部分を書き表すことができない。
課題への取り組み	課題の発見・提示	解決すべき課題を見出し、適切に提示することができる。		課題を見出したり、適切に提示することができない。
	解決への取り組み姿勢	課題に対する解決策を自らの問題として積極的に考えることができる。		解決策への取り組みが消極的であったり、そこまで考えが及んでいない。
プレゼンテーション	テーマと 構成	情報が論理的かつ興味を引く順序で提示でき、聴く側の理解も十分可能。	論理的に組み立てられ理解しやすいが、少し単調・退屈で工夫が必要。	論理的に組み立てられた構成になっておらず、聴く側も理解が困難。
	図表	図表の引用が非常に効果的で理解を促進する。	図表の引用が少ないか多すぎるものの、内容との関連は十分にある。	図表が少ないか多すぎて、内容との関連が薄いものがある。
	話し方	明瞭で正確、かつ的確な話し方。声量は大きく、容易に理解できる速さ。	明瞭さ、発音や用語のミス、声の大きさ、速度のどれかにわずかな問題。	話し方が不明瞭。発音や用語の間違が多い、声が小さい、速すぎる。
	アイコンタクト	常に聴衆を見て話し、原稿は見ても最小限にとどめている。	ほぼ聴衆を見ながら話すことが多いが、原稿を見ることが多い。	ほとんど聴衆に顔を向けないか、原稿を読んでいる。
課題発見と解決策の提示	課題発見	現状を把握し、解決すべき課題を見出し優先順位をつけることができる。	現状を把握し、解決すべき課題を見出せるが、どれを優先すべきか不明。	現状の把握ができていないか、課題を見出すことができない。
	解決策の提示	実行可能で具体的な解決策を提示できる。	実行できる可能性が薄い、または具体的でない解決策の提示である。	解決策を簡潔な分かりやすい文で提示できない。

■ グローバル・キャンパス 評価(生徒)の推移(項目別)

大項目	小項目		1日目	2日目
コミュニケーション	1	意欲・態度・積極性	3.47	4.47
	2	多様性受容	4.71	4.86
協働	3	グループへの貢献	3.65	4.29
	4	時間の厳守	3.85	4.25
言語(英語)運用	5	聞くこと(理解)	3.21	3.89
	6	話すこと(発表含む)	3.08	3.75
	7	書くこと	3.20	3.69
課題への取り組み	8	課題の発見・提示	3.75	4.46
	9	解決への取り組み姿勢	3.96	4.70
プレゼンテーション	10	テーマと構成	3.40	4.15
	11	図表	3.22	4.10
	12	話し方	3.26	3.94
	13	アイコンタクト	3.42	4.09
課題発見と解決策提示	14	課題発見	3.46	4.25
	15	解決策の提示	3.36	4.33
平均			3.53	4.24

■ グローバル・キャンパス 評価(グローバル・リーダー)の推移(項目別)

大項目	小項目		1日目	2日目
コミュニケーション	1	意欲・態度・積極性	3.96	4.64
	2	多様性受容	4.86	4.90
協働	3	グループへの貢献	4.26	4.64
	4	時間の厳守	4.56	4.54
言語(英語)運用	5	聞くこと(理解)	3.64	4.18
	6	話すこと(発表含む)	3.40	4.22
	7	書くこと	3.66	4.28
課題への取り組み	8	課題の発見・提示	4.05	4.48
	9	解決への取り組み姿勢	4.06	4.38
プレゼンテーション	10	テーマと構成	3.84	4.41
	11	図表	3.51	3.97
	12	話し方	3.70	4.59
	13	アイコンタクト	4.05	4.35
平均			3.96	4.43

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

このルーブリックはグローバル・キャンパスの各活動を評価するためのものである。今年度は評価項目を15項目に、評価段階を3段階に変更した。また、同様のルーブリックを用いてグローバル・リーダーによる生徒の評価も行った。生徒自身による自己評価もグローバル・リーダーによる他者評価もクラス間の差は若干あるものの、どのクラスも多くの項目において2日目のポイントが上昇している。

具体的な評価項目を事前に示すことによって、グローバル・キャンパスの達成目標がより明確になり、効果的な活動につながったと考えられる。今後は評価項目と活動内容の整合性を検証し、活動内容の見直しや改善に活用する。

3-(2)-b 進路選択講演会・懇談会

目的

SGクラスには将来グローバルに活躍することを目標にする生徒が多く、卒業後の進路選択の参考のため、進路講演会を実施した。実際に国際的な場で活躍する社会人や現役の大学院生の講話を聴講することで、国際社会で貢献できる人材を目指し、幅広い視野で進路選択を行うことを目的とする。

実践した取り組み

- 〈1〉卒業生による進路講演会
- 〈2〉現役大学院生による進路講演会

実践の詳細

- 〈1〉卒業生による進路講演会

[日程] 8月19日(水)

[場所] 講義室H

[参加者] 中学・高校生徒希望者39名

[講師] 森田 紗代子 氏 ケニア豊田通商

[テーマ] 「アフリカに住んで」

[内容]

- ① 本校卒業後、ケニアへ移住するまで
- ② ケニアでの生活～インフラの未整備、治安の悪さ、現地での常識、貧富の差
- ③ ケニアの良いところ～人間性、大自然、新しいものを採り入れる活力、女性が働きやすい環境、多様性
- ④ 皆さんへのメッセージ
- ⑤ 質疑応答

[感想文から読み取れる生徒の変化]

「ケニア＝アフリカ＝貧しい国」という多くの生徒たちが持っている先入観を良い意味で崩す内容に多くふれていただいたために、ケニアに対しての正しい認識ができるようになったようである。日本と違い不自由な面も多いが、文化や精神、人間性等日本人も多くを学ばねばならない要素が多くあることにも気づくことができた。また、海外に出る前に日本のことを良く知る必要があること。海外に出ることは言葉の壁も高いが、外国語（英語）を学ぶことを目的とするのではなく、それを使えるようになったら何ができるかを考えて学ぶようにすると、学習のモチベーションアップにもつながるというアドバイスが強く印象に残ったという感想を述べる生徒が多くいた。このことにより、日本史や言語習得への学習観も変化したと考えられる。

<2> 現役の大学院生による進路講演会

[日程] 3月6日(金)

[場所] 視聴覚室

[参加者] 中学・高校生徒希望者 60名

[講師] 石川 太陽 氏 広島大学大学院国際協力研究科

※ 実施予定であったが新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった。

3-(2)-c 職員研修の実施

目的

生徒の課題解決能力の育成を図るには、まず生徒が主体となる授業へ転換すべく、教師自らが教え込み等の講義型の授業から脱却することが必要である。この研修が、生徒が学びの主人公であることを再認識した上で、生徒が主体となる学校づくりや授業づくりを学校全体で進めていくことを考え、実践していくための契機とする。

実践した取り組み

<1> 職員研修の実施

実践の詳細

<1> 職員研修の実施

[日程] 7月22日(月)

[場所] 視聴覚室

[参加者] 本校教職員

[講師] 筒井 洋一 氏 元京都精華大学教授

[テーマ] 「生徒が学びの主人公」という学校を創る

[内容]

1. なぜ「生徒が学びの主人公」という学校を創る必要があるのか？【Why】
2. それを実現するためにどのようなことが必要か？【How】
3. 具体的な手段として何があるか？【What】
4. チームとしてすぐに取り組める具体的な方法とは？【実践のアイデア】

[研修後の取り組み]

1. 研修で出された意見・アイデアの共有、実践の奨励
2. 実践へ向けての取り組みを自己評価するための指標（ルーブリック）の策定と測定

3－(3) 評価

検証評価方法

- 1) 探究科及び教科横断型の授業を実施していくにあたり、ルーブリックの手法を用いることで、生徒自らが自己評価を通じて学びの意義や進捗等を把握できるようにするのみならず、教員自身も新たな指導方法や評価方法へ対応できるようにしていく。

構想調書に基づく評価

アクティブ・ラーニング型授業の導入と ICT の活用

アクティブ・ラーニング型授業（主体的で、対話的な、深い学びを促す授業）については、SGH 事業の開始以前から全校あげての取り組みとしてほぼ定着しており、p. 56「現状と研究課題② 2－(3) 評価」の項で指導指標の結果について触れた通り、項目によってはほぼ全ての教員が実施している。また、本校の整備されたネット環境と ICT を生かし、生徒の課題発見能力の獲得を容易にする条件が揃っている。今後は、昨年度より進めている「深い学びを促す」授業実践をさらに増やす。さらに今年度特に重点的に進めてきた「生徒が学びの主体となる」授業の実践について、授業だけではなく課外活動や生活指導においても意識して積極的に行っていくことと、その進捗状況の評価が重要であると考えている。

ルーブリックについて「第1クール～第4クール」

探究科の授業ごとに生徒へ4項目で振り返りをさせた結果の平均値をあとの表に示す。どのクールにおいても4ポイントを超えており、生徒たちの探究活動での理解・態度・意欲・協働に関してはほぼ十分にできていると考えているようである。指導者のルーブリックは、授業内容やスケジュールの違いによって適宜変更してきたが、生徒の自己評価のルーブリックは変更せず使用した。このルーブリックは、生徒の自己改善を継続して進めていくための効果的、かつ汎用性のある指標であると考えている。

■ 探究科ルーブリック 共通項目（生徒自己評価）の結果【平均得点】

評価項目	非常に良い (得点5)	さらに上を目指せ (得点3)	改善を要する (得点1)	クール	1	2	3	4
				分野	A 食と 社会文化	B 食と 環境	C 食と 経済	D 食と 栄養
				評価 対象	授業 講話	授業 実習 講話	文化祭	授業 講話
理解	ほぼ全ての講義内容を十分に理解した。	講義内容の大部分は理解したが、不明な箇所がわずかにある。	講義内容の大半を理解できなかった。	理解	4.3	4.6	4.7	4.3
態度	常に高い集中力で、真剣に取り組むことができた。	集中力がほとんど途切れず、真剣に取り組むことができた。	集中力が散漫であり、真剣であると判断できない。	態度	4.5	4.3	4.6	4.7
意欲	常に意欲的に取り組み、積極的に質問したり、理解しようと試みた。	意欲はあるが、積極的に質問するなど、意思表示が不十分である。	意欲的な取り組みがほとんどできなかった。	意欲	4.4	4.3	4.6	4.8
協働	積極的に協力して課題をこなしたり質問や意見を十分に交換できた。	時折、友人とのコミュニケーションは見られるが、積極的ではない。	友人とのアクションはほとんどなく、単独で行っている。	協働	4.7	4.7	4.8	4.3

実践内容の評価

今年度は、課題解決力の測定をより明確にするために、1年次のグローバル・キャンパスで用いる生徒用ルーブリックの指標項目・評価基準の精選に加え、指導者用のルーブリックを作成して試用した。また、生徒の課題解決力を育むための教師の姿勢として大切となる「学習者が主体となる授業・学校づくり」のワークショップを夏期職員研修で実施した。さらに、これまでと同様に次回の食のサミットへ向けて、テーマとなる「食の安全性」について、全校生徒が問題を見出して解決策を提案するといった取り組みを継続して行ってきた。あとの表に「課題解決力」に関する生徒意識調査の結果を示しているが、一部を除くほとんどの項目及び両学年において、昨年度に比べて今年度の値が上昇しており、順調に課題解決力が身につけてきていると生徒たちは実感しているようである。3年SGクラス生徒が作成した論文についての論文制作ルーブリック評価表 p. 90 によると、「課題と解決法の明確化」が3.7ポイントあり、他の項目と比べて良好な結果と言えることから、課題解決力は着実に身につけてきていると判断できる。

Ⅲ 実施報告書－研究課題③

■ SGH 事業効果検証 生徒意識調査 2・3年 SG クラス年度比較(抜粋)

質問 No.	自ら課題を設定し他者と協働して解決する力(課題解決力)	学年	今年度		昨年度	
			肯定	否定	肯定	否定
14	困難に直面したときにその原因をつきとめ、解決策を立てることができる	2年 SG	83.3%	16.7%	83.4%	16.6%
		3年 SG	90.9%	9.1%	96.6%	3.4%
15	課題に対して他者と協働して解決することができる	2年 SG	95.9%	4.2%	94.4%	5.6%
		3年 SG	95.4%	4.6%	93.4%	6.6%
16	狙いや目的を意識した上で学習に主体的に取り組むことができる	2年 SG	100.0%	0.0%	72.2%	27.8%
		3年 SG	100.0%	0.0%	90.0%	10.0%
17	自分の興味関心があることについて調べ、深めることができる	2年 SG	100.0%	0.0%	90.0%	88.9%
		3年 SG	100.0%	0.0%	90.0%	10.0%

4 現状と研究課題④ 高大接続及び新たな入試制度への対応

国公立大学への進学率が上昇している一方で、併設校として中村学園大学の特色のある栄養科学部・流通科学部・教育学部への進学も多い。しかし、知識偏重の受験学習にとどまっている。中央教育審議会の審議事項である高大接続・高大入試改革等において求められている人材育成を行うための教育課程の編成を行うべく、連携大学等との検討を進めることが必要である。

4－(1) 仮説④

仮説①～③を通じて学んだ将来のグローバル・リーダーたる人材を、高等教育へ接続させ、さらなるグローバル・リーダーとしての資質を継続的に身につけることができるよう、高大接続によって連携大学等と共同で「教員相互間の研修」や「専門分野の連携特別講座」を行うことが、更なるグローバル・リーダーの育成につながる。また、中等教育でのグローバル・リーダーとしての資質を身につけるための一連の学びが評価される新しい入試制度を設けることも更なるグローバル・リーダーの育成につながる。

4－(2) 実践

- a 教育課程の変更
- b 新しい併設大学入試制度
- c 海外提携校との連携

4－(2)－a 教育課程の変更

目的

本校が考えるグローバル人材に必要な資質を養成するため2年次よりSGクラスを設け、教育課程の一部を変更する。また、選考方法に独自の「活動ポイント申請システム」を確立し選考する。選考後は、早期に次年度に向けた指導を始める。

実践した取り組み

<1> SGクラス選考

[日程] SGクラス説明会 5月13日(月)、7月5日(金)、11月1日(金)

Ⅲ 実施報告書－研究課題④

[選考]

一次選考（書類審査）

9月20日(金)	活動ポイント申請①
10月18日(金)	活動ポイント申請②
11月8日(金)	活動ポイント申請③・エントリー締切（自己アピールシート提出）
11月12日(火)	SGクラスエントリー生徒対象説明会
11月29日(金)	一次選考結果発表

二次選考

12月10日(火)～12日(木)	プレゼンテーション・英語を含む面接
12月20日(金)	二次選考結果発表

<2> SGクラス内定者への早期指導

[目的]

1. SGクラス5期生の親睦を深める
2. SGクラスの取り組みに早期着手することで4月始動前に基礎知識をつける

[参加者]

SGクラス内定生徒 29名 ※内定者30名のうち1名は留学中

[内容]

- ① SGH 報告会に向けたグループ活動
 - ② SDGs 勉強会
 - ③ 中村国際ホテル専門学校における英語特設授業
- ※ ②③は新型コロナウイルス感染症対策のため中止

<3> 探究科の実践

詳細は p.58 「3-(2)-a SGクラスの設置と教科横断型科目『探究科』の実践」を参照

実践の詳細

<1> SGクラス選考

昨年度と同様の基準で生徒が申請した書類をもとに一次選考を行った。なお、過年度クラスの担任の他、教科担当者等の意見を参考にクラス編成後の学習状況や進路決定を考慮し、一次選考にて基礎学力等に関する基準を設けた。また、選考は三段階で行い、教育開発部での審議内容を学年会で判断し、管理職を含む部長会で最終判断を行った。申請に関する詳細は以下の通り。

一次選考 80% A 基礎学力 30% B 英語力 10% C 活動ポイント 30% D 自己アピール 10%

[A 基礎学力]

定期考査・実力考査・模擬試験成績を計30点満点に換算。当該項目の数値が著しく低い場合は審議対象とし、一次選考で不通過とする判断を行った。

[B 英語力]

定期考査と模擬試験の英語の得点、英語外部検定試験の級・スコアでそれぞれ高い数値を示したものに特化して上限 10 点で換算。

[C 活動ポイント]

SG クラスに所属するにふさわしいグローバルな活動や自己啓発活動等に自主的かつ積極的に取り組んだことを評価。証明する資料を添付し自己申告する。申告された項目に対し、教育開発部で認定を行う。(上限 30 点)

[D 自己アピール]

「SG クラスを志望する理由・動機、SG クラスで学びたいこと」及び「自己アピール」の 2 項目に分けて記入させ複数の教員によって採点し、平均値で審査を行う。(上限 10 点)

二次選考 20% E 面接 10% F プレゼンテーション 10%

- ▶ 面接者 2 名 (1 名は英語科教員)、生徒 1 人あたり 20 分程度。
- ▶ 10 分程度の個人プレゼンテーションを行い、その後、提出された活動ポイントやエントリーシート、プレゼンテーションの内容に関して日本語及び英語での質疑応答。
- ▶ 一次選考と二次選考の得点を合算し、100 点満点で評価を行い、一次同様に教育開発部・学年会での選考結果を基に、部長会で最終判断を行い、合格者を決定した。

<2> SG クラス内定者への早期指導

① 学校行事 SGH 報告会に向けたグループ活動

[日程]

12 月 20 日(金)、1 月 8 日(水)、1 月 9 日(木)、1 月 10 日(金)、1 月 17 日(金)、1 月 20 日(月)、1 月 24 日(金)、1 月 25 日(土)、1 月 27 日(月)、2 月 3 日(月)、2 月 7 日(金)、2 月 10 日(月)

[内容]

次年度「食のサミット」の開催テーマである「食の安全性」に関して、アジア高校生架け橋プロジェクト留学生の出身国が抱える課題について調べ、留学生と共にその解決策について考えた。各グループで調べまとめたものを、SGH 報告会当日に発表した。

② SDGs 勉強会

[日程]

3 月 6 日(金) ※ 新型コロナウイルス感染症対策のため中止

[内容]

2015 年 9 月に国連加盟国全会一致で採択された持続可能な開発目標 (SDGs) に関する基礎知識を習得し、世界で起こっている事象への興味関心を高める素養を醸成する。そのために 2030 年までの社会の動きをシミュレーションするカードゲーム「2030 SDGs」を体験し、そこで得られた気づきについて考える。

③ 中村国際ホテル専門学校における英語特設授業

[日程]

3月24日(火) ※ 新型コロナウイルス感染症対策のため中止

[内容]

レストラン・ホテル等でのテーブルマナーについて、場面を想定したスキット実演を行う。

〈3〉 探究科の実践

知識偏重の受験学習に留まらないために、探究科を中心に教科横断型の授業を展開した。
(探究科の実践内容については p.58 「3-(2)-a SGクラスの設置と教科横断型科目『探究科』の実践」を参照)

4-(2)-b 新しい併設大学入試制度

目的

質の高いグローバル・リーダーが併設大学進学後も課題研究が継続できるように高大連携での新しい入試制度を開発する。

実践した取り組み

- 〈1〉 連携大学等と共同で「教員相互間の研修」の実施
- 〈2〉 新入試システム開発に関する協議と入試要項の策定・実施
- 〈3〉 高大連携による説明会・模擬授業の実施
- 〈4〉 SGH 事業と高大接続

実践の詳細

- 〈1〉 連携大学等と共同で「教員相互間の研修」の実施

詳細については p.46 「2-(2)-a 〈2〉 教員研修の実施・外部研修への参加」を参照。

- 〈2〉 新入試システム開発に関する協議と入試要項の策定・実施

① 併設大学と高校教員の連絡会

[日程] 5月13日(月) 17:00～

[場所] 中村学園大学

[出席者] 大学：学長、学部長、入試広報課職員等

高校：校長、教頭、進路指導部長、学年主任等

[内容]

併設高校からの進学者の状況に関する情報交換、併設校入試システムに関する協議。進路指導部長と大学入試課間で諸制度・連携行事等に関して随時協議を行った。

② 高大接続について

- i. 学部・学科の履修内容や取得できる資格等を生徒がしっかり理解する。
- ii. 当該学部・学科で学ぶ意欲や熱意、適性、目的意識を生徒・教員が確認する。
- iii. 当該学部・学科で学ぶ上で必要な基礎学力を養成する。

上記の i ～ iii に基づき、各学年では以下のことに取り組んだ。

[1 学年]

学部学科説明会、入試説明会、オープンキャンパスへ参加して、「大学」とはどのようなものを理解し、学問分野や資格等への興味・関心を持つ。

[2 学年]

模擬授業の受講や大学生による学部学科説明、交流会に参加することで、大学での学びや学生生活への具体的なイメージを持ち、目的意識へとつなげる。

[3 学年]

基礎学力養成、及び各学部学科の専門的な分野の基礎力を養成する講座を受講し、進学に向けての学力向上を図る。専門科目に関しては推薦入試合格者を対象に大学が実施する「入学前準備講座」に向けて、合格後も引き続き講座を受講し、スムーズな接続を図る。

③ 基礎学力検査の実施

[日程] 7月9日(火)

[試験科目] 国語・英語(60分)

[実施方法] 作問・採点を大学側、試験の実施・監督を高校側で行った。

[受検者数] 98名

[結果の取り扱い]

結果に関して大学・高校で共有した。大学、短期大学それぞれで得点のラインを4段階に設定し、夏休みの三者面談で生徒にフィードバックを行うことで11月の入試に向けての学習の指針とした。

④ 推薦入学選考の実施

[日程] 大学：11月19日(土)、短期大学部：11月20日(日)

[試験科目] 大学：基礎学力テスト(国・英)、小論文、面接 短期大学部：小論文、面接

⑤ 合格から入学までの指導

- ▶ 栄養科学部栄養科学科、フード・マネジメント学科、短期大学部食物栄養学科合格者には理科の専門科目に関する講座を12月に実施。
- ▶ 大学側実施の「入学前準備講座」を受講。

Ⅲ 実施報告書－研究課題④

〈3〉 高大連携による説明会・模擬授業等の実施

① 学部学科説明会・模擬授業

[日程] 学部学科説明会：6月10日(月)、14日(金)、17日(月)

模擬授業：7月16日(火)、17日(水)

[対象生徒] 高校1・2年生希望者

[内容] 各学部・学科に関する説明及び模擬授業

○ 学部説明会 於：本校

系統	日	時	学部学科	担当者	参加者数
栄養系	6/10 (月)	16:20～17:45 (75分) 【各学科25分】	栄養科学部	今井 克己	81
			栄養科学科		
			栄養科学部	薬師寺 哲郎	
			フード・マネジメント学科		
食物栄養学科	三堂 徳孝				
ビジネス系	6/14 (金)	16:20～17:10 (50分) 【各学科25分】	キャリア開発学科	岩田 京子	52
			流通科学部	浅岡 由美	
			流通科学科		
教育系	6/17 (月)	16:20～17:10 (50分) 【各学科25分】	幼児保育学科	古賀 和博	79
			教育学部	野上 俊一	
			児童幼児教育学科		

○ 模擬授業 於：中村学園大学

日	時	学部学科	担当者	テーマ	参加者数
7/16 (火)	16:40 ～ 17:30	食物栄養学科	島田 淳巳	野菜を食べて夏を乗り切ろう！！	19
		キャリア開発学科	T.H.ケイトン	Let's learn! - International Food and Restaurants	32
		幼児保育学科	松岡 聡美	子どもと音楽 ～乳幼児の豊かな感性を育む音楽表現～	31
7/17 (水)	16:40 ～ 17:30	栄養科学科	安武 健一郎	生活習慣病予防の極意：転ばぬ先の杖	50
		フード・マネジメント学科	池上 徹	私たちの生活に身近な微生物 ～食品の生産や地球環境保護への貢献～	9
		教育学部	野上 俊一	心理学が研究した子供の心	51
		流通科学科	日野 修造	やってみよう 会社の経営診断 ～テーマパークのカルテから～	40

〈4〉 SGH 事業と高大接続

① ポートフォリオの作成

SGH 事業への取り組みにおいて、学校生活の諸活動を探究活動と連動させ、教育活動の体系化を図る「キラリ・キラリ プロジェクト」を開始した。その一環として、高大接続改革に伴い大学入試で主体性の評価が重視されるため、生徒が諸活動に関して振り返りを行い、その履歴を蓄積していくためにポートフォリオの作成を行った。平成30年度入学生より iPad を導入し、Classi の「振り返りアンケート」に回答する形で蓄積を行ってきた。令和2年度は次年度の入試への活用を目指し、個々の活動履歴を集約し、「1年間の活動記録」としてまとめた。

[1] 基本的な方法

学校行事や諸活動の担当責任者から「振り返りアンケート」を送信。アンケートに回答する形で蓄積する。

[2] 「振り返りアンケート」実施例

- ▶ キャリア教育関係：キャリアガイダンス、中村学園大学・短期大学部学部学科説明会、オープンキャンパス参加レポート等
- ▶ 生徒会関係行事：運動会、文化祭
- ▶ SGH 事業関係：食のサミット、グローバル・キャンパス、SGH 報告会
- ▶ その他：校内外考査、人権教育、1年間の振り返り（資格取得等含む）

[3] 「1年間の活動記録」

3年生での志望理由書作成等にも活かせるように、委員や所属部活動や、参加した大会・行事等を名称のみ記載するのではなく、その中で自分がどのような取り組みを行い、それによって何を考え学んだかを具体的に記載するよう指導した。生徒の諸活動での主体性・協働性・多様性の「見える化」へとつなげた。

■ ポートフォリオの記述例



② 新コース制におけるカリキュラムの見直し

高大接続改革における2021年度新入試に向けて、平成30年度入学生からコース編成を見直した。特に併設校推薦入試は、対象となるコースを拡大した。さらに令和2年度入学生よ

Ⅲ 実施報告書－研究課題④

り、従来の SG クラスに代わり、1 年次から GI（グローバル・イノベーター）クラスを設置し、3 年間を通しての効果的なプログラムの実現を目指す。

③ 留学生の併設大学への進学制度の協議

受け入れた留学生の併設大学への進学を支援するため、留学生枠についての協議を進めた。また併設校推薦枠での進学も可能になるよう、内規の改定を行った。

④ 大学公開授業への生徒参加と科目履修生制度の実施

併設大学との高大接続プログラムをより充実させるために、新たに大学公開授業への生徒参加制度と、科目履修生制度を導入した。高校 2 年生に対し、6 月に公開授業の生徒参加を試験的に行い、その実施状況を踏まえて、大学後学期の科目履修生制度につなげた。高校 1 年生には 11 月の公開授業から参加を募った。

[1] 公開授業への生徒参加

従来は中村学園大学及び系列の中村学園女子高等学校、中村学園三陽高等学校間の教員の研鑽のために実施していた公開授業に対して、今年度は生徒参加制度を導入した。

a 実施手順

大学からの告知 → 生徒が受講する授業のピックアップ → 生徒への受講希望調査
→ 受講人数の調整 → 大学への連絡 → 受講 → 受講レポートの作成・提出
→ 大学との相互評価

b 実施概要

▶ 前学期：6 月 10 日(月)～17 日(月)

受講講座 7 講座 受講生徒数 16 名（高校 2 年）

▶ 後学期：11 月 6 日(水)～8 日(金)

受講講座 11 講座 受講生徒数 44 名（高校 1 年 33 名、高校 2 年 11 名）

i 生徒が受講する授業のピックアップにあたっては、受講しやすいようにできるだけ大学 1 年生を対象とした講義の中から選んだ。

ii 受講中における正課の授業は公欠とした。

iii 受講レポートは、受講中は配付された受講レポート用紙に講義内容等を記録し、その後、Classi で配信した「振り返りアンケート」に回答する形でポートフォリオとして蓄積した。

iv 大学の担当部署と成果や課題に関して相互フィードバックを行った。

■ 公開授業受講案内 (抜粋)



News

中村学園大学・短期大学部の
生の授業を参観できます

初の企画として、中村学園大学・短期大学部の実際の授業を本校生も参観できるようになりました。対象講義・時間は以下の通りです。中村学園大学・短期大学部を希望している人はもちろん、それ以外の人も、興味のある人はぜひ参観してください。ただし、今回は1つの講義につき本校生は5人までです。希望者多数の場合は抽選します。

参観可能な講義(講義番号1・6以外はすべて1年生を対象とした講義です)

学部学科	月日	曜日	時間	番号	講義題目	担当先生	内容
大学共通	6月10日	月	①	1	食の博多学	松隈 美紀 先生	パワーポイントと資料を使って博多の食文化、郷土料理を季節ごとに説明し、博多の食文化・郷土料理について深く理解してもらう。
栄養科学	6月10日	月	⑤	2	管理栄養士入門	安武 健一郎先生 渡邊 啓子 先生	管理栄養士とは何か? どのようなことを社会から期待されているのか? そのためには何を学習すべきか? など、管理栄養士を目指すためのファーストステップを、8項目に従って修得する。
フード・マネジメント	6月12日	水	②	3	食品化学	太田 英明 先生	食の専門家になるための基礎教育科目。人間と食品の関わりや食品成分表の見方、タンパク質・脂質・炭水化物・ビタミン・ミネラルなどの栄養素や食品の色・味・香りの機能性などについても学ぶ。
教育	6月17日	月	⑤	4	特別支援教育	藤瀬 教也 先生 益田 仁 先生	障がいのある幼児児童の学習上・生活上の困難を理解するとともに、指導計画や支援計画等の理解を通して、教育活動や指導法について学ぶ。授業ではグループ活動を取り入れている。
流通科学	6月14日	金	④	5	現代ビジネスと社会学	山田 啓一 先生 中村 芳生 先生	総論として、ビジネスと社会学、グローバル化、IT化、地球環境問題などについて学習する。各論として、少子高齢化、東京一極集中、外国人労働者などについて学習する。
短期大学部共通	6月11日	火	⑤	6	中村学	松尾 智則 先生	中村学園の歴史、建学の精神を理解することを通じて、本学の学生としての誇りとアイデンティティを醸成する。6/11は学生によるグループワークのまとめ発表会の予定。
食物栄養	6月12日	水	⑤	7	栄養士基礎講座	森脇 千夏 先生	栄養士資格取得に向けた導入教育。栄養士としての職業倫理や使命について考えるとともに、現場で活躍する先輩栄養士の業務内容について知ること、今後の学修目標や卒業後の進路について考えていく。
キャリア開発	6月12日	水	④	8	コミュニケーション基礎	藤島 淑恵 先生	ビジネス分野の科目として位置づけられ、社会人として求められるコミュニケーション能力について学ぶ。講義に加えてグループワークやディスカッションを取り入れることで、コミュニケーション能力の向上を図る。
幼児保育	6月10日	月	③	9	教育課程総論	櫻井 裕介 先生	子どもの発達過程に沿った指導計画を作成するために、保育の基本と子ども理解を深める知識を解説する。

大学の時制		生徒の公欠時間		注意事項
1時限	9:00~10:30	1・2限		①推薦を受けたい人は参加を奨励しますが、人数制限がありますので、推薦要件には利用しません。 ②授業や課外は公欠になります。 ③レポートの提出があります。
2時限	10:45~12:15	3・4限		
3時限	13:05~14:35	5・6限		
4時限	14:50~16:20	6・7限		
5時限	16:35~18:05	放課後課外		

申し込みは

➡

Classiのアンケートで配信
 6/1(土)までに回答してください

■ 受講生徒レポート（抜粋）

<p>学年</p>	<p>受講レポート用紙に従って、以下のことを書きましょう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 今回受講した講義（設問1の選択肢の講義タイトルおよび、当日の講義テーマがわかればそれも記入） 2. 講師の先生のお名前 3. 講義の内容について <ul style="list-style-type: none"> 【1】説明や講義の内容 【2】興味・関心を持った所 【3】感想など 【4】次回、受けてみたい内容や説明していただきたいこと
<p>高校1年</p>	<p>フランス語Ⅱ テーマ:自己紹介 2ポータル先生 3.【1】自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 【2】①グループで協力して自分たちで考えていた所 <ul style="list-style-type: none"> ②分からなくてもできるまでやっていた所 ③先生や大学生の方々が話していることがわかってみたい所 ④英語や日本語と少し似ている所 【3】フランス語はただ興味があっただけで全然知らないし、分からないけど初めて聞いて、話してみても楽しかったです。この日は自己紹介をチームで言い合ったりして、私も実際にやってみて難しし、分からないけど分かった時がとても楽しかったです。フランス語は少し日本語や英語に似ている所があったり、アルファベットで書かれてあるけど読み方が英語と違ったりするところが面白かったです。私はいつかフランスに行ってみようというのがある、フランス語を学ぶことでもっとフランスに興味を持ったし、もっと行きたいと思うようになりました。わからない文学だからこそ、1人ではなくチームで楽しく覚えることや話すことができたのでフランス語を今回受けてとてもよかったですと思いました。 【4】幼児・保育関係
<p>高校1年</p>	<p>【講義名】マーケティング論(マーケティングミックス後半) 【先生のお名前】手嶋康則 先生 【講義の内容について】</p> <p>①4P「マーケティングミックス」のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> *product *price place × promotion <p>段階価格:「人は多くが普通の価格を選択する」という考え方(1,2,3のどれがいいかを聞くと2を選ぶ) 赤字があることを「ロスリーダー」という</p> <p>↓</p> <p>マージンミックス:トータルの値段で赤字にもっていくこと 価格バンドリング:単品で注文するよりもセットで注文して、客も店もwin-winになること キャプティブ価格:主力商品を安くし、継続商品を高くすること ▼スキミングプライス政策:最初は値段を高くして、後から低くしていく ▼ペネトレーティングプライス政策:みんなに手に入れてもらうために値段を安くし、どんどん高くしていく(キャプティブ価格と似ている)</p> <p>チャネル:製品がどのような場所をとって顧客の手に渡るかの流通経路 o2o(オンラインtoオフライン) ↓ omo(オンラインmergesオフライン)</p> <p>② ・売り方によっていろいろ名前が変わること</p> <p>③ ただ単にものを売るだけではなく、様々なことを考えながら売っていくのは大変そうだった。いろいろな手法を考え、どうやって買ってもらえるかを考えるのは勉強になった。先生も、体験したことや身近なお店を例にして教えてくれたので分かりやすかった。</p> <p>④ 特に無し</p>
<p>高校1年</p>	<p>1.栄養指導論1 行動科学論 2.吉田弘子先生 3.【1】行動科学について ヘルスビリーモデルについて</p> <ul style="list-style-type: none"> 【2】対象の人にわかりやすく、簡単に説明すること 対象の人に障害性を感じさせないように話すということ 全熟考期から熟考期に行くためには、軽く情報提供し関心を持ってもらうことが大切だということ 自分の立場を知り、家族への影響を考えて話すことが大切だということ 【3】病気になる人や、食事治療が必要な人に心配をさせずに自己効力感を持ってもらうことが大切だということがわかりました。そのため、難しい計算などは自分たちがしてその結果などをわかりやすく相手に伝えたり、利点を並べて優しく説明することが大切だと思いました。ただやるんじゃなくて話し方で相手の考えが変わると思いました。グループでやるなどの他人の援助も大切だと思いました。 【4】フードマネジメント学科などの違う学科の授業を受けてみたいです。

[2] 科目履修生制度の導入

大学の講義科目を先取りで受講することで、大学での学びに対してより興味・関心を深めると同時に、大学進学後の単位認定につなげることで大学での科目履修がより広く選択できるという高大接続の本来の目的に添うものになることを目指した。

a 実施手順

大学からの告知 → 生徒履修講義のピックアップ → 生徒への説明
 → 生徒への履修希望調査
 → 大学への連絡 → 履修に当たっての説明会・履修登録等の手続き
 → 履修（15回）→ 試験（もしくはレポート）→ 結果の通知
 → 大学との相互評価（予定）

b 実施概要

- ▶ 後学期：9月第2週～1月
 受講講座 11講座 受講生徒数 10名（高校2年生10名）
- i 単位認定のためには15回の履修が必要となるため、公開授業とは異なり、正課の授業時間外の講義をピックアップした。高校生が受講しやすい共通の教養科目の中から設定した。結果的に火曜及び木曜の5限目（高校生は放課後）の時間帯での履修となった。
- ii 履修生の募集に当たっては、ピックアップした講義のシラバスをClassiに添付して、シラバスを見て選択するという大学の履修選択に近い形で行った。
- iii 履修が決定した生徒は、大学の教務部から履修に関する説明を受け、ポータルサイトに登録して講義に関する連絡や成績の確認ができるようにした。

c 実施結果

- ▶ 履修生10名全員が合格し、単位が認定された。

4－（2）－c 海外提携校との連携

<1> ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ（KCC）との連携

海外進学を希望する生徒を支援するために、中村学園はKCCと協定を結び、基準以上の英語力を持つ生徒が入学試験免除でKCCへ進学できる制度を作った。生徒・保護者を対象に進学説明会を実施し、今年度は2名（※）が初めて進学する予定である。

※ うち1名はアメリカ国籍保有者につき、協定に従って進学をする生徒は1名。

説明会の実施

[日程] 6月7日(金) 16:20～

[場所] 視聴覚室（参加数 28組）

Ⅲ 実施報告書－研究課題④

「3＋2＋2」プログラム

- ▶ 高等学校3年 → (準備コース 0.5年) → KCC (大学1・2年)
→ ハワイ大学等の海外の大学、または中村学園大学等、国内の大学への編入(大学3・4年)
- ▶ 推薦入学条件
TOEIC430点以上・英検準2級以上 → 入学前準備コース → KCC
TOEIC650点以上・英検2級A以上 → KCC

〈2〉 その他の大学との連携

今年度、新たにウズベキスタンのライシーアム高校 (Academic of Lyceum Westminster International University in Tashkent) と連携校となったことにより、ライシーアム高校の系列校であるイギリスのウェストミンスター大学とも提携できることになった。連携の内容と進め方の詳細は今後詰めていく。

また、アメリカのカリフォルニア州にあるマーセッド大学とは、現在のところ連携の内容を協議中であり、双方の同意が得られれば正式に提携する予定である。

4－(3) 評価

検証評価方法

- 1) 「探究科」は論文作成と ICT 活用により、問題解決能力、科学的思考力、探究学習態度をルーブリックによって評価する。
- 2) 高校と大学の双方から評価する。

構想調書に基づく評価

- 1) 「探究科」にてルーブリックを運用し、クールごとに評価を行った。詳細については p. 95 「現状と研究課題③ 3－(3) 評価」を参照。
- 2) 併設校に対する新入試制度の実施は本年度で3回目である。大学の学部・学科の内容を理解し、目的意識を持ち進路選択につなげるという点において、このシステムはほぼ完成したと言える。また、初年度からの課題である「SGH 事業での取り組みの成果を、直接的に入試選考での大学側の評価に加える」という点に関しては、まだ実施には至っていないが、「育成入試」といった制度の導入を構想中である。

実践内容の評価

SG クラス選考について

- ① 今回が5回目かつ SG クラスとしては最後の選考となった。ここで培った選考のノウハウは、今後の GI (グローバル・イノベーター) クラスの選考を含め、他の選考に生かすことができ

る手法であるので、十分に活用していきたい。担当部署を進路指導部から今年度に新しく発足した教育開発部に変えて実施した。担当者で十分に引き継ぎを行ったため、特に問題なく進めることができた。クラスの説明に例年より時間を費やしたことが功を奏し、今までで最も多い 36 名の希望者を得ることができた。生徒のグローバル意識や探究活動についての興味・関心等が高まった結果と言える。今回の選考の結果、適格と判断した 30 名を合格とした。

SG クラス 3 期生の卒業実績について

- ① 国公立大学や難関私大の A0・推薦入試では、課題解決能力が問われる試験が年々増えているが、こういった種類の試験において力を発揮した生徒が多く見られた。中でも小論文型入試、集団討論形式入試では、アクティブ・ラーニング型の授業で養成された学力が有効であった。
- ② 正課の授業のみならず、校外での取材活動やボランティアを通して獲得した多角的な視点、経験に裏打ちされた知識、物怖じせず自分の考えを伝達する姿勢が、学力を厚みのあるものとし、将来の学習目標を明確にした。
- ③ 3 期生 29 名のうち佐賀大学をはじめとする国公立大学に 4 名、立教大学、青山大学、法政大学、関西学院大学をはじめとする私立大学にのべ 28 名、海外の大学に 3 名が合格した。特に、探究科での活動を活かした志望理由書の作成、面接、プレゼンテーション等の入試方法で 16 名が合格した。

高大連携について

- ① 併設校新入試システムそのものはほぼ完成したと言える。今年度は 7 月の基礎学力検査を受検した後、他大学への志望変更した生徒もおり、昨年度より併設校推薦入試受験者は減少した（令和元年度：78 名、令和 2 年度：68 名）。「ミスマッチを防ぐ」という目的に鑑みれば、決してマイナス要素ではないが、生徒の志望校の確定時期や、志望変更への柔軟な対応という意味では、基礎学力検査の実施に関しては時期や内容等の再検討が必要である。
- ② ポートフォリオの作成に関しては、昨年度から「1 年間の活動記録」で学年毎の活動を集約する形を取り入れたが、今年度は生徒の活動について「主体性・協働性・多様性」の観点を踏まえて記載するように指導した。結果として、昨年度に比べより内容の濃いものにすることができた。
- ③ 今年度より新規に導入した大学公開授業への生徒参加及び科目履修生制度の実施に関しては、大学との相互評価の中で運営上の問題点がいくつか指摘されたものの、一定の効果が得られた。対象となる授業のピックアップや募集方法、受講者引率等の細かな部分での改善は次年度への検討事項である。大学との時制や行事の違いにより、生徒が放課後に 15 回の講義をすべて受講するのは、かなり困難であった。そのような状況の中で履修生の人数は 10 人に絞られたものの、これらの生徒はすべて合格し、単位取得できたことは評価できる。併設校推薦の決定生徒が 3 年の後学期に履修生として前倒して大学の単位を取得できるようにする等、制度の充実を検討していきたい。

5 課題研究以外の取組

5-1 英語運用能力の向上

概要

グローバル・リーダーにとって、優れた英語運用能力は欠くことはできない。他国の人々との交流や共同作業をスムーズに行うことができる。そのために以下の取り組みを行った。

実践内容

- 1) 高校1年で実施するグローバル・キャンパスでは、様々な国からの留学生と共に、英語で食に関する探究テーマについて協働学習をすることを通して、異文化理解を深め、コミュニケーションスキルや言語運用能力の向上を目指した。文化祭では、グループの発表でを使用した掲示物や個人の探究レポートを掲示した。
- 2) 高校2年のSGクラスでは、ディスカッション（英語学習・ことわざ・自分の好きな場所について）やプレゼンテーション（水質汚染・日本と世界の食文化・福岡を住みよい街にするための解決策）を実施した。高校3年のSGクラスでは、食のサミットに向けたプレゼンテーション（水質汚染や環境問題）の練習やディベートに挑戦した。
- 3) CEFRのB1～B2レベルをSGクラス全員が到達するために、GTECや英検の受検を推奨し、生徒の英語レベルの向上について測定・評価した。

評価（取り組みの効果）

- 1) 高校1年全生徒による2泊3日のグローバル・キャンパスでは、PBLによる協働学習を全て英語で行うことにより、生徒が自らの英語運用能力を認識し、その後の学習意欲の向上にもつながった。ここでの経験や、7ヶ月間にわたって在籍したアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生10名との様々な交流を通して、英語でコミュニケーションをとることへの抵抗感が減り、間違いを恐れず発話する姿勢が見られるようになった。
- 2) 高校2年のSGクラスでは、まず英語の論文を読むことにより、知識の幅を広げるだけでなく、多様な考え方や批判的に読む力を身につけた。また、プレゼンテーションで必要な構成・話し方・声・強調等を学ぶことができた。高校3年のSGクラスでは、必要な情報を取捨選択し、相手に分かりやすく伝えるためにはどうすれば良いかを考える力が身についた。
- 3) B1レベル以上の生徒数がSGH対象生徒（高校1年全クラス・高校2年SGクラス・高校3年SGクラス）で44名、SGH非対象生徒（高校2・3年SGクラス以外）で101名の計145名であった。昨年度のB1レベル到達者94名と比べると大幅に増加した。